
デュエリスト アシュマ 第七話 予言の都

高岡 佳司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デュエリスト アシユマ 第七話 予言の都

【Nコード】

N5690F

【作者名】

高岡 佳司

【あらすじ】

大陸の西に位置する半島の外れにある、アールヌー国は魔導石の宝庫。その魔導石を狙ってノーツ連邦がアールヌー国を支配下に。アールヌーはノーツ連邦からの独立を宣言して戦闘に入る。今や世界のあらゆる陣営がアールヌーに集まって、一触即発の危機に。アシユマ達一行はとんでもない使命を受けて……。SF剣戟冒険アドベンチャー第七弾！デュエリストアシユマ『第七話予言の都』ただ今参上！

主な登場人物

アシユマ・アトー

この物語の主人公。

本名をアシユマ・アトー・ショアク・アシユオン・ヒョウエ・シバと言う。

イレギュラーナンバーと呼ばれる人造人間で、七賢人によって造られた。

年の頃は二十三丁四。

ザンバラにきられた、少し濃い目の栗色の髪の毛。

しなやかで猫科の動物を連想させる鍛えられた肉体。

彫の深い端正な顔立ちに、髪の毛と同じ色で、深い影と虚無感を湛えた瞳。

どこか暗い影を刷いている、美形の青年。

謎の多い刀、『万人殺しの妖刀・鬼虎』を遣う。

先のイルドリア武道大会で非公式ながら優勝し、先日ドラステイヌ共和国主催の武芸大会の優勝者と対戦し勝ちをあげ、これも非公式だが、武器を扱う武芸者としては世界一となった。

アーチエルとは恋仲。

アーチエル・アップルトン

栗色の長く伸びた髪の毛に、栗色の潤んだ大きな瞳と、濡れたような桜色の唇を持ち、黙っていれば人形かと思まごうばかりの美形の少女。

レキシタニア王国の王女である。

ただ、人形のようにと言われれば冷たい印象を与えがちだが、見

てみれば温かみがあり優しい感じのする少女で、事実、その通りの物を持つ少女である。

破壊の権化『バヴェル』のキー。

それが故に様々な勢力からその身を狙われる。

弱点といえば、戦いにおいて敵味方構わず、極端なほど血を見るのと死人が出るのを嫌う事。

アシユマとは恋仲。

オルバニアン・マグマイヤー

本名をルーラン・ノリトレアと言う。

ノリトレアの正式な王位継承者なのだが故あって今は黒龍号で寝起きをしている。

刀と銃、両方にいいセンスを発揮しまた、魔導機兵に乗らせれば右に出るものがないほどの腕を見せる。

また、好むと好まざるとに関わらず、喜怒哀楽のはっきりした性格である。

ヨディ・ヨフル

サイコ・フライヤー『黒龍号』の艇長。

年の頃は二十五、六。

紺碧のストレートのロングヘア、細面でどこか人懐こい顔立ちをしている。

この若者普段は馬鹿なことばかり言うが、時々剃刀を思わす鋭い事を言つては皆を驚かす。

その正体は、盗賊『ダスト・モンキー』。

しかしのみならず本当の顔はアルスティーン・ノリトレア。

ノリトレア王国の王子であり、オルバニアンの義兄に当たる。

アルミナ・ラ・シア

言いたい事は、はっきり言う。

口の悪いのが玉に瑕。

戦利眼なる特殊な能力を持つ身の丈程の大剣使いの少女である。

顔かたちは目鼻立ちがはっきりとしていて、きりつとした美少女である。

眼帯を取って両目が開けば赤い眼と黄金に光る眼が見れるはずである。

女賞金稼ぎで、別命『隻眼のアルミナ』

エファール・ソーフア

年齢は二十三。

アシユマを好いていた事もあるが、今はヨディの事が好きで好きでたまらない様。

恋人同士でもある。

剣の実力は折り紙付き。

玉に瑕なのが怒りに任せると周りが見渡せなくなると言う事。

借金癖があること。

これさえなければ優しく美しい女性であると言えるよう。

『閃光のワルキューレ』とは彼女の事である。

リイナ・アナン

アーチエルの級友。

体に似合わず大振りで鉈の様なククリを使う。

正体はアシュマと同じイレギュラーナンバーでコードネームは『蜘蛛』。

戦闘のセンスに関してはもしかしてアシュマの次に実力があるかもしれない少女である。

それ以外はまだ幼さの残る美少女で、とてもそんな事が出来るとは銀龍スタッフのなかでも、思っていないだろう。

アン・デボン

アーチエルより三つ年上。

いわばアーチエルの姉的存在。

元々はアップルトン家のメイドとして働くが、数奇な運命からかアーチエルと共に戦場にも付いて回る不遇な人。

ただし本人はアーチエルのお側にいられるだけで幸せらしい。

アベニ・ロー。

以前はどこぞの国で草^{スパイ}をしていた。

歳は老いているが、腕は確か。

今は、故あつて黒龍号にいて、ヨデイ付きの間者になっている。皆に言わせれば影が薄いのだが、それが忍びの者にとっては眼目であるといって喜んでいる。

色々と重宝しているようだ。

最近アシュマ直伝の秘剣・朧霞と秘剣・空蟬を使い多大なる戦果を上げている。

アリシアナ・コクレト

黒龍号の整備士

メカニツクのスペシャリストである。

程よく鍛えられ、引き締まった肉体を持っている。

鼻筋の通った中々の美人でもある。

軍曹。

オロ・エバス

汎用型電腦装置などの基本OSを作って財を成し、今では、鉄鋼や貴金属、造船や飛行機、果ては魔導機兵の様な兵器なども取り扱っている豪商。

今や世界の五パーセントは彼の財力とまで言われ、唯一七賢人と対等に渡り合っている数少ない人間。

ディーヌ・アデュニ

アールヌー国の第一王子。

王位継承権は自ら放棄。

未来を見通せる特殊な力を持っている。

レンヌ・アデュニ

アールヌー国の第二王子。

王位継承権は第一位。

年齢以上に子供っぽい。

サースー・ウィー

アールヌー教の師父。

また、アデユニ、レンヌの師。

クララテリア・アルサ・エミルトン

修理船『トーガイア』の管理官。

ベビーフェイス、見事なボディライン、豊かなバスト、三つ編み、メガネとロリコン趣味の者達には堪らない姿形をしている。

規則にうるさい。

23歳、大佐。

ラフェア・アモン・トーフイア

27歳、大佐。

修理船『トーガイア』の艦長。
職人気質。

よくクララテリアと衝突する。

ミアネ・コースティア・イチモンジ

補給船『ゴハク』の管理官。

24歳、大佐。

程よくだらけてる。

クララテリアとは幼ない頃からの付き合い。

エメティア・レノン・プロフィール

補給船『ゴハク』の艦長。

おっとりしている。

22歳、中佐。

アーヌ

鬼虎でも斬り裂けぬ硬い鎧を身に纏い、アシユマを付けねらう七賢人配下の剣の達人。

その腕はアシユマと拮抗する。

七賢人四人衆の内の一人。

アシユマ最大のライバル。

ガルマイン・デッド

自ら手に入れた遺跡『バヴェル』を以って、世界制覇の野望を持つ男。

アーチエルを付けねらう。

ノリトレア王国の武芸師範。

今はノリトレア王国の摂政に納まっている。

アング將軍。

アールヌーの將軍。

アデュ・ラア

異能の能力を持つ、恐るべき剣士。
アシュマを付け狙う。

ゲレ

七賢人のマシンナリービーイング（サイボーグ）の頭領。

ラナリア

七賢人のマシンナリービーイング。
テレパシスト。

オイーダ

七賢人のマシンナリービーイング。
鋭い爪を持つ。

ハイネ

七賢人のマシンナリービーイング。

犬頭。

鋭い牙を持つ。

ヘーム

七賢人のマシンナリービーイング。
腕がドリルになっている。

フィサ

七賢人のマシンナリービーイング。
口が量子ビーム砲になっている。

オーナ

七賢人のマシンナリービーイング。
幻惑攻撃を仕掛けてくる。
鞭を持つ。

エゲレ

七賢人のマシンナリービーイング。
超音波を発する。

タロス

七賢人のマシンナリービーイング。
強力と素早さを兼ねるマシンナリービーイング。

オドロ

七賢人のマシンナリービーイング。
トカゲのなりをしている。

ルル

七賢人のマシンナリービーイング。
超高速の攻撃を仕掛けてくる。

キャサフローレン・エルアチナ・リスパダハル

リスパダハル帝国の第三皇女。

エディアード・ウルフィ

キャサフローレン付きのナイト。
大剣を遣う。

序節

人の戦い。

神人の戦い。

血脈を同じくする者の争い、大地を血で染める事になるだろう。
これは嘆かわしい事である。

招かれざる者に蹂躪される事、これは辱められる事に等い事である。

人の血を天秤で量り売る。

これは人の所業にあらず。

この間、偉大な龍はその眼を潰される。

祝福されぬ命の者、地上に災いの黒い太陽を以って大地を抉る。
大変多くの者を亡者にさせる。

なんと恐ろしい事か。

おお、神よ、私はそれも見た。

嘆かわしい事である。

この世にあつてはならぬ光である。

これで終わりではない。

これが始まりである。

円形の大陸に住まうもの、既に幸福では無い。

その都に住まうもの、半分はもう福音を聞けない。

人々は炎によって半分を失う。

また、その人、巨大な亀に乗って神の都を潰そうとするだろう。

これ、はなはだ不忠な事である。

一時、地上に黒き光を見る。

私はそれを見た。

これはちいさいこそすれ人々を覚めぬ悪夢に導くものである。

その光こそこの世に有ってはならぬものである。

太陽の影で

我らが故郷、戦場になるであらう。

我らが故郷をそれはまさに土足で踏みじめる行為である。

一頻り蹂躪された後、悲しきかな、兄弟と相見えなければならぬ。
い。

その間、祝福されぬ命の者、敵の軍勢の半分を押さえる。

祝福されぬ命の者、既に鬼を携えており、対になる者、鬼を携えて来る。

この時、祝福されぬ命の者と対になる祝福されぬ命の者相見える
だろう。

この一対、空に予兆を残す。

私はそれを見た。

はなはだ不吉である。

このとき知恵の半球が出現するのを見た。

これにより我らが兄弟の諍い一旦は治まるだろう。

されど将来にわたり禍根を残すものである。

美しい処女の獵人と、愛と美の女神と、軍神と、大神と、農耕の

神。

それらが一つに重なる時、それは秘密が明かされる時。
対の鬼の秘密が語られる時。

しかしその秘密を語る時はあまりに短い。

その前後、龍は相反する痛みに身を囚われ、聖廟、鷲、鎌等は、
祝福されぬ命の者による辱めを受けるだろう。

この日、又、天空に大地があつて、地上の人々、大層恐れ戦き混
乱する。

あの黒き太陽がこの世を救うとはこれ皮肉である。

嗚呼、私はそれを見た。

幾夜に渡りあの黒き光の正体を掴まんと、黒き卵を欲するものが
いる。

幾つかその黒き卵奪われる。

私はそれを見た。

祝福されぬ命の者、黒き卵を潰す為、世界中を捜しまわる。

その間、聖なる学び舎、鷲に襲われる。

学び舎の者、祝福されぬ命の者に助けられ大事には至らない。

この間一人の黒き野心家一人大地に立つ。

私はこの人を見る。

甚だ傲岸不遜な人である。

鷲、これを認めず爪と嘴でこれを喰らわんと欲するだろう。
此処に祝福されぬ命の者、壁になり、盾となり、矢となる。

その後、もう一人の黒き野心家、鷲の為に敵を打ち倒す剣になる。

私はこの人も見る。神の人に近い間柄である。

聖廟もこれに立つが、頭を射抜かれ大事に至る。

嗚呼、なんと私はそれを見た。

聖廟の信徒激しく怒り、世界を震撼させる。

二人の黒き野心家相容れず、ぶつかるだろう。

この時も祝福されぬ命の者、一方の野心家の盾となり、矢とならん。

病に伏せるもその役目は果たすだろう。

その働き悪魔の如し。

私はそれを見た。

その後一人の野心家もう片方を追いかけてこれを撃ち滅ぼす。

黒き野心家鷲の巢の中からひとり立つ。

ついに月へと至る道を人は見つけるであろう。

祝福されぬ命の者、われの僕の末裔どもを襲う。

祝福されぬ命の者の勝ちとなるだろう。

その後、黒き卵世界に散らばる事になるだろう。

嗚呼、これは有ってはならぬ事である。

祝福されぬ命の者、その光に飲み込まれこの世より消えうせる。

驚くかな、もう一人の祝福されぬ命の者現れし時、祝福されぬ命の者この世に出現す。

私はそれを見た。

世界に散らばりし黒き卵の所為により、世界より戦船集いて争う。

これ世界の行く末占う戦である。

しかしこれの勝者なし。

この間に龍は頭がすげ替わる。

またこの間に日もまた頭がすげ替わる。

この前後に天変地異あり。

祝福されぬ命の者と、祝福されぬ命の者との戦いがある。

私はそれを見た。

破壊の権化と祝福されぬ命の者との戦いがある。

その間、神人、天高く月におられる。

私はそれを見た。

神人、祝福されぬ命の者と月にて相見える。

祝福されぬ命の者、さながら悪鬼の如し。

私はそれを見た。

巨大な閃光が見えた。

是にて新生人類は滅亡する。

私はそれを見た。

我が予言もこれを以って成就する。

神は全てを見通せたり。

かくあるべし。

ターシャン。

大陸の中央より西の果て、大きな内海を越えて海に面し、その半島に寄り添っている国々がある。

ある時、その国々の土地に、世界を流浪する民が電撃的に国を建てた。

アールヌー国と言う。

そして民族紛争と言う名の争いが起きた。

その為この国を巡ってこの近辺の国々は争いが絶えなかった。

その上アールヌー国を独立国として承認するか、否か、国元連を真つ二つに割って紛糾していた。

それにこの半島に属する国々は品質の大変優れた様々な各種魔導石を産出する事で知られていた。

今現在、一部軍需産業が潤ったものの、世界的に見れば、経済危機に陥っているといえた。

これらを救う為にその豊富な魔導石で自由主義経済への参入が渴望された。

事実そうなる事を求められたし、そうなって欲しくもあった。

たとえばアールヌー国には多数の国が軍事援助もしたし、もし軍事的和平が叶い自由主義経済に参入が叶った暁には、砂糖に群がる蟻の様に援助国が魔導石の利権を吸い取ろうとするだろう。

その代わりにアールヌーを独立国として認めるための措置をとると言った。

つまりはそんな約束事を取り付ける国まで出てきた。

最近の事だ。

例えば、ノリトレアである。

この国は技術力は非常に高いのだが、資源に乏しかった。

今は貿易で物資をまかない、外貨を稼いでいる。

だが最近の政情もある。

一つでも物資の安定供給がかなうルートが欲しかったのである。

アールヌー国は対外的に好戦的な国でもある。

しかし好きで好戦的になった訳ではない。

宗教対立があった。

アールヌー国の国教はアールヌー教。

周りの諸国は国教がイーサ教。

宗教的対立があったのだ。

そして隣国と小競り合いをした結果、これは好機とノーツ連邦に占領され、今やアールヌー国はノーツ連邦の支配下にあった。

が、アールヌーは独立を宣言してノーツ連邦に戦端を開いた。

主に、アールヌーを独立国として認めないのは、アールヌーの近隣諸国とノーツ連邦の陣営である。

言わば、ノーツ連邦とその陣営に勝利すれば、アールヌーは独立国として認められるだろう。

目ざとくノリトレア王国、そしてアヘイビア連邦共和国も電撃駐留。

アールヌーの支援に回った。

即ち、一触即発、世界大戦の様相を見せていた。

一部噂によれば、これも今、巷を騒がしている七賢人の介入かと噂されたが、その噂も直ぐに立ち消えとなった。

だが、軍が動けばそれは戦場となって軍需産業が潤う。

死の商人としての側面を持つ七賢人にとって魔導石の鉱山の利益と相まって軍需産業が潤う事は何よりの事ではあった。

そういう意味では、今回、ノリトレアがその役目の一翼を担いそうな勢いであった。

「きみい今度こそ勝てるんだろっねえ」

サバンナ、アヘイビア大統領が言う。

サバンナ大統領は、これまでも勢い込んでマリク紛争地に軍を送り込んで全滅させられ、リスパダハル帝国では何も出来ないと言っ、とんだ恥を掻いた。

今度も失敗に終わっては支持率が落ちる。

世論から攻撃される。

それだけは絶対避けねばならない。

「きみい今度こそ勝てるんだろうねえ」

ノーツ連邦のアガツコフ書記長が言う。

彼もそうだ。

今度失敗すれば、いつ党代表の座から引き摺り下ろされても、おかしくないのだ。

徐々に双方の陣容が明らかになる。

アヘイビアにはダークファイアー。

ノリトレアのハーティアー二世号と、空母エルリナルティ（新造）

ノルブル王国には ブルドッグ。

ドラスティス共和国 フルーレ。

レボトミノ連邦共和国 ドートデーテ。

対するもう一方の陣容は、

ノーツ連邦には ウフタエフタ。

クーロン人民共和国 パイロン。

リスパダハル共和国 エシーデューティー、パラケーシ、ヘルガ
ギルテ。

面白いのはノルブル王国のブルドッグ。

これは、建設当初から言われていたことなのだが、艦首の形が、
イヌと言う動物のブルドッグと言う種類に、良く似ている事から、
国王自らその名前をつけたという。

また、クーロン人民共和国が、ノーツ連邦と陣を一緒にしている
が、この二国は特に友好国と言うわけでなく、寧ろ敵対関係に近い。
この二国がいつも陣を同じくするのは、共に全体主義国家の為と
いわれている。

そして帝政から共和制に移ったリスパダハル共和国だが、三隻共に
強力な艦である。

まずヘルガギルテだが、元はノーツ連邦の空中要塞だったのだが、オロ・エバス財団が接収、改装後リスパダハルに下げ渡されている。また、エシーデューティー、パラケーシ、の二隻は共にノリトレア製で強力な魔導砲と、ブラズマキャノンの連装砲を持ち、多気音粒子キャンセラーを装備する最新鋭艦である。

リスパダハルは特にどの国に対しても、意趣等は持っていないかった。

ただ、ここで、クーロン人民共和国とノーツ連邦に恩を売っておけば、後で何かしらの恩恵にあずかれるかも、と思いノーツ連邦側についたわけである。

全体主義でもなければ何でもない。
利益の事しか頭に無いのだ。

事実、実際良く頑張っているのが、クーロン人民共和国だった。

クーロン人民共和国等は、首都壊滅のありを受けて、首都再建を果たすのは良いとしても、官僚と経済開放を受けて富める新階級と、未だ経済開放の恩恵に恵まれない旧階級の溝は、広がるばかりで埋まる事を知らない。

いまやクーロンは、富める階級と貧しい階級の二極分化を経て、一触即発の状態だ。

それがこの間の首都空爆で、貧しい貧民層がどれだけ溜飲が下がった事か。

今や地方でも反乱が起きつつある始末である。

その情勢の中来たのだ。

負けて帰ることは許されなかった。

戦局は一つ間違えば世界大戦となる危険性を孕^{はら}んでいた。

両軍慎重にならざるを得なかった。

そしてこのまま戦局は膠着^{じょうちやく}状態となった。

オロは始め自体を静観しようとした。

が、アールヌーの資源がどうしても欲しくなり、アールヌー国に援助を打電、快諾を得た。

第一節 アデュ・ラア、発気の術

「と、言うわけだ。ヨディ」
と、オロが言った。

そこは、オロの邸宅の二階で広い廊下の曲がり角、ソファや椅子・テーブル・観葉植物等が置かれ、ちよつとした……いや、普通に歓談できるだけのスペースがあつた。

また、侍女たちに頼めばお茶等も頼めた。

「なにが、』と、言うわけだ。ヨディ』じゃありませんよ！ 行きませんよ僕は」

ヨディが拒否をした。

「ヨディ、頼む。行つてくれ」

「やですよ」

「戦闘行為は無いぞ？ 少しあるかも知れんが」

「その『少し』つてのが曲者なんじゃないか、いつも。だいたいにしてそのアールヌーと言うのが今、世界最大の危険紛争地帯じゃないの！ 行きませんよ僕は」

「たのむ」

「頼まれても行きませんよ！？」

「どうしてもか」

「どうしてもです！」

「じゃあ、エファールの今月までの借金、合わせて金五千六百万、耳を揃えて払つてもらおうか？」

「な、何で僕が……」

「亭主だろ？」

「う……」

「じゃあ、五千二百万まで返すわ」

エファールがやって来た。

「どうしたんだこの金？ まさか汚い金ではあるまいな？ マネー

「ロンドリングに私を使おうなどと百億年早いぞ!？」

「まさか、副業で得たお金よ」

「あの、宝石デザインのかい？」

「ヨデイが訊く。」

「ええ、そうよ」

「エファールが返す。」

「ひゃー、僕のエファール世界一!」

「これで来月お給料から四百万返せば完済ね」

「ブー。来月は四千八百万返していただきマース」

「なんでよ! 何でそんな金額になるわけなのよ!」

「元本利息でこうなりマース」

「何ヨそれ? 街金だってこんなことしないわよ?」

「街金がどうだか知りませんが、わがオロバンクではそういうことになってマース」

「きつた〜ねえ〜やつ〜」

「ヨデイが半ば呆れの怒り顔で言った。」

「ふっふっふっふ。金にはそのくらい執着しないと、このオロ様ぐらいにはなれないぞ? あーっはっはっはっはっ!」

「ああ、ここに正義の味方が現れて俺の四百万使ってくれなんていう奇特な人、いないかなあ〜」

「そこへアシユマがやってきて、

「何だ、ヨデイ。そんなに困っているんだったら、俺が貸すぞ?」
そう言った。

「……そう、丁度こんな具合に……って、アシユマ君!？」

「俺は金の使い道あんまり良く分かんからな。使ってくれ」

「形勢逆転ですなオロ……」

「ヨデイは得意顔だ。」

「うっつ……」

「さあ、どうする?」

「黒龍号を接收する!」

「あ！ きつたねえ！」

「黒龍号は元々私の船だ。私はどう使おうと異論はあるまい？」

「…… 負けたよ、オロ。で、何をすればいいんだい？」

「先ずはこれを見てくれ」

テーブルの上に立体映像がでる。

「これは？」

「補給・修理船だ。主に魔導機兵のな。左右に開き、魔導機兵を同時に修理できる。どのメーカーにも合ったパーツで修理できるし、カスタマイズパーツのみで作成された魔導機兵にも対応が出来る」

「素晴らしいですな」

ヨデイが言う。

「今回は主に外国人部隊用のパーツになるから、カスタマイズパーツも多くなるう。そこでこちらの補給船も使う。見たとおり蜂の巣状になっている。これが一個のサイコ・フライヤーになっている訳だが、これは足りなくなったパーツから本部、つまり私の所にだが…… そこに帰還して必要なパーツだけを戦場に持ち帰るというわけだ。結構優れものだろう？」

「本当だ。結構優れものだ。もしかしてこれの運用を僕が？」

新し物好きのヨデイは、自分に運用が負かされるのかと思い、眼を輝かせた。

「いや、君には今まで通り黒龍号の方を頼むよ」

オロにそう言われた。

「あ、さいですか。はい」

「まあ、後で艦長と管理官を紹介しよう」

「管理官？」

「そう、管理官」

「そういえば今回は、アロアオゲルは出張ってこないのか？」

アシユマがオロに訊いた。

「駄目だ。出せん」

オロがそう言った。

「なぜ!？」

ヨデイが訊いていた。

「我々には後ろ盾が……同盟できる国が無い。そんな中で各国の眼に障ることなく、アールヌーに感謝してもらい、戦後に有利な立場に立てるもの。それは補給と修理しかない。アロアオゲルなど^{もっ}以ての外だ。我々に敵意でもあるのかと、それこそ各国よりにらまれてしまう。出せる戦力は黒龍号が精々だ」

「そんなけちな事いわずにど〜んと出しましょうよ？ オロさん」
「分かってくれヨデイ。これで精一杯なのだ。本当に」

「う〜ん……あんまり得心したくありませんが……仕方ありませんか……」

「うむ。済まん……。じゃあ、艦長クラスの人間に引き合わせよう。ヨデイ、君は今日付けで『特務大佐』だ。エファール君、君も同じく『特務補佐官』だ。階級は少佐扱いとする」

「また、『何とか大佐』あ？」

ヨデイの抗議には無視をして、オロは携帯端末を手に取り……

「私だ。オロだ。直ぐにこちらに通してくれ。………ほら大佐クラスが続々来るぞ。心して掛からないと、ずーっとうだつが上がらなくなるぞ？」

「失礼します!！」

若い女性の声が廊下に響き渡った。

見ると若い女性の士官達がこちらに歩いてくる。

ヨデイとエファールが立って敬礼をした。

オロは勿論ソファの真ん中に座ったままだ。

で、アシュマはと言うと、アシュマも堂々とソファの、ど真ん中に座ったままだった。

それを見てエファールが、

(アシュマ、たつて、たつて!)

小声で何度も言った。

アシュマは仕方なく立ったが、アシュマの二振りの刀、鬼虎と、

逸鉄を杖代わりにして立った。その一連の動作は士官達の目に止まる事となり人によって対応が変わった。

まず、ヨディ側からの自己紹介が始まった。

「ど〜も〜。ヨディヨフルですう。黒龍号のキャップを勤めてます〜。どぞ、よろしく〜」

すると一人の女性仕官が、しかめっ面をして横を向いた。

そのタイミングで、ヨディが握手を求めてきたが、気付くはずも無く、同僚と思われる女性仕官が

（クララ！ クララ！ 握手！）

「！ こつ、これは失礼しました」

この女性仕官は声が裏返った。

「いえ、良いんですよ〜」

ヨディが言った。

当のクララと呼ばれた女性性は、

（なんて嫌らしい顔なの？）

嫌悪感を感じていたが顔には出さないようにしていた。

「クララテリア・アルサ・エミルトンであります！ 階級は大佐。

修理船『トーガイア』の管理官をしております。以後お見知りおきを」

「管理官〜？ はい宜しくね〜」

「ミアネ・コースティア・イチモンジです。階級は大佐。補給船『ゴハク』の管理官です。以後宣くう。……今晚どうお？」

「ミネア！」

「はい、クララ殿、以後気をつけます！」

「ラフェア・アモン・トーフィアだ！ 大佐だ！ 修理船『トーガイア』の艦長をやってる！ 宜しくな。おい！」

「はい、よろしくです」

「エメティア・レノン・プロフィアですう。補給船『ゴハク』の艦長やってますう。中佐ですう。よろしくですう」

「はいはい、よろしくねえ」

「エファール・ソーフア特務補佐官です。宜しくお願いします」

エファールが大人の色気を出して余裕しゃくしゃくとして言った。
一通り挨拶が終わって、アシュマの番になった。

「なに？ 俺もか？」

「頼むよアシュマ殿」

オロが言った。

「~~~~~」

「アシュマ君！ ここは一つ」

ヨデイも言った。

「~~~~~アシュマ・アトーだ。以上！」

そう言って、アシュマはソファに座ろうとした。
すると向うの方から手を差し出された。

「お名前はかねがね伺っております。剣名など」

「あんた、いい男だねえ？ 噂以上だよ。この優男」

「あんたのこと、イツツの親父から聞いてるよ、よろしく頼むぜ、
大将！」

「本物のお、『閃光のアシュマ』さんですう。宜しく願いしま
す」

「……よろしく」

アシュマはかったるそうに言った。

その後お茶会に移行し、ヨデイが

「管理官って何をするんですか？」

そう聞いた。

「管理官と言うのは、修理船の修理行程、補給船の補給行程を一手
に統括する官職です」

クララテリア管理官が言った。

このクララテリア管理官と言うのは、それはもう見事なボディラ
インと豊かなバストに

ベビーフェイス、三つ編みでおまけにメガネを掛けていて、ロリコン趣味の者達には堪らない姿形をしていた。

「あそ。僕はそんな官職より貴女の胸の感触のほうが……」

ヨデイがロリコンなのかは別として、豊満なクララテリア管理官の胸の前でヨデイは指をわしゃわしゃやった。

「ヨデイ特務大佐！ それはセクハラ……」

クララテリア管理官が言った。

その声を聞いたエファールが、

「あなた、今何をしようとなさってるの？」

ヨデイに面と向かって言った。

「す、済みません」

ヨデイは素直に謝り一応事無きを得た。

そして黒龍号のクルーの面々がヨデイの部屋に集まっていた。

「……で、そのアールヌーって国に行くわけだ」

オルバニアンが言った。

「まあ、そういうことになるだろうね」

ヨデイが言った。

「そうになると、魔導機兵の整備が必要だねえ」

アルミナが言った。

「あれ？ 整備はその補給艦……てのが、してくれるんじゃないのかい？」

「オルバニアン、あんたらしくない台詞だね。自分で納得いくまで整備する。それがあんたのスタイルだったはずだろ？」

アルミナがオルバニアンを注意した。

「そうだったな」

オルバニアンはあっさり自分の非を認めた。

「今回、一般兵の私は何をすれば言い？」

リイナが言った。

「そうだな、リーダーを見ていて貰おうかな」

ヨデイが言った。

「分かった」

リイナが言った。

「見方は分かるのかい？」

「サイコリーダーだろ？ 要はイメージスキャナの裏返しだ。外に念を放出して跳ね返ってきたものを捕える。ただしステルス処理された者には効果が薄い」

「凄いなリイナ君。どこかの木偶の棒とは大違いだ。ところで君はいつまでその人格でいられるんだい？」

「安心しろ。戦闘中にはこの人格でいてやる。感謝しろ」

「へへへっ……で、アーチエル様は……」

「私はいつものように半球板ですね？」

アーチエルが訊く。

「はい。ただ……」

ヨデイが続けた。

「ただ？」

「アシユマ君が鬼虎を使えません。シールドを百枚単位で掛けて貰う事になるかも……」

「ヨデイ。シールドは俺が掛けよう」

アシユマが言った。

「そうですね。お願いします。そうそう、オルバニアンにアルミナさん。貴方方に言おう言おうと思ってたことがあるんですよ」

「なんでい？」

「貴方方の戦いかたは見ていて危なっかしい。せめてシールドを……」

「聖なる女神タテトラム

聖なる盟約に従い、

汝をして我に光の加護を与えたまえ

汝、我を護りたまえ。

シールド！！　バイ、……」

オルバニアンのもつ白魔導石が強く反応している

「今度からそうするよ」

「はい、結構。あ、後ですね、最近また『アデュ・ラア』が暗躍しているみたいです。気をつけてください。……って、これは殆どアシマ君用のお話でしたね」

「『アデュ・ラア』って、何のことですか？」

アーチエルが尋ねていた。

「人の名前です。本人がそう名乗っているだけで、本名かどうかも分かりません。高名な剣術家や、武道家、特に武道大会で名を上げたもの。そういう人たちに戦いを挑んでは、勝ちを得、相手の命を奪っていくと、聞き及んでおります」

ヨディは答えた。

「アシマさま……」

アーチエルは不安そうな眼差しをこちらに向けてアシマの名を呼んだ。

「大丈夫だよ。アーチエル。俺の所には出てこない」

アシマはアーチエルを安心させるように言った。

「それなら良いんですけど」

それでもアーチエルの不安は晴れないようだ。

「さて、大体のことは話したかな？　後はアベ……」

「拙者ならここに。何で御座るかな？　若」

「……は特になし……っと」

「若」！」

「最後にアンさん」

「はい」

アンが返事をする。

ただし今回は……？

「今度僕とデートしていただだけませんか？」

「そんな私、困りますわ。だって……」

ゴン！！

エファールの鉄拳制裁がヨディの後頭部に見事ヒットした。

「御免なさいねえ、アンさん。この、『馬鹿！！』が余計なこと言
つて。おほほ……」

ヨディは気絶したようだ。

「じゃあ、アンについても、いつもどおりで言いかなあ？ みんな
あ」

オルバニアンが皆に聞いていた。

「オルバニアン様」

アーチエルがオルバニアンの名を呼んだ。

「なんだい？ 姫さん」

「アンは今回ここにいるべきかと思います」

「何を仰います。姫！ 今度行く所は日照が厳しい所とお伺いしま
した。洗物も多くなりましょう。女性の方々には、女性でなくては
困る事も、多々ありますよう」

「何の事を言ってるんだ？」

と、オルバニアン。

「生理よ生理」

と、アルミナ。

「あー」

「そんな時、お役に立てなくて何のメイドと言いましょう？」

「分かって、アン。今回はとても危険な所なの」

「ならば、尚更お側に」

「アン！」

アーチエルはつい、連れて行きたくなる衝動に駆られる。

「アーチエル様！」

アンもこうなったら、どこへでも付いていく気になる。

「こうしててもしょうがないから、多数決を取ります。アンが行く

のに反対の人……アベニ……アーチェル、アシュマ……三人！……次！賛成の人……アルミナ、リイナ、……エファール……三人と。……えゝ同数なので議長採決で俺も賛成に回って賛成四！反対三！アンを今回連れて行くことになりましたー」

「有難う御座います。有難う御座います。有難う御座います」

アンは何度も礼をしてまわった。

「後は無いかな……」

「……」

「よし、解散。出発は明日の正午。各自、一時間前には集合の事！以上！」

（大分良いけど、リーダーにするにはちょっと足りないかな？）

狸寝入りのヨディがそう思いながら、そのままの格好でエファールに引き摺られて行った。

「アシュマさま。以前、リスパダハルでのパーティで言われた事、覚えていらっしゃいます？」

アーチェルが言った。

「……アールヌー国の王子の言葉と言う奴か？」

「ええ……」

二人はディーヌ・アデュニ王子の使者サースー・ウィーの言葉を思い出していた。

『では最後にアシュマ様。貴方の運命が一番分からないと若が言っ
てらっしゃいました。ただ、人類の命運を担う人だと。それまでは
自ら命を絶つことは許されないと。また王になれるお方だと。そ
れも並みの王ではなく刀によってしか得られない王だと。それは本
人が好むと好まざるとに関わらず、なってしまうものだ。これ程
までの強運の持ち主は滅多に見られないそうです。それと若は可笑

しな事を言っておりましたな。……貴方は人ではないと」

『それにアシュマ様はいったんお隠れになりますが、大丈夫。カギは鬼虎にあります。ご安心下さい』

「気になります。せめて鬼虎の封印を解いていただけませんか？」
「断わる」

「何故で御座いますか？ 確かに、かの光の玉の事は気になりますが、鬼虎の防御力。あれは特筆するに価すると思います。戦艦からの砲撃にも耐えうる能力。せめてその防御力の為だけにでも……」

「アーチエル、一緒に寝ようか？」

「アシュマさまはぐらかさないで下さいまし！」

「はぐらかしていないよ。鬼虎は持つていく。これでいいだろ？」

「ええ、まあ」

「俺の部屋で寝よう。着替え持つておいで」

「はい……」

アーチエルはまだ納得できていないようだ。

「エバスコントロール、こちら黒龍号だ。発進時間となった。予定どおり空中でランデブーする。発進許可を」

ヨデイが言った。

『こちら、エバスコントロール。発進を許可する』

「では発進する」

黒龍号は上空へと舞い上がった。

三十分もすると修理船『トーガイア』が、更に三十分もすると補給船『ゴハク』が昇ってきた。

「皆さん方とは初の作戦行動ですな。どうぞ宣くう」

『いえ、こちらこそ』

『トーガイア』のクララテリア管理官が硬い挨拶をしてきた。

『そんなんじゃ、また、男に逃げられるわよ。よろしくねえヨディ艇長さん。今度お酒一緒に飲みましょう。ねえ?』

ミアネ『ゴハク』管理官がいった。

「あのねえ、全部筒抜けなんだけど。あんたも言い度胸してるわねえ」

エファールが言い放った。

『このくらいじゃないと、恋は実らないんでね? ヨディさん? 今度別回線使ってお話しましょ?』

「別回線も何も、ここの通信士、アタシなんだけど? 大体、別に良い男、他に居るでしょうに、アシユマとかオルバニアンとか!」
『オルバニアンて人はしらない。アシユマさんは顔と身体はバツチグーなんだけど人を寄せ付けないバリアがあるのでアタックできませーん』

「あんたホントにいけしゃあしゃあと、奥さんの居る前で」

『奥さんって言っても彼女に毛が生えた程度なんですよ?』

「あんた言ってくれるわねえ」

『おっとそろそろ爆発しそう。これで退散するわ。じゃあねえ、子猫ちゃん』

「こ、子猫? ……なんですってえ!？」

「ふふふ。破壊神エファールを子猫扱いする女官と言う者を初めて見たぞ。いや、『聞いた』か」

「アシユマったら!」

修理船『トーガイア』は魚の背びれの様な形をしていた。

それが中央、左右と三枚・四面に分かれて修理をする機能を持っていた。

修理する面は全四面あった。

それにエレベーターが何十機が各面についていた。

また補給船『ゴハク』は蜂の巣状に六角形のユニットが幾十にも

連なり、またそのユニット自体がサイコ・フライヤーであり、またユニットは七つに分かれて、それがまたサイコ・フライヤーと言うものであった。

ユニットには補給物資が詰まっており、それが底を付くとユニットのみが単体飛行をして本部に受け取りに行く。

ユニットには左右両面に同じ補給物資が詰まっており補給が滞る事は無かった。

その様な一風変わった編成の艦隊がアールヌー国にたどり着こうとしていた

修理船『トーガイア』と補給船『ゴハク』の連中とは、この国についてから分かれてきた。

そもそもの着陸地点が先ず違った。黒龍号はこの都の郊外。

修理船『トーガイア』と補給船『ゴハク』は遥かに離れた砂漠に。何故そんな砂漠などとはなれた場所に降り立たねばならないのか？それは艦の構成による。

修理船『トーガイア』と補給船『ゴハク』などは艦を大きく広げたり展開できるスペースが必要なのだ。

だから砂漠などと言うへんぴな場所に艦を降り立たせねばならなかった。

はじめ、それでもクララテリア・アルサ・エミルトン管理官などは、作戦立案の時から砂漠に降り立つのを嫌がった。

それは『砂』は整備の大敵であるからだ。

しかし悲しいかな軍人は、上からの命令には絶対服従である。

各管理官・艦長は泣く泣くこの地に降り立った。

ヨディは、神話の世界に来て、ある種感動に似たものを覚えた。
ここは聖者の国。

タインが、何千何万との教徒と共に、天に登った場所であるという、聖地タインの丘がある。

また、ここアールヌーには、国名でありタイン教の源流となった、アールヌー教があった。

ここにはまた、アールヌーの聖地、知恵の階段がある。

また厳しい戒律で有名なイーサ教を奉じる他の国々。

イーサ教の開祖イーサも、この地から地へと潜り、信者をこの地中から監視していると言う。

ここいら周辺は宗教的モザイク地帯となっており、昔から宗教戦争を繰り返してきた。

そして昔、戦闘が激化し、世界大戦へと広がりを見せた時期があった。

これを止めたのが当時のイーハンの国王、『アルステイン』イーハニア二世国王陛下であった。

丁度ノリトレアのアルスティーン王子（現在行方不明）の曾祖父にあたる。

余談だがつまり、今のアルステインは第三世と言う事になる。

ノリトレアとイーハンとは陸続きでないのにもかかわらず同民族である。

（と、言っても海峡程度の隔たりではないが）

それでもイーハンは極東の最果ての国であった。

話を元に戻そう。

で、その極東の国イーハンのアルステイン二世は全面戦争を避ける為に何をしたか。

腹を斬った。

自らの手で。

半島の国々に嘆願書を用意して。

国王は追い腹を斬る事を禁止した。

それでも各地で都合千余名が追い腹で死んでいる。

何だこの国は？

何だここの王は？

何だこの国の国民は？

これが世を震撼させたイーハン・ハラキリ騒動である。
はつきり言って世界中にショックを与えた。

ここまでさせておいて、戦争をするのかと。

大反戦デモが世界中で沸き起こった。

戦争どころではなくなった。

お互い戦争から手を引かざるを得なくなった。

それも、もう百年近い昔である。

そして極東の伝説も今や消えつつあった。

アールヌー国はそれなりに潤っていた。

市場には野菜、木の実、穀物、肉類。

明日の食事にありつけぬほど……と言うのはなさそうだ。

街の人々の顔色も明るい……『今の所』は。

言うのも先程戦端が開かれたという一報を受けたからである。

今の所、直接対決に至っていないという事で、本格的な武力衝突には至っていないという。

ただ、ノリトレアが積極的に武力介入をしているという。

不気味だ。

あそこは最近武力を整えて来たにしろ元来は技術立国であって軍事大国ではないのである。

そのノリトレアが軍事介入に積極的だとは。

ヨディは嫌な予感を禁じえなかった。

利益を追求するあまりにノリトレアは滅んでしまうのではないかと。

ルーンの黙示録を開いて読んだ。

サッパリだ。

何が書いてあるのかサッパリ分からない。

言葉は平易なのに何を表しているのかが分からない。

回りの人間が怪訝な顔をしている。

そうだったと気が付いた。

ここは、アールヌー国。

国教はアールヌー教。

タイン教の源流になった宗教だ。

タイン教はタインが救世主だとした宗教だ。

だが、何故かアールヌーの人々はタインを救世主だと認めたがらない。

救世主は他にいて、いつかその救世主がやってくることを今も信じている。

そんな土地柄の真ん中で、ルーンの黙示録を広げていてはそれは怪訝な顔もされよう。

ルーンの黙示録。

タイン教の信徒ルーンが神の霊によって見せられた『この世の終わりの記録』だ。

神がルーンに黙って示された所から、ルーンの黙示録と言う名が付いたといわれる。

だが、そのルーンの黙示録もタイン教の中では異端とされる。

何故なら、タインを祀る者が最後にタインの再臨によって救われなければならないのに、タインの再臨、タインの敵を打ち滅ぼす様、そしてタインを祀る者だけが救われるという最後の件、^{くだり}これが入っていないからだ。

「ヨデイ！ 置いて行くぞー！」

アシユマがヨデイに大声で伝えた。

「いやあ、失敬、失敬」

ヨデイが言った。

「そついやあ、この手のどこに来るので、徒歩で来るのって初めて

「じゃねえか？」

オルバニアンが言った。

「ここは王宮。」

だが王はいない。

王が崩御してから十余年。

この国のデイーヌ・アデュニ王子が即位をしたがらない。

理由はあるのだという。

一生妻を娶れないからだという。

性的に不能かと問われれば違うのだという。

理由を聞けば妻を娶ると純潔が失われ、未来を見通す能力が無くちからなるからだという。

王たるもの子をなしてこそ王。

それが子をなせないと有れば、王たる資格無し。

デイーヌ・アデュニ王子自らの言である。

その代わり弟のレンヌを、いずれ王にしようと考えていた。

また未来を見ると、そう見えた。

聡明で皆に愛される王になるだろうとみえた。

ヨデイが門番に取り次ぎを願った。

門番は直ぐに取り次ぎ歩いて王宮の中へ入って行った。

「長くなるかもしれないからな。日陰で休んでおけ」

そう言っアシュマはアンの所へ行き、

「荷物が多かったからな。疲れたろう。もっと早くに気付いてやればよかった。すまなかった」

そう言っアンの荷物を自分の荷物の所へ持つて言った。

「ああ、アシュマ様っあんなに優しいのね。感動」

アンは思わず漏らしていた。

「でしょ？ でしょ？ アシュマさまっホントは優しい人なのよ」

アーチェルが得意顔になっていた。

「わっ！ ビックリしました。アーチェル様」

「どうお？ 少し好きになっちゃった？」

「アーチエル様！ 大人をからかうものではありません！」

アシュマはもう既に地べたに寝て眠ってしまった。

暫くしても門番は帰ってこない。

待つてゐる方は段々と疲れてきて各々のスーツケースを横にして、

その上に乗って眠ってしまった。

ただ、アーチエルは寝るのを許されなかった。

はしたないからである。

アンも眠くてうつらうつらとしていた。

アシュマ不意に起き出してが二人のところへやってきて、

「格好を気にするな。暑い日差しの中を何時間も歩いてきたんだ。

少し休め」

そう言った。

「はい、そう致します」

アンが直ぐに折れた。

それだけ疲労の極みに来ていたのだろう。

（ああ、アシュマ様。なんてお優しいのかしら）

そんな事をアンは舟をこぎながら夢現ゆめうつに考えていた。

二人してスーツケースを倒してよりかかると直ぐに寝てしまった。

アシュマは逸鉄と鬼虎両刀持つと王宮外れの森の中へ入って行っ

た。

「待たせたみたいだな」

アシュマが虚空に呼びかけた。

「いや、そうでもないさ」

木陰から一人の男が現れた。

「流石はアシュマ・アトーだな。こちらの僅かな殺気を読むとは…

…」

その男は続けて言った。

「そついうお前は？」

アシュマが訊いた。

「アデュ・ラア。名前ぐらいは知ってるだろう？」

アデュ・ラアは答えた。

アデュ・ラアは細身の男で頬がげっそりこけていた。

「では、するか」

「せっかちな。閃光のアシュマ殿は」

「無駄を省きたいだけだ」

「死に急ぐ事もあるまいに」

そつ言つて二人は対峙した。

アデュ・ラアは刀を抜き正眼に構えた。

アシュマは逸鉄を抜き右手にだらりと下げた。

「何だ？ それが構えか？ ならばいくぞ」

その頃アンは不意に眼を覚ました。

むくりと身体を起こし辺りを見回してみる。

アシュマがいない。

アシュマはどこかと頭をめぐらせて見る。

いない。

アシュマが。

（アシュマ様……？）

アンはいつも自分でも無自覚にアシュマを目で追っていた。

その頃からアシュマを気にしていたのだろつか？

アシュマがいる風景にいつも安心感を覚えていた。

そのアシュマがいない。

アンは自分でも何か胸騒ぎを覚え、辺りをふらふらと歩き出した。

アシュマはアデュ・ラアと対峙していた

「……………」

何かをしそうだとは予想できた。

だが何を仕掛けるか、それは分からなかった。

それは突然仕掛けられた。

「けえええっ!!」

アデュ・ラアは怪鳥の声にも似た気合を発しアシユマにぶつけた。途端に、アシユマの身体が金縛りにあつたように動かなくなった。

（何だこれは!? …… 落ち着け! …… 何かで聞いたことがある

…… そうだ…… これは、発気の術の応用技だ! どこか動く所は）

アデュ・ラアは突きをアシユマに向かって入れてくる。

アシユマは一心不乱に身体を動かそうとしていた。

人差し指が辛うじて動いた。

（よし）

アシユマは人差し指を刀の刃に押し当てた。

僅かな痛みが身体を走る。

途端に解ける金縛り。

あとはアデュ・ラアの突きを咄嗟に交わしていた。

二人は体を入れ替え対峙した。

「ばかな、俺の術を破る者がいるとは……」

アデュ・ラアが驚愕していた。

「圧倒的な氣の流れで、相手を瞬間的に催眠状態に陥れる術だ。尤も、体全部と言うわけには行かなかつたみたいだがな？」

アシユマは右手の人差し指をみせた。

「ばかな？ 俺の術は指一本ですら動かせぬはずなのに。貴様、この術の事をどこで？」

「さてな？ ただ、念導境界面がお前が考えていたモノより強かつたんだろ？ では、今度は俺のほうから行くぞ？」

「きええええっ!!」

再びアデュ・ラアが術を使ってきた。

「喝!!」

アシュマも気合を發した。
発氣の術はもう掛からない。

「その術、正体が分かれば、怖い所は何も無い」

アンが森の中を歩いてくる。

アシュマはそれを認めた。

何をしに来たのか。

今、下手にこちらに来られては困ると思った。

しかしアンはアシュマを見付けたようだ。

アンがこちらに向かつて歩いてくる。

「アン！ 来るな！」

アシュマが

『来るな』とはどういうことか？

アンは怪訝に思いながらアシュマの所へと歩んで行った。

アデュ・ラアはアンに氣が付き、

「けえええええっ！」

アンに術を掛けた。

アンは金縛りのようにその場で動けなくなり、アデュ・ラアの虜の身となつてしまった。

「さあ、アシュマ・アトーよ刀を捨てろ」

アデュ・ラアがそう言い放つ。

「早く刀を捨てろ！」

アシュマはやむを得ず逸鉄をその場に刺した。

「もう一振りもだ！」

アシュマは仕方なく鬼虎を鞘ごと抜いて地面に置いた。

（ア、アシュマ様が私の為に……）

アンは涙が零れ落ちるのを止める事が出来なかった。

アシュマが、こんなメイドごときの為に、アシュマの命ともいえる、鬼虎を捨てるなんて。

アンはおのれの迂闊さを呪った。

「ゆつくり来い、ゆつくりとな」

「そのメイドは関係ない離してやれ」

「関係無いなら殺すが、良いか？ くつくつくつ……」

「止める！」

「関係無くは無い様だな。さあ、もつとこつちに来い」

アシュマは一足一刀の間合いの内に入った。

「さあ、死ねえ！」

アデュ・ラアはアンを突き飛ばし両手で拝みうちにアシュマの頭蓋へ刀を振り下ろしてきた。

（ああっ！ アシュマ様！）

アンは心の中で悲痛な叫び声をあげていた。

アシュマが斬られるかという瞬間それは起きた。

アシュマが両の掌でアデュ・ラアの刀を封じ込めていたのだ。

「なっ！ くそ！ 動かん！」

「奥義、無刀転」

アシュマはぼそりと呟いた。

（アシュマ様あ）

「無刀を転じて我が一刀となす。我が奥義の内のひとつよ。殺人剣だがな。俺の場合は」

「くそっ……」

アデュ・ラアは己が刀を捨て向うへと走って行った。

向うには逸鉄が地面に突き刺さったままだ。

アデュ・ラアは勝負を急いだ。

ここでアシュマは初めてアデュ・ラア目掛けて走って行った。

一気に生死の間仕切りが切られた。

アシュマは刀に左手をそえ走りながら刷り上げた。

アデュ・ラアは袈裟にアシュマを斬り下ろしてきた。

だが、アシュマの刷り上げのほうが早く、アデュ・ラアの刀を掻い潜りながら、股下から腋の下までを斬り上げた。

アシユマはそのまま走り抜け暫く行ったところで振り向いた。

アデュ・ラアは暫くもがいていたが、やがて痙攣を起こし動かなくなった。

アデュ・ラアの側に彼の刀を刺し、アデュ・ラアの手から逸鉄を奪い返した。

見ると逸鉄の刀身には血糊が付いていた。

ふと、首筋を触ってみると血が滲んでいた。

危なかった。

アデュ・ラアは袈裟を狙ったのではなく、アシユマの首の血管をちくた狙っていたのだ。

アシユマは逸鉄の血糊をふき取り納刀した。

アシユマはここで初めてアンの処理に着手した。

アンを膝の上に寝かせ、アシユマは人差し指と中指、親指でアンの眉間を優しく突いた。

青白い光が、指と眉間の間に発生し、その光がゆっくりアンの眉間に沈んでいく。

するとやっとアンは暗示が解けて、アシユマに片腕に抱かれながら、

「済みません、済みません、済みません！」

謝る始末。

アシユマが、

「何をそんなに謝っているんだい？」

優しく訊いたものだから、アンは、最初から何を話して良いか分からなくなっている上に、さらに顔を真っ赤にしてもう頭はぐちゃぐちゃになっていた。

更に言う事はちぐはぐ。

だが、アシユマには伝わったようで、

「アンのせいではない。寧ろアンは被害者の方だ」
そう言うと、

「でもわたくしの為に鬼虎を捨てさせてしまいました」

「手元に戻ったから良いじゃないか。それに、なによりアンが無事に戻って来てくれて、俺にはそっちの方が大切だ」

（そうでないと、アーチエルが……おお、考えただけで寒気が）
アシユマはそう思い、

（アシユマさまは、何故こんなメイド風情の女などに気を掛けてくれるんだろ？ まさか、私の事を……？）

アンはそう思った。

そして何事も無かったかのようにアシユマはアンの肩を抱きながらそこを立ち去った。

アンの心に何かが芽生えつつあった。

アシユマは皆がいる所へ戻ってきた。

するとそこには、先程の門番がどうしようか、オロオロしていた。皆はぐっすり夢の中にいた。

アシユマは一人ずつ起こして行った。

「アーチエル、起きて。迎えが来た」

「……はい、アシユマさま。お目覚めのキスは？」
ちゅっ。

「これで良いかい？」

「はい。宜しゅう御座います」

アンはその光景を見て、心の片隅に小さな棘が刺さるのを感じた。
（先程は優しい言葉をかけてくださったのに……）

アンは自分でも気付かずに、無意識の内にそう思っていた。

「さあ、アン。荷物を貸してごらん？」

「い、いえ。結構で御座います。これぐらい持てなくてはアーチエル様の付き人として勤まりません！」

「困らせるな。いいから貸しなさい」

「別に困らせておりません。大丈夫で御座います」

「アーチエル、何か言っちゃってくれ」

「アン、折角アシュマさまが持ってくれるというのです。ここは、素直にご好意に甘えましょう?」

「これではどちらが姉で、どちらが妹か、分かったもんじゃないな? アシュマ」

リイナは話しかけてきた。

「姉と妹? 何を言っているんだリイナ。他人だろ?」

「駄目だアシュマ。お前は人の心の機微と言うものが分かっていない」

「そうか……」

「そうだ」

しかし結局荷物はアシュマが持つことになった。

アンは少し複雑な気持ちになった。

係りの者（役人）に案内されて一行は王宮内に入って行った。

太い柱、高いドーム型の天井……

王宮内は、王の住まいと言うよりも、寧ろ神殿を感じさせる造りに思えた。

一行は神秘的な雰囲気漂う王宮内の階段を上って行った。

先ず、客間に通された。

当たり前だが王の間に荷物を持っていくわけには行かないからである。

上の階から役人が降りてきて、

「アシュマ・アトーさんは居られますか」

そう訊いてきた。

「俺だが?」

「デイーヌ・アデュニ王子から言伝です。血の穢れを落としてきてから来るようにと。アシュマ・アトーさんは、着替えを持ってない

ようだから、ヨディさんのを借りるとよいと。あと、刀は洗ってから持ってくるようにと」

「分かった」

アシュマは言った。

「じゃあ、お召し物はわたくしが洗っておきますね」

アンがそう言った。

「すまない。助かる」

そうアシュマに言われた時、アンの中には何か少し暖かいものが生まれた。

アシュマは直接刀の血の穢れを落す方法を知らない。

なので浴室で冷水を何度も何度も浴びて身体を清め、刀身は目釘を外し、簡略的だが砥石で研ぎ、また刀身を柄にはめ込み、丁子油を薄く塗り、打ち粉を叩いて血の穢れを落とした。

「すまない、皆。遅れた」

アシュマが言った。

「遅いよアシュマ」。もう、こんな時間だぞ」

オルバニアンが言った。

「そうか、もうこんな時間か」

アシュマが言ったとき、コンコンと扉をノックする音がした。

「はい」

アーチエルが対応に出た。

「そろそろアシュマ様のご準備が出来る頃だろうとの主の言いつけにより参上いたしました。皆様、主の部屋へ」

「分かりました少々お待ちを」

「鋭ええ」。見張られてんのかと思っちまったよ」

オルバニアンは漏らした。

（しっ！ そういうことは味方の間でも言わない！）

ヨディはオルバニアンに注意した。

（へえへ。お師匠様）

「準備万端みたいね。皆さん行きましょ？」

アーチェルが先導した。

役人の先導が終わり、連れてこられた先は食事の間だった。

そこには、王子ディーヌ・アデュニと、導師サースー・ウィーがいた。

「みなさん、良く来たね。歓迎します。まずは座って座って」

サースー・ウィーが言った。

そこには絨毯が敷かれてあった。

皆、各々座った。

その時、後から、クララテリア・アルサ・エミルトン大佐、ミアネ・コースティア・イチモンジ大佐、ラフェア・アモン・トーフイア大佐、エメティア・レノン・プロフィア中佐達が現れた。

「あら、てつきり貴方たちは、食事を済ませているものだと思っていたわ」

ミアネが言った。

「いやあ、僕達もその予定だったんだけどねえ」

ヨデイが言った。

「？」

「今日の所は先ず食事ね」

サースー・ウィーが言った。

「先ずは座るね」

サースー・ウィーが誘った。

「それにしても今日の席には華があるね。華やかね」

「そんなお戯れを」

ドレス・アップしたアーチェルが返した。

「流石はレキシタニアの王女、堂々としてらっしゃる」

とは、ラフェア・アモン・トーフイア。

修理船『トーガイア』の艦長だ。

彼女は職人気質で、ガツチリ規則規則で凝り固まったクララテリアとはよく衝突する。

「本当に気品とお美しさに溢れてますわ」

なんと衝突する筈のクララテリアがアーチエルを褒めた。

多分本音なのだろう。

食事が持つてこられた。

かなり豪華なものようだ。

だが、床の上におかれている食事なと見たことがない。

勿論皿の上に盛り付けてあるが。

皆がどうやって食べようか困っていると、アシュマはいつもの怪獣食いを始めた。

丸焼きの肉にナイフを立ててある程度引き剥がしたら手で摘んで食べる。

スープも直接、器から飲む。

またその器が直接飲み易い様に出来ている。

手が汚れたら眼の前のボウルで指を洗う。

パンは直接千切らずにほお張る。

「みなさん、どうぞアシュマさんを真似て？」

デイーヌ・アデュニ第一王子は言った。

皆がああ『怪獣食い』をはじめた。

ああ、アーチエルでさえ切り取った肉に食らいついていたのだから、余程空腹だったのだろう。

食事が終わり皆が満腹になった頃、アーチエルが、

「デイーヌ王子。お聞きしたいのですがこれがこの国の作法なんでしょうか？」

そう訊いた。

「そうですね。だからアシュマさんを真似てと言ったんです。皆さんどうです？ 肩肘張らないのも、たまには良いでしょう？」

「はい、美味しゅう御座いました。でもお洋服が所々汚れてしまっ

たのが残念といえは残念です」

「ははは。あとで係りの者に洗わせましょう」

「いえ、僭越ながら、わたくしが居りますれば……汚れにもよりませんが、大丈夫ではないかと……良い染み抜きもありますし」

「そうですね。貴方がいました。アン女史。そうだ、この中には正式に余の事を分かっているものも居るであろう。この機会に、自己紹介をしましょう」

この中にはアシュマやオルバニアンのように、マジデスカーと言う顔をするものも居れば、ミアネ・コースティア・イチモンジのように「新しい男と知り合える」と言うような者や、アーチエルのように「新しいお友達が出来る」と言う者まで様々いた。

「では余から。余はディーヌ・アデュニ第一王子。父上が死んで、余が国王になるのが筋なのだろうが、余は故有って即位はせん。その代わりにサースー・ウィーを余の側に置き……」

……

一通り自己紹介が済んだ所で夜も更けた。そして歓談を始めた。ぶどう酒が振舞われ一同に酒が回った。

「この国では十六歳から成人とみなされる。アーチエル様などは安心して、召し上がるが良い」

ディーヌ王子はそう言った。

「有難う御座います。殿下」

「そうだアシュマ殿、『アデュ・ラア』の件はけりが付いたんですよね？」

ディーヌ王子が言った。

「だからこうして刀を清めて持ってきている」

アシュマが言う。

「だけど鬼虎の血の穢れは落せなかったようだね」

「……………」

「まあ、それはしょうがないとは思っていましたが、そこまで邪気が強いとはね」

「……………」

「アシュマ君いつの間にアデュ・ラアを倒したんですか？」

ヨディは訊いた。

「アシュマさま。それで血の穢れだったんですね？ 気付きませんでした。まさか、相手の人は殺したんじゃない……………」

少し酔ったアーチエルはアシュマを問い詰めて行く。

「あつ、おつ……………」

アシュマは追い詰められ壁際まで来てしまった。

「アーチエル様。アシュマ殿が悪いんじゃないやありませんよ。相手のほうが悪いんです。あのまま放置していたら、何人の人間が犠牲になったか、分かりません」

「まあ、そうですね？ ヨディ様？」

「んーまあ、極悪非道で有名ですから。あのまま放置していたら、死人はもつと多くなつてたでしょうね」

ヨディが付け加えた。

「まあ……………極悪人なら殺して良い法と言うのはありませんけれど、未来に救われるであろう人々に免じて今回は差し許します」

「ほつ……………」

アシュマは胸をなでおろした。

（何をアシュマ様はアーチエル様に対してあんなに、びくびくおどおどしておいでなのかしら？ そんなにアーチエル様の事が好きなのかしら？ ああ、あんなにくつついて……………アーチエル様ったら、はしたない……………此処は一つ注意せねば）

アンはさり気無くアーチエルの後に付き、

（アーチエル様）

小声でアーチエルを呼んだ。

「！」

アーチエルがびっくりして振り向くと、そこにはアンが控えてい

た。

（どうしたの？ アン）

（アーチエル様、衆目の中ではしたくない事はお控え下さい）

（はしたない事とは？）

（その……アシュマさまとくつつく事に御座います……）

（なぜ？ 今までそういう事、言わなかったじゃないの？ 今日のアン少し変よ？ どうしちゃったの？）

（！ いや、いや、そ、そんなことは……し、失礼します）

（アン！）

アンは席を外した。

アーチエルはアンの様子が気になった。

今までにない反応だったからである。

「アシュマさま」

「なんだい？ アーチエル」

「私、少し席を抜けます」

「アンかい？」

「ええ、少し様子が変だったもので」

（はあ……あたしは何をしているのだろう……）

王宮のテラスで頼杖付いて、アンは一人小さく呟いた。

「アン……！」

アーチエルがワインのボトルとワイングラスを持ってやって来た。

「はい、アン」

アーチエルはアンに声をかけ、

「一緒に飲みましょう？」

そう言った。

「私のことか訊きに来たのですか？」

「そんなことはしないわ。アンは私のお姉さん。もっとデンって構えてて」

アンは

「ふう」

溜息を一つ付いた後、

「そうですね。もつとデンと構えている、お姉さんに戻らなきゃ。
じゃあ、飲みますか『アーチエル』」

「はい。『お姉様』」

（俺が出る幕はなさそうだ）

影で見ていたアシユマがそつと宮殿の中へ戻って行った。
中では大変な事になっていた。

クララテリア管理官とラフェア艦長が大喧嘩をしていた。
「スケジュールどおりに進行してもらわないと困るんです。全部の
機に補給と修理が回せないんです！！」

「人間は機械じゃないんだ！ そんな分刻みで、仕事ができるか！
？ いいや、出来ないね。優先順位をつけな。それしか手はないね」
「それこそ人間機械じゃありません！！ 優先順位なんかつけられ
ません！！」

「それをやるのがあんたの仕事だろ？ 管理官！！」

「くっ！ …… ワタクシもう休ませていただきます！！」

「なんだい、あんた逃げんのかい？」

「違いますっ！ 軍人は規則正しい生活習慣があつてこそ、規律と
言うモノが生まれるのですっ！ それをこんな時間までっ！ では、
お先に失礼しますっ！」

それを見てヨディは

「まずいなこれは……」

そう言つて立ち上がった。

隣で酔いつぶれていたエファールが

「んあ？ どこ行くの？ あんたあ？」

そう言つてオルバニアンに抱きついて来た。

「おいおい、俺はヨディじゃないっつーの」

「ちよつと、オルバニアンから離れなさいよ」

アルミナがエファールを引つpegす。

「あの馬鹿」

ラフェア艦長が立ち上がりかけた。

「まあ、まて」

ラフェアを呼び止めるものがいた。

「何だ、誰だッ、今は忙……」

なんと、ラフェアを呼び止めたのは、あの、憧れのアシユマではないか。

この機会を逃していつ会話をするというのだ。

「いつ、いやあ……アシユマ様」

「様付けは無しと行こうじゃないか？ ラフェア」

「くくくくく、お前カツコ良いんだよなア。年下の癖して。それが『逸鉄』かい？」

「『逸鉄』を知っているのか？」

「イツテツのオヤッサンから、良く聞いているよ。『逸鉄』、あれはアシユマのヒョッコがいなければ、出来なかった逸品だ。とまで言ってるよ」

「そんなことは無いけどな……」

「なによ、皆して私にばかり文句言つて。言いたきゃ言いなさいよ。私は私の仕事をするだけだから！ ぐすつ……」

クララテリア管理官は、反対側のテラスで半分べそをかきながら、自分に言い聞かせていた。

「それも、またよし」

「誰！？」

「僕ですよクララテリア管理官」

「ヨデイ特務大佐……！！」

「はい、そうです」

「少しでもセクハラしたら大声上げますからね！」

「信用無いもんですな僕も」

「当然です」

「もつとぐるつと周りを見回せたらよかったのに」

ヨディはいきなり場違いな事を言いだした。

「え？」

クララテリア管理官が一瞬我を忘れて呆けた顔をする。

「本当に大切な何かを失う前に周りをくるつと見回してみるのさ」

ヨディがそう言う

「本当に大切な何か……」

クララテリアが復唱する

「そう、本当に大切な何か。それを見失う前にだよ。かならず」

「かならず……」

「さあ、もう答えは見付かったはずだ。後はそれを受け入れるかどうかだけ」

「分からないわ、私。答えなんか見つけていない」

「だいじょうぶ本当に大切な何かといわれた時点で君は考えた。答えはその時点で見付かっている」

「そんな、答えなんて」

「さて、ここからは大人の話だ……」

ヨディはワイングラスとワインを取り出した。

.....

「きゃあああああつ！！！！ エッチ！！ 変態！！ 強姦魔！！」

この声にがばつと反応したのがエファールである。

「あんのエロエロ大魔神~~~~！！！！」

エファールはがばりと起きると、テラスに向かい、すぐさまヨディがいるベンチを見つけ出した。

「さっきまではとても参考になることを言っていたのに……」
クララテリアは泣き顔だ。

「それがこいつの手よ。どうせ口八丁手八丁で言いくるめられたんでしょう?」

とはエフアール。

「え、ええ……」

「チョコつと膝小僧と膝小僧がぶつかっただけじゃないですかアツ!」

ヨディは悲鳴を上げた。

「ほおお? 聞こえんなあアア?」

エフアールがバキバキと指を鳴らす音が聞こえてきた

「今日は新しい武器のテストもかねて私の部屋で試してみるか?」

「プツ プリーツ ヘ・ヘルプ……ミイイイイ。こつ殺さないで……ひいいいいー」

「本当に大切な何かを失う前に周りをくるつと見回してみるか……私には答えが出ている。……か。くすつ」

この言葉はクララテリアのお気に入りとなった。

第二節 鬼虎、解かれた封印

……あれ？ 私がちゃんと布団で寝てる。

うーん、頭が痛い……世界が回る……

夕べ、アーチエル様とお酒を飲んで……アーチエル様が先におつぶれになって……人を呼びに言つて……確かアシュマ様だったと思う。

そう、アシュマ様だったわ。

確か部屋まで運んでいただく途中に、私のことも面倒だといって一緒に運んでいただき……

（愛しております）

……！！

確かその様な事を……そして、確か口付けを……いけない。私は何てことをしてしまったのだろう。

好きでもない殿方に……アシュマさまの部屋に言つて……好きでもない殿方？

……好きでもない殿方！？

……とんでもないわ。

私はもつと大それたことをしてしまった。

好きだわ……愛している。

よりもよつて、主の想い人あるじを好きになつてしまふなんて。

今まで自分の中でそういう兆候はあつたはず。

それをことごとく見落としてしまふなんて……見落としていたのだろうか？

黙認してきただけなのではなからうか？

何時から？

兎に角アシュマ様の所へ。

夕べの事は無かつた事に。

それにしても此処は誰の部屋？

！

隣で寝ておいでだったのはアーチエル様でしたのね？

それにしても頭が痛い。

こんな酷い二日酔い久しぶりだわ

それにしても此処は誰の部屋……！

向うの布団に誰か寝てる……あのお召し物は……アシユマ様！

丁度良い。

今ならばアシユマさまに直接……

靴を履いて……

アシユマさまのところに……

「やあ、お早う。アン」

アシユマが声を掛けてきた

「お、お早う御座いますアシユマ様」

アンも声を掛けてきた

「？」

「あ、アシユマ様……その……」

「なになに？」

「タベあつたことは……」

「忘れた」

「……は？」

「だから忘れた。そのほうが都合が宣かる？」

「忘れた……都合が宣かる……それは都合が宜しいですわよ。でも、

二人で秘密の思い出でも共有するぐらいの度量はあっても宜しいん

じゃなくて？」

「アン。わかった。タベの事は二人の秘密だ」

「有難う御座います。アシユマ様」

「分かったら部屋に戻ると良い。朝食が運ばれてくるはずだ。今日

は殿下の計らいで黒龍号側の公務はしなくて良い事になった。と、

言う訳だ」

「あの『トーガイア』と『ゴハク』はどうなるので御座います？」

「さあ？ 事故が起こらないことを祈るよ」

「アシユマ様！」

「まあ、まあ」

「ではアシユマ様わたくし参ります」

「ん」

ガチャリ……パタン……

と、言つてドアが閉まつた。

「ぷはー……っ!!」

アーチエルが飛び起きた。

「わあ!! びつくりしたあ!!」

アシユマは驚いた。

「やったあ！ アシユマさまでもビックリする事あるんですね。ねえ、気配の殺し方上手でしたア？」

アーチエルが喜んだ。

「そっちは零点」

「ぶうーっ！」

「今驚いたのはアーチエルが俺の虚を付いたから」

「『キヨ』つて？」

「虚つてのは自分の油断だったり相手の裏を取ったりする事だな」

「じゃあ、わたくしはアシユマさまの『キヨ』をとつたつて言うの？」

「そうさ」

「何か納得いかなーい。そんなのつまんなーい」

アーチエルはへそを曲げた。

「ほら、アーチエルそんなこと言つてないで顔を洗いなさいもう直ぐ朝食が来るぞ？」

アシユマが注意を促した。

「わたし、シャワー使うわ。アシユマさま洗面台使つて」

「おい、シャワー俺が使おうかと思つて……」

「じゃあ、一緒に使っちゃいましょうよ」

「……そう、するか」

そしてアシュマはタオルで目隠しされ浴室に招かれた。

「で、これか……」

「はい、それで御座います」

キュキュキュ……シャ……ザー……ッ

「ふうーっ、シャワー気持ち良いなー！」

アシュマは素直に感想を漏らした。

「昨日は、汗まみれの泥まみれでしたからね……アシュマさまアンの事をどうなさるおつもりですか？」

アーチェルが訊いて来た。

「さっきの話、聴いていたのか？」

アシュマが逆に訊いてきた。

「あれだけ大きい声を出されれば聞こえまする」

「そうだなあ。振るか」

「そんな！いきなり振るだなんて、乱暴な」

「じゃあ、俺にどうしろと？」

「何があつたかは知りませんが、『ああ、あの方との恋は良い思い出』見たいにフェードアウトできれば……」

「難しいなあ。俺はそんなプレイボーイじゃないから」

「是非にその様にしてくださいませ。でないと、アンが傷つきまする」

「うーん……それにしてもアーチェルは優しいな。そして強い。

俺には出来ん芸当だ」

「い、いえ、アシュマさま。強い弱い話でなくて……」

アシュマ達はバスローブに着替え、暫くすると朝食が来た。

丁度良いタイミングだ。

「あの小僧読んでいたかもしれんな」

「え？あの小僧？」

「なんでもない。さあ、食べよう」
「はい。いただきます」

食後、アシユマは鬼虎と逸鉄を携えてディーヌ・アデュニ第二王子の下を訪ねた。

尋ねたい事があつたからだ。

尋ねたい事とは他ならぬ鬼虎のことだ。

丁度王子は公務の合間だという。

『王の間』にいる『王子』を訪ねた。

「細かい作法を知らぬ。無作法を許して欲しい」

アシユマは予め断わった。

「元々貴方はそういう人だ。好きなようになさるが良い」

王子は言った。

アシユマはブーツを脱いで近場のカーペットの上に左脚を立て膝し座った。

王子との距離はごく近い。

二メートル程だ。

「さすが王者の風格を持つ者ですな」

王子が言った。

「前から訊きたかった。俺は一体何の王になるのかと。政治には疎いし、かといって人脈があるわけでも無し」

アシユマが訊いた。

「政治には疎いでしょう。それは仕方ない。貴方はそういう人だから。人脈が無いというのは嘘。とんでもない人脈を既に持っている。それを貴方が気付かないか意識的に遠ざけているか、忘れているか。そのいずれかです。さて、何の王になるかとの答えでしたね。それは……」

王子は答えに一拍置いた。

「……………」

アシユマもその分、答えを待った。

「よく言えば武門の棟梁。悪く言えば蛮族の王。つまり貴方は武道の王になる人です。頂点を極めるといつても良い。……この間、アデュ・ラアを倒しましたね。あれでぐつと頂点に近付きました。後、危険なのはこの国を去るときですね。更に言えばあなたの霸道に係ない邪魔者が増えます。七賢人の手の者です。これにはお氣をつけて。……尤も大丈夫でしょうが。……蛇足が長すぎましたね」

……と、王子は一気にまくし立てた。

「武道の王……」

「確かにこの世界には、武道の王と呼ばれる者がいる。それも体術を得意とする者です」

「この者の所へ行き、勝負を挑めというのか？」

「ご懸念には及びません。向こうの方からやってきます。それも近いうちに貴方はただそれを向かい打てばよい……」

「迎え撃つ……」

「ええ、迎え撃つ。それと貴方には、どうしても倒さねばならぬ人いや、人ではない者がいますね。貴方と同じ種類の人だ。……良く見えない……名はアー……、アーン……いやアー……ム……いや……」

「アー又か？」

アシユマが言葉を補正した。

「おお！ アー又！ まさしくアー又だ。この者、甚だ危険です。誰よりも注意を必要とする。ゆめゆめ油断めさるな。その人を倒して、貴方は武門の頂点に立つ」

王子が言った。

「分かった。アー又か……少し自信をなくしましたよ
、アシユマが頷いた。

「さて、今日のところはそれだけですか？」

王子が訊いてきた。

アシユマは敢えて鬼虎を携えてきた。

それを王子に見せた。

「今日この時間に来ることは知ってはいましたが、……成る程、鬼虎ですか。どおりで見えなかったわけだ」

王子は、ふーむと唸った。

「そんなに見えぬものなのか？」

「見えませんね」

「では答えようが無かるう？」

アシュマが問う。

「私では答えようがありませんね」

王子は素直に力量不足を認めた。

「案じる事は無い。知りたいことはサースー・ウィーが知っていよう」

「今どこに？」

「トーガイアとゴハクが駐留しているロド砂漠に行っておろう」

「分かった。邪魔をした」

「いや。丁度ぴったりだよ」

「？」

「殿下入りますぞ」

その時、髭面の顎のしゃくれた、目つきの悪い将校が入ってきた。

「！ 殿下が時間通りに来いと言うから来て見れば、こんな得体の知れぬ輩とお話をされていたなんて！ 私はこの者以下ですか！？」

殿下！」

その髭面が言った。

「その通りだ。アング將軍。いずれそのお方はお前より偉くなるぞ？ いや既になりつつあるか？」

王子が気だるそうに言った。

「王子よ、お付き合いされる人物はよくよく選んだほうが良いと思うが？」

アシュマが言った。

「殿下！ なんですか！ あの輩の口の利きようは！」

「アシユマ殿、貴殿の言われる通りだな。だがこれもしがらみと言う奴で、なかなか厄介なものでね。貴殿が羨ましい。さ、厄介ごとに巻き込まれる前に、目的の地へ行かれよ」

「相済まぬ。では御免」

アシユマは王の間を辞去してきた。

目的の場所を聞きにエファールの所へ行こうかと思っていた矢先だった。

アンと廊下でばったり会ってしまった。

「……ア、ア、ア、アシユマ様」

「……アン……」

「あ、アシユマ様。ちょ、丁度お召し物が乾きましたので……その

……」

アンは顔を真っ赤にして俯いてしまった。

「そうか、助かる。部屋まで一緒に行くか」

「あ……あ……あ……はい……」

暫く無言で歩く二人。

そのうち周りには誰もいなくなった。

無言に堪えられ無くなったアンは妙な事を口走り始めた。

「あ……あの、アシユマ様？」

「なんだい？」

「アーチエル様とはどんな時にどんなタイミングでキスしたりするんでしょうか？」

「はあ？」

「あの、ですから……」
成る程。

つまり、アンはキスがしたいのだ。

そうアシユマは解釈した。

「昨日、アンが俺にしたような感じかな？」

「……………」

「アン？」

アンは持っていた洗濯籠を床に置いて自分はその前で俯いてしまった。

「アン？」

アシュマが心配そうに顔を近づける。

するとアンは振り向いてアシュマにキスをした。

二人は一頻りキスを愉しむと、どちらからとも無く口を解いた。

「やられた……」

「『キヨ』を突きました」

「アーチエルから聞いたのか？」

「はい」

「！！ はははっ！ ははははははっ！ そうだ。虚だ。完全に虚を突かれたよ。でもたいしたものだ。よくもまあ、こんな応用技を考え付いたものだ。はははははっ！」

「あら、アシュマさま」

丁度アーチエルが廊下の十字路口から現れた。

「やあ、アーチエル」

「ご機嫌ねアシュマさま？」

（アシュマ様……）

アンは気が気でなくなつた

「いま、アンと兵法談義をしていた所だ」

「ヒヨウホウダンギ？」

「そう。兵法談義だ」

「どんなお話？」

「応用技だ」

「何の？」

「今度、そのうちに教えてあげるよ。はは……はははっ！」

「ねえ、アン。どういうこと？」

「今度教えて差し上げます」

「ぶーっ!」

アシュマはいつもの自分の服に戻った。

「ではこのお召し物は洗ってヨデイ様にお返ししておきますね?」

アンは言った。

「そうしてくれ」

アンはそういうアシュマの言葉一言一言に幸せを感じていた。
そういうところはアーチエルと一緒にである。

アンは一礼をして去って行った。

「アシュマさま? さっき見てしまいました」

アーチエルは切り出していた。

「見たって何を?」

アシュマは返した。

「アンとキスしてたでしょう?」

「カマかける気だな? あの場にアーチエルの気は無かったぞ?

……あ!」

「墓穴掘りましたね?」

「~~~~~」

「だいじょうぶ。怒ったりなんかしませんよ。確かに嫉妬はしてま
すけれど……。でも困りました。どうして良いものか……」

「そうだな。アンの場合、俺とアーチエルの中を重々承知してい
ての事だからな。案外必死の恋だとしたら……」

「でも、身を引くかもしれませんね。アンは」

ああ、私は何てことをしてしまったのだろう。

アシュマ様はアーチエル様のもの。

手を出してはいけない方なのに……。

それを分かっていながら……あんな事を……。

廊下でキスだなんて……。
しかも誘ったのは、わたし。
もしこれがアーチエル様の知るところになったら……。
わたしはもうここには居られない。
ああ、どうしてあんな事を。
あんな軽はずみな事を……。

「アーチエル。午後は出かけてくる」
アシユマは自室でアーチエルに、そう話しかけた。
「どちらへ参られますので？」
「砂漠にな。サースー・ウィー師を訪ねに」
「私も行つてよう御座いますか？」
「良いも何も、ついてくる気だろう？ どうせ。いいよ。おいで。
その前にエファールの所へ行こう。目的地を知らずして行つても、
しょうがない」
「はい」

ヨディとエファールの部屋の前に来た。
ドアをコンコンとノックしてみる。
「はあゝい」
張りがあつて艶やかな女性の声が聞こえた。
エファールである。
カチャリと言ってドアが開いた。
「あら、アシユマ！ あら、アーチエルまで来て。どうぞ。おはい
んなさいな」
笑顔で迎え入れてくれた。
エファールが受話器を挙げ、
「お茶、飲む？」

聞いてくれた。

「いや、結構。用事が済んだら帰る」

「用事？ 用事って？」

「いや、トーガイアとゴハクが今展開している場所を知りたい」

王宮の屋上テラスに来た。

「ウイングで行こうかと思っている。けど、思ったより遠かった。ついて来れるか？」

アシュマはアーチエルに訊いた。

「王宮に居てもつまりませんから、一緒に行きたいです」

「殿下と話すのはどうだ？ 話を聞いていて結構飽きないぞ？」

「わたし、あまり自分の未来を知る事に、興味無いんです」

「そうか。じゃあ行こうか」

「はい」

「我が飛ぶのは暗雲の空

戦の女神を犯してもぎ取る

その背の羽根は既に漆黑

我が背に添えて我が羽根に

そして散るかなこのわが身

禁忌を犯して我が翼となれ

ウイング」

二人はウイングで飛んだ。

両側に崖がある

昔ここに水が流れていた証拠だ。

五百メートル級の大渓谷だ。

行程は約百二十キロメートル。

アシュマはそのくらいの距離をマリク紛争時に飛んだ経験がある。

が、アーチエルはその経験が無い。

途中でばてるのではないかと思われた。

加えてこの暑さだ。

ばてるのは必至かと思われた。

案の定六十キロ地点でふらふらと蛇行し始めた。

「アーチエル、おいで。抱いて連れて行ってやるっ」

「それではアシュマさまにご迷惑が……」

「掛からん。掛からん。却ってそんな飛び方をされることのほうが、心配でならん」

「済みませんアシュマ様」

そう言いつつアーチエルはお姫様抱っこをしてもらって気分は上場だった。

「そうだ、アーチエル。レストを掛けといたほうが良いんじゃないのかい？」

「そうでした。レスト」

レストの呪文は一語でその呪文の一時凍結などに使われる。その間に術者は気の力を回復させるのである。

「アシュマさま？」

「なんだいアーチエル？」

「重たいですか？ 大丈夫ですか？」

「重たくないし、全然大丈夫だ」

「アシュマさま？」

「なんだい？」

「不謹慎にも……アーチエルはアシュマさまに抱いて頂いて、嬉しゅう御座います」

「ホントに不謹慎だ」

「済みません」

そう言つてアーチエルはアシュマの頬にキスをした。

「こら。ホントに不謹慎だぞ？」

「ふふっ」

トーガイアとゴハクの展開地へやって来た。

黒龍号もある。

「ヨディはあそこかな？ …… とりあえず黒龍号へ行こう」

アシュマはそう言った。

「そうしたら私はどうなるので御座いますか？ アシュマさま」

アーチエルは少し困った面持ちで聞いた。

「ヨディとお留守番」

「そ、それは困りました」

「何故だ？ 楽しいだろ？ ヨディ？」

「殿方には楽しいかもしれませんが、女子の身であるわたしにとつては、少々下品かと…… 優しい良い方なのですけれど……」

「そうか。下品か。はははっ」

「今日のアシュマさま良くお笑いになれますね？」

「だめかい？」

「いいえ、嬉しゅう御座います」

「嬉しい？」

「はい。好きな人の笑顔が見られるって嬉しい事じゃありません？」

「そうだな。俺もそうだ。一緒に来るか？」

「はい！」

「成程。確かに、好いた者の笑顔はうれしい」

「ところでアシュマさまは何故この地に来たのですたっけ？」

アシュマ達はサースー・ウィーを訪ねて、あちらこちらを捜していた。

アーチエルはこの地に来て少しも休んでいない。

それなのに、少しも音を上げていない。

アーチエルの方を振り向くと、疲れた様子は見られるものの、お

おむね元気だ。

眼を輝かせてさえている。

「アーチエル大丈夫かい？」

「はい、大丈夫です、アシュマさま」

「疲れているように見えるけど？」

「まだ大丈夫です」

「楽しいかい？」

「はい、ゲームみたいで」

「人探しがかい？」

「はい！」

「そうか」

サースー・ウィーを探し当てた。

とある岩山の頂で瞑想していた。

岩山と言っても精々二百メートルぐらいの丘だが……

この砂漠の中で夕日に映えてこの岩山はそびえ立っていた

「だれかな？」

アシュマ達を後ろに控えさせながらサースー・ウィーが訊いていた。

「アシュマです」

「アーチエル・アップルトンに御座います」

「おお、アシュマ殿にアーチエル様か。先ず座るね」

サースー師は言った。

そしてこちらに振り返った。

アシュマとアーチエルは素直に従った。

「どちらの話ね？」

「私です。ご老体」

「おお、アシュマ殿か。して何用かな？」

「相談したき議があります」

「何かな？」

「ある力があります。一度その力を使って取り返しのない事をしてしまいました。もう使いたくない力です。それなのに、また使ってしまった。このままでは、本当に取り返しのつかない事を行ってしまいかも知れない……。それが怖い。恐ろしいのです」

「アシユマさま……」

アーチエルが呟いた。

「このままではどうしたら良いのか分かりません。……何か良い知恵は無いものでしょうか？」

アシユマは悲痛な心の叫びを搾り出すように言った。

「鬼虎の事ね？」

サースー・ウィーは問題の核心を突いてきた。

「そうです。鬼虎の事です」

「鬼虎が何をしたね？」

「半島を半分ぐらい決り取りました」

「それだけじゃないね」

「地震をよび、嵐をよびました」

「それだけじゃないね」

「何メートルもある大津波をよびました」

アーチエルは堪らず、

「師父様もう良いではありませんか」

アーチエルはサースー・ウィーに対してアシユマをかばっていた。「そうやってお嬢さんの影に隠れるか。逃げるか！ 隠れても無駄ね。言葉は届くね。今アシユマ殿が言ってきた事は、鬼虎はしてないね」

「師父……」

アーチエルはホツとした。

これでアシユマさまを救ってくれるのだと。

だが次の瞬間サースー・ウィー師は、アーチエルやアシユマにとって、心が凍り付くほど驚愕すべき事を言った。

「そう、やったのは全てアシュマ殿ね。鬼虎に責任は無いね」

「！！」

「師父様なんて事を……！！」

アーチエルは、声を震わせ言っていた。

「私、何か間違った事を、言ったか？」

「……………」

「……………」

「あの災害の被災者およそ三百五十万人。この命の重みは果てしなく重いね」

「はい」

「とても一人では、購いきれないね」

「はい」

「その十字架は一生背負わなければならないね」

「ですから、わたくし……」

アーチエルが言いかけたところで、サースー・ウィー師が手で制止した。

「覚えおいでか、アシュマ殿。若の言葉を。人類の命運を担う人だと。それまでは自ら命を絶つことは許されないと」

「人類の命運……」

「そう。人類の命運。そなたにとっては、新しき十字架を更に背負い込むことになるか、それとも、そなたが背負う十字架を軽くしてくれるものかそれは、そなた次第。後は世の中、無為自然。それさえ頭の中に入っていれば流れに身を任せるのも、また宜しかろう。もう見えてきたのではないかな？ 薄ぼんやりと、自分のなすべき事が」

「それは本当のことなのですか？ 師父様？」

アーチエルが続けるように訊く。

「若は間違った事を言ったことは一度たりともあり申さん」

「老師父」

と、アシュマが

「師父様!!」

と、アーチェルがそれぞれ頭を下げていた。

うん、うん、と頷いていた。

アシュマが立ち上がり、鬼虎の銀色の刀身を引き抜くと、封印は軽く引きちぎられ、白銀光が夕闇迫る紫色の天に向かって伸びていた。

「ではご老体」

と、アシュマが、

「どうもお世話になりました」

そしてアーチェルが言う。

「うむ」

サースー・ウィーはゆっくり頷く。

「ウィング」

アシュマは唱え、アーチェルはアシュマにしがみついた。

「魔法って便利ね」

サースー・ウィーは羨ましがった。

それを遠くで見る眼が三つ。

「なんですかねえ。あの飛んで行く奴」

「アシュマじゃねーか？ あれ。アーチェル姫もくっ付いてるし」

「あ、ホントだね。アシュマだね。じゃあさっきの光って……鬼虎？」

そう、この三人はヨディ、オルバニアン、アルミナ、の三人だった。

ヨディはトーガイアとゴハクがこの場に拠点を開く為の手伝いと護衛を兼ねて、やって来た。

オルバニアンとアルミナは、ヨディの僕しもとなり下がって、こき使われていた。

「なー、さっきのあの光さ、灯台代わりとなっていたら、敵にここ

の位置ばれるんで無いの？」

「それは大丈夫だと思いますよ。僕達がいる所から、やっと見えた程度じゃ、敵さんには見えてないでしょうよ」

「さっきの光、綺麗だったねえ」

ミアネ、ゴハク管理官がそういうと、

「そうですねえ。きれいでしたよねえ。ロマン、チック」

エメティア、ゴハク艦長が言った。

「ミネア管理官！ エメティア艦長！」

「はっ！ はい！」

「言動が不謹慎ですつ。以後気をつけるように」

クララテリア管理官が怒ったようにいった。

「クララ、何でもかんでもそれじゃあ息が詰まっちゃうよ」

ミネアが言う。

「……………」

クララテリアは無言をお決める。

「もう、かったいなあ。分かりましたわよ。クララテリア管理官殿
！」

「なんでしょうかミネア管理官？」

「このままでは息が詰まって、指揮官以下兵士の士気にも影響が出ます。もう少し規律を緩めて頂きたく具申致しますつ」

「却下です」

「クララ、貴女いつもそうよ。そんなことばかりしていると、付いてくる人がいなくなってしまうわよ」

「ここではクララと呼ばないで！ 私は貴方たちの指揮官……」

「本当に大切な何かを失う前に、周りをくるっと見回して見たかい
……………」

「！」

クララはくるっと後を振り向いてみた。

「ヨディ特務大佐！」

ミネア管理官が声を高くした

「！！……ミネア管理官。ヨディ特務大佐は、わたくしとお話があるのです。そうですね？　ヨディ特務大佐？」

「ええ、向うで話をしませんか？」

「はい。セクハラは無しですよ？」

「分かっていますよ」

岩山の向うに来て、ヨディとクララテリアの二人は、腰を下ろして話を始めた。

「本当に大切な何かを失う前に、周りをくると見回して見たかい？　どうか？　本当に大切なものは見付かったかな？」

ヨディが言った。

「見回しましたわ。手に入るのは欲しいものだけ。いらない者は勝手に去っていく。こんな事が本当に起こるなんて、私は幸せ者ですね。ヨディ特務大佐」

クララテリアは嬉々として言った。

「……例えば？」

ヨディは嫌な予感がし更に聞いた。

「この仕事が終われば、私は昇進しますわ。そうすれば、地位や名誉など思いのまま。上手くすれば殿方だって……それに引き換え去っていくのは、小うるさい同僚や部下たちだけ。全く以って素晴らしいですわ。クルツと見回しただけでこんなに素晴らしい事があるんですもの。もっと良く見回せば……」

「君は本当にそう思っているのかい？」

「ええ、勿論……」

「もう一度見回してみる気は無いのかな？」

「御座いませんわ。だって……」

ぱん！

一瞬、クララテリアは、何をされたのか分からなかった。

口の中に広がる血の味。

地面にはいつくばっているという屈辱感。

（私は一体何をしているの？）

地面にぼたぼたと落ちる透明な液体。

そして……

「見損ないましたよ。僕は女性に手を上げる趣味は無いんですがね。僕は自分では、結構気が長いほうだと自負してましてね、見所があると思っただから忠告したのに。本当に残念ですよ」

（何でこんな男に見下されなきゃならないの？）

「クララ！」

（誰？）

「クララ！」

（私を揺さぶるのは誰？）

「このお、私のクララに！」

（ヨディ大佐がミーちゃんに襲われている。……………そういえばミネアをミーちゃんと呼ぶなくなつて、どの位の時が流れただろう。そういえば幼馴染で付き合ってるのってミーちゃんしかない……………）

「わああっ！　ちょ、た、たんま！　たんまーっ！」

（ラフェア大佐まで……………私の為に？）

「だーっ勘弁！！　オルバニアン！　アルミナ！　見てないで助けないよ、わーっ！！　ロープ、ロープ！！」

（本当に大切な何かを失う前に、周りをくるっと見回して……………大切なもの……………）

「ヨディ達帰って来てないのか？　しょうがないなあ」

アシュマはサイコ・フライヤー黒龍号のメインハッチの前までやって来た。

アーチエルは既にアシュマの腕の中で既に夢の中の人だ。幸せそうな寝息と寝顔を見せている。

アシュマは黒龍号のメインハッチを開けた。

そのままアシュマはアーチエルを抱いたままアーチエルのベッド
ブースへと運んで行った。

「このまま寝かせるか、着替えさせるかだが……着替えさせるか。
アーチエル、アーチエル」

「うゝん」

「アーチエル……着替えよう？ な、ほら」

アシュマは、ベッド下からアーチエルのパジャマを取り出した。

「うゝん、着替えるの、いい……このまま寝ますう」

すると向うのブースから人がやって来た。

リイナだ。

「どうした、アシュマ？ アーチエルの寝込みを襲うのか？ 見物
しても良いか？」

リイナがそう言った。

「別に襲いやせん。何もせんからな」

アシュマが応えた。

「誰もいなければ、襲ってたくせに。アアチエルウとか言ってな」

「しないよ。ヨディがこっちって事は、アベニもこっちに来てるわ
けか」

「うゝゝん。さつきから騒々しいですよ？」

アーチエルがむくりと起きた。

「あ、起こして済まない」

リイナが言った。

「あらまあ、リイナ。こっちに来ていたの」

「アーチエル、気をつけたほうが良いぞ？ アシュマがアーチエル
の寝込みを襲おうとしていたぞ」

「するか！」

「じゃあ、私はシャワーでも浴びて寝ようかしら？」

アーチエルが伸びをしながら言った。

「じゃあ、俺もそうするか」

「気をつける、アーチエル。こやつシャワーと言いながら、アーチ

エルの裸を見るつもりだぞ？」

「俺がそんなことするわけ無いだろ？」

「まあ、アシュマさまったら。リイナ一緒にお風呂入りましょ？」

アーチエルが冷ややかな視線でアシュマを見ながらリイナを誘った。

「うむ、それがベストだろう」

いってリイナは悪魔の笑みを浮かべながらアシュマを見た。

アシュマもシャワーを浴び、自分のブースへ戻ってきて寝る前の読書をしていた。

そういえば、今日は夕食まだだったな、と思いながら面倒なので良いか、とアシュマは思った。

そこへ、パジャマ姿でアーチエルがやって来て、

「一緒に寝ても構いません……でしょうか？」

そう言った。

「良いよ。おいで」

アシュマが言った。

今日は、早めの就寝となった……。

再び岩山、サースー・ウィーの瞑想場。

サースー・ウィーはこの地で起こるであろう戦を怖れていた。

「サースー・ウィーの爺さまよ。戦、戦って言ったって、どの道遅かれ早かれアヘイビアとノーツ連邦とで戦はおきるっツの。それにノリトレアが悪さする程度かな？ 精々被害が少なくなる事を祈れっツの！」

「これ！ オルバニアン師父になんて事を。師父、我が部下の無礼は私の無礼。お叱りになるなら、どうぞ私めに」

珍しく殊勝なヨデイであった。

「よいよい。自分に素直な事は良い事ね」

「恐れ入ります」

（ねえ、これまでのヨディ特務大佐と印象違うじゃない？）

ミアネがヒソヒソと話していた。

（態度が全然違うなあ）

ラフエアがヒソヒソと。

（ちよつとくかつこいいですう）

エメティアはうつとりしていた。

そしてクララテリアは、

（周りをくるつと見回して……あつた！ 私の大切なものが！）
と、思った。

「ところでオルバニアンとか言っただかのう」

「なーに？　じーさん」

「これ！」

ヨディが窘める

「よい、よい。若はこの戦で、アヘイビア側とノーツ連邦側自体の戦いは、激しくなると言っているね」

「……………その、ディーヌ王子の予知ってどこまで当たるんでしょうか？」

クララテリアは師に訊いてみた。

「ほぼ百パーセントね」

サースー・ウィーは答えた。

「例えば貴女、クララテリアさん」

「は、はいっ」

「貴女は近々恋をするね。いや、もうしているかも知れないね。その恋は成就するね。でもその恋短いね。でも悲しむ事無いね。その恋貴女が終わらせるから。それもとても良い形で。その相手の人、貴女にとって、とても大切な事教えてくれるね。とてもとても良い人ね。ちよつと、おチャラけるのが玉に瑕ね」

「ヒュウ」

ミネアが口笛を鳴らした。

そのミネアが、

「あたしの事は？ 王子、何か言ってますでしたか？」
そう言った。

「御免なさいね。聞いてきたのクラテリアさんだけね」
サースー・ウィーは申し訳なさそうに言った。

「でもその戦争ね、短い短いよ。でもながびくね」
「？」

皆の頭に『？』が点いた。

「民族紛争ですね？」

ただ一人そう言った者がいた。
ヨデイである。

「そう、流石はヨデイ殿。王子も、その見識、洞察力、人望と人脈、
その他色々褒めていたね」

「はにやゝ弱っちゃうにやゝ」

「そうやっておチャラけるのが玉に瑕とも言ってたね。まあ、照れ
隠しだと王子は言ってたね」

「えへん！」

「私にはそうは見えないね。ただふざけてる人ね」

「がくつ」

「まあ、ふざけないで言うと、それ……民族紛争と共に、この国の
右派が軍を牛耳って、他国に侵攻すること。これが一番の心配事ね。
特に王子を担ぎ上げるのが心配ね。昔からの悪しき伝統ね。この国
の」

アヘイビア・ノリトレア・ノルブル・ドラスティス・レボトミノ
側各国とノーツ連邦・クーロン・リスパダハル側各国の戦いの火蓋
が切って落とされた。

実際に起こる激しい戦闘。

勿論これはアールヌーの独立戦争でもあるのでアールヌーも艦艇
を用意して戦った。

破壊力としてはピカ一の魔導砲は、多気音粒子キャンセラーによって封印され、その代わり大口径のプラズマキャノンとしての役を果たしていた。

実際そのほうが使い勝手が良く、小回りも利いた。

結果、双方激しい砲撃戦となった。

双方激しい艦隊船が昼となく夜と無くつづいた。

戦火は地上にも広がった。

その後、魔導機兵同士の激しい戦闘の結果、地上への戦火甚だ大はなはきいものがあつた。

正に酸鼻を極めるとはこのことで、ある都市では家屋の七割、人の五割が失われた。

トーガイア、ゴハク共にフル稼動となり、寝る間も惜しんでのまさに強行軍となった。

激しい砲撃戦、魔導機兵同士の戦いは主要都市二十一市上空、各々三隊に分けて七日間にわたって行われたものだから、市民にとっては堪らない。

陣取り合戦は明白なのに双方共に、平和の為、我々が防衛に来た、悪いのは敵陣営と、言い張るばかり。

それこそ当初こそは自由と開放を謳ったアヘイビア軍に期待が寄せられもしたが、開戦三日目で諦められた。

各都市も見ようによつては、蹂躪されたような有様に見えた。

両陣営、決定打を出せぬまま、事態は膠着状態となった。

先ずアヘイビア側は最前線から五十キロほどの撤退を開始した。

ノーツ連邦側でも五十キロ程の撤退を開始した。

双方ともまだ総力戦の時ではないと踏んだのだろう。

両陣営とも徐々に撤退を始めた。

瓦礫と焼け焦げた死体を残して。

ホツと一息ついたのはトーガイアとゴハクで、クララテリア達は久々に十分な睡眠をとることが出来た。

黒龍号も今回直接戦闘に参加しなかったものの、二十四時間、二

交代制であたった。

アシュマはこれと言って特に持ち場は持たなかったけれども、緊急戦闘要員として控えており二十四時間七日間待機状態だった。

それでもアシュマは、実際の戦闘に参加していないからと、ケロツとしていた。

その代わりアシュマは一度休みとなったら、二十四時間丸々眠り続けた。

その後散発的に小艦隊が来ては、攻撃を仕掛け帰って行った。いまだアールヌーは、完全な独立を果たしていない事になる。

「お早う。ヨディ」

アシュマはびしょびしょの頭でブリッジにやって来た

「ああ、夜ですよ。アシュマ君。真夜中です。頭びしょびしょですよ」

ヨディが注意した。

どうやらブリッジにはヨディしかいないようだ。

「うむ。今シャワーから出てきたところだ」

「『うむ』じゃ、ありません。ホントにもう頭びしょびしょのままです。こうして拭いてあげないと……ホントにもう子供なんですから……」

後からアンがアシュマの頭をタオルで拭き始めた。

（ん？）

「分かった、分かった。アン、後は自分でやるから……」

「ホントですよ？ 私はもう寝ますからね？」

「ほっ」

そうヨディがいった。

「何が、『ほっ』、なんだ？」

アシュマが訊き返す

「いつからアンと君は恋愛関係になったのかね？」

「そう見えるか？」

「そう見えるな」

「別に俺はアンに恋愛感情を持った覚えは無い」

「でもアンはアシユマさまに恋してますわ」

「アーチエル」

アシユマが振り向いた。

「分かるのですか？ アーチエル様」

ヨディが尋ねた。

「分かりますとも。主人ですから。少し妬きます」

「妬んで意地悪とかするなよ？ アーチエル」

アシユマは言った。

「しーまーせーんー！ 子供じゃあるまいし。私のお姉さんみたいなヒトなのに」

「そうか」

「でもアンは、あれでもアシユマさまが起きてこられるのを、心待ちにしていたみたいですけど」

「そうか。たったあんな十数秒のために？」

「私もその口ですけれど？」

「え？ 何時間寝てない？」

「二十六時間三十二分！」

「俺を待たずに寝ておけば良かったのに。でも、頑張ったじゃないか」

「んふふ」

「ご褒美に寝付くまで添い寝してあげよう」

「本当ですか？ アシユマさま？ じゃあ、わたくしシャワー浴びてまいります。少々お待ち下さい」

「いいよ。行っておいで」

アーチエルは鼻歌交じりにシャワーを浴びに行った。

「アシユマ君はお優しいですね」

ヨディが言った。

「そうか？ 俺は冷酷非道だと思うぞ？」

「それは『敵』に対してでしょう？ 貴方は身内にはとても優しい」
「こう言う場合、俺は何と言って応えれば、良いのかな？」

「別に応えなくて良いですよ」

「そうか、じゃあ話題を変えよう。ルーンの黙示録って当るものなのか？」

アシユマが言い出した。

「ルーンの黙示録ですか……。最後が嫌々な終わり方しているんですよ」

ヨデイが応えた。

「嫌な終わり方？」

「まあ、見てください」

そう言つて、ヨデイはタイン教の聖書を取り出した。

「さて、ヨデイ。自分で言っておいてなんだが、この国はアールヌー教の正に聖地、アールヌーだろ？ それが何故タイン教のそれもルーンの黙示録なんだ？」

「さあ？ そういえば。まあ、取り敢えず見てくださいよ」

私はそれを見た。

巨大な閃光が見えた。

私はそれを見た。

是にて新生人類は滅亡する

我が予言もこれを以つて成就する。

神は全てを見通せたり。

かくあるべし。

ターシャン。

「この『是にて新生人類は滅亡する』ってところ、もしこれが黙示録戦争後に『新たに生まれた人類』っていう意味だとちよつと嫌じゃないですか？」

ヨデイが気持ち悪そうに言う。

「当るのか？ それ？」

疑問符一杯で訊くアシュマ。

「さあ？」

「『さあ』ってヨデイ」

「聴きに行きましょう」

「え？ 誰に？」

「ディーヌ王子にです」

「たつた予言の為にか？」

「未来を知る者、全てを制するです」

『ルーンの黙示録をお読みなさい。全てはそこに書いてあります。道に迷ったら若の所を尋ねなさい。これはアシュマさんもそうですね』

（確かにそうだった。ルーンの黙示録は、それほどまでに当るのか？）

アシュマは

「どうせ訊くなら、なぜアールヌー教の指導者が、タイン教の予言を勧めたか、それも訊いてくれ」

アシュマは言った。

「アシュマさま。お待ちせしました」

振り向くとアーチエルが、にっこりほかほかで、やって来た。

「行くかい？ アーチエル」

「はい。アシュマさま」

「じゃあ、アーチエルを寝かしつけてくる」

「私、赤ちゃんですね」

「そうだな」

「もう。普通はそこで『違つよ』、とか『そんなこと無いよ』とか、言わないですか?」

「そうだな。そうだ、キスをしてあげよう」

「本当ですかあ? 嬉しいです」

(アーチエル様、十分子供であしらわれてますよ。アシユマ君に…さて、確かにこの予言は、どうやって見れば良いんでしょうかねえ? 実際に王子に聞いてみるのが良いですね。よし!)

ヨディは黒龍号を起動させ上空へ舞い上がった。

『ヨディ特務大佐! どこへ行つてしまわれるのです?』

クララテリアが非常回線で不安そうな声音で聞いてきた。

「大丈夫。クララテリア。王宮に行くだけですから」

『本当ですね? 直ぐ戻つてきてくれますよね?』

「本当ですよ。クララテリア。非常回線だからもう切りますよ?」

『あ、まって下さい。お慕い申し上げます。では』

「え?」

プツッ

「何だっただんだ今のは? 非常用回線だから、他の者には聞かれな
いにしても、何て大胆な、ふう」

(これがエファールにでも訊かれたらただ事じゃすまないな)

「何を小声で独り言を?」

ヨディはぎくりとした。

声の主が誰だか分かったからだ。

ゆっくり、ゆっくり顔を振り向かせていく。

それも機械的に。

相手の腰が見えた。

今度は視線を上上げていく。

それも、ゆっくりとだ。

相手の顔が視界に入る。

エファールだ。

「何、誰もいないと思って! 何いちゃいちゃしてんのよ! まっ

たくー!!」

エファールはヨディの首を絞めた。

「わっ！ わっ！ わっ！ 御免してエファールさん！ 首、首、

首……ハマってる……く、苦しい」

「なにさ、あんたの苦しみなんで、私の心の苦しみに比べたら……
比べたら……あゝ腹立ってきた！」

「わっ！」

思わずヨディは眼を瞑った。

(……?)

唇に暖かいものを感じ眼を開けると意外にもエファールがキスをしていた。

ヨディはエファールを抱きしめ改めてキスをした。

第三節 予言

サイコ・フライヤー黒龍号は宮殿の外れ、サイコ・フライヤーの発着場に降り立った。

「じゃ、皆さん後の護りはよろしく頼みます。トーガイアかゴハクから緊急の連絡が入ったら、そちらを優先してください」

「おう分かった」

オルバニアンが請け負った。

「いざとなったら姫さん起こすぜ？」

「致し方ありません。そこら辺は臨機応変に」

ヨディが言った。

「さあ、行きましょう。アシュマ君」

「分かった」

アシュマが応えた。

暫く歩いて、宮殿のほうへ向かっていくと、少し様子がおかしい事に気が付いた。

宮殿の使用人たちの態度がどこかぎこちないのだ。

「アシュマ君、気付きましたか？ 宮殿の様子がおかしい事に」

ヨディが言った。

「ああ、気になるな。王子の安否が気に掛かる」

アシュマも言った。

「走りますか？」

「いや、このまま歩いていこう。あまりこちらの様子の変化を知られたくない」

「なるほど、そうですね」

二人は歩いていき、そして宮殿の中央階段までやって来た。

二人は中央階段まで来て、上を目指して昇って行った。

宮殿中央塔までやって来た。

この中に殿下がおられる。

二人は中に入った。

ディーン・アデュニ第一王子に会うにはここから先にある階段を更に昇る必要がある。

階段の途中で、役人と出会った。

その役人たちが、するするすると出てきて、横に並び、

「殿下は今、病に伏せて、面会を差し控えております」

そう言う。

「……………」

（これか！）

二人は思った。

「分かりました。殿下にはくれぐれも『お身体』を大切に、お伝えください。くれぐれも『お身体』を大切に」と

ヨデイが言った。

役人たちは

「お察し頂き、有難う御座います」

「殿下には、必ず申し上げます」

などと言って感謝の意を表した。

「殿下に何かあったな」

アシュマが言った。

「そうですね。厄介ごとに巻き込まれていなければ、良いんですが……………」

「十中八九、そう見て間違いないだろう」

「いそいで帰りますか。こちらが厄介ごとに、巻き込まれる前に……………」

「ピ。ピ。ピ……………」

「アシュマ君、携帯なってますよ？」

「あつ、ああ」

「ピ！」

「もしもし。アシュマだが？」

『ああ、アシュマかい！？ アルミナだ！ 今、こっちはエライい

事になつてゐる』

「攻撃を受けてるのか!？」

『ああ、そうだよ。今はアーチエル姫が、頑張ってくれているけどね。多勢に無勢だ。いつまで保つか……』

「分かった直ぐに戻る」

ピ!

「ヨディ、お姫様抱っこだ」

アシユマが嫌々言う。

「いやん恥かしい」

ヨディがおどけてみせる。

「恥かしいのは俺も一緒だ!！」

「いやんうれしい」

「ふざけてる場合じゃないだろ!！」

「いやん、いけず」

ゴン!!

「いたい……」

「良いから来い!」

アシユマはヨディを（不本意ながら）お姫様抱っこをした。

「我が飛ぶのは暗雲の空

戦の女神を犯してもぎ取る

その背の羽根は既に漆黒

我が背に添えて我が羽根に

そして散るかなこのわが身

禁忌を犯して我が翼となれ

ウイング!!」

ヨディは、アシユマに掴まり初めて空を飛んだ。

「うわぁ、早いですね結構」

と、ヨディ。

「お前、重いな、結構」

アシュマは漏らした。

「なに行ってるんですか。アシュマ君の腕力ならば」

「相対的な重さを行っているんだよ！ 痩せろ！少し」

「何を言っているんですか！ この重みは全て筋肉でしてねええ…」

…」

黒龍号の発着場に着てみて、成る程、苦戦するわけだと思った。

プラズマキャノンのコアを持つてきている。

コアをむき出しのまま使用するとはなんとも乱暴な使い方だがそれなりに効果があるらしい。

実に効率的にシールドを一枚一枚、剥して行きその度にアーチエルが外に出てきていてシールドを付け足している。

このままではアーチエルがもたない。

アシュマはヨディと共に発着場の手前に戻ってきた。

「あの、アシュマ君？ ここ、シールドの外だよ」

「当たり前だ。幾ら鬼虎を装備しているとはいえ簡単にシールドの内側に入れるものか」

アシュマはそう言つて鬼虎を抜き放った。

プラズマキャノンのビームの束は鬼虎の念導境界面で鬼虎のエネルギーに変換され雷光として鬼虎に吸収されて行った。

アーチエルはそれを見てホッとしたのか、その場に倒れ気絶してしまった。

アシュマはそれを見て、怒りを顕にした。

「一体どこの勢力が、何をたくらむ！？ 事と次第によつては、何人たりとも許しはしないぞ！！」

アシュマはそう言つて、銀色の光に包まれた鬼虎を無造作に振った。

これによりプラズマキャノンは破壊され爆発。

近くにいた兵士数名が死亡。

更に宮殿の柱二本を斬り崩し屋根の下敷きになって数名が死亡。
アシュマはそのまま鬼虎を峰に返し齒向かってくる兵士に対して容赦なく鬼虎を振るっていた。

アンはアーチエルを黒龍号の中へ連れて行く為に船外へ出てきたが、こんなに間近でアシュマの戦闘を見たことが無かった。

まるで、悪鬼だ。

まるで、修羅だ。

愛する人の為に、ここまで……ここまで人は、変わるものなのだろうか？

アシュマ様、貴方はこのアンの為にここまで変わってくれますか？

「アン！ 早くアーチエルを連れて下がれ！ 逃げ！！」

「はっ、はいっ！！」

.....

アシュマは、兵を粗方退治した。

アシュマは気を失っている兵の一人を、起こして訊いてみる。

「おい、起きろ」

「.....！！ あ、悪魔だーっ！！」

「まて、逃げるな。その悪魔が命じている。そむけば未来永劫お前の魂は地獄に落ちたままだ」

「ひ.....」

「逃げるか？ 尤もお前が逃げるより早く、俺の刀がお前の首を刎ねるがな」

「に、逃げません、逃げません。何でも言う事をききます。だから

殺さないで」

「では訊く。お前はどの手の者だ？」

「ア……アング將軍……」

「そいつは何を狙っている？」

「そ、それは……この地を全てアールヌーのものにするため」

「この地とは？」

「エハボイ共和国、エドシャン王国、ハライン王国、ツハーイ共和国、ズーヌキ共和国、……」

「まだまだありそうだな。まあ、それは良い……アングは王子を囲い込み、何をたくらむのか？ アールヌーを、この地の覇者にする為か」

「アング將軍、何もたくらんでない！ 失われたものを、取り返すだけだ！ その為に王子の力借りるだけ」

「失われたもの？」

「その昔、我等の国土は、もっと広がった。それが異民族の襲来で、我が国土は失われ、民族は散り散りとなり、苦難の時代が何世紀も続いた。やつの事でアールヌーの国を、再建しても、周りの国々からの圧力で、国は少しも潤わない。しかし我々は今、やっと、失ったものを、取り戻すだけの力を得た。失ったものを取り戻して何が悪い！」

いつの間にか、アシュマの周りには、黒龍号のクルーがいた。

「馬鹿」

「馬鹿とはなんだ！ お前に我が民族の悲しみが、分かるか」

「馬鹿！！ お前達にその考えある限り、自分で自分の首を絞めているのが、何故分らない！？」

「お前、本当に悪魔か？ こんなに親切な悪魔、見たこと無い」

「くつ、もういい、行けッ！ その代わり軍には戻るな！ 二度目は無いからな！」

「良いのかよ、アシュマ。逃がしちまってよ」

オルバニアンがアシュマを非難した

「良いんだ。訊きたい事は聞いた。ヨディ。サースー・ウィー師のところへ戻ろう」

アシュマはヨディに言った。

「はいな。師が捕まっていなにか気になるわけね？」

ヨディはアシュマに返した。

アシュマは黒龍号のハッチを開いた。

そこには、アンの姿があつた。

「やあ、アン。さっきはすまなかつたな」

アシュマはアンに声をかけた。

アンはそれだけで舞い上がってしまい、顔を真っ赤にして俯いてしまった。

「いえ……、その、あのお怪我は……」

「アーチエルはどこかな？」

「……………え？」

「アン、どうしたんだ？」

アシュマが訊いた。

「すみません。何でも……………ありません」

アンがそう答える

「すまないな、アン。苦勞を掛ける」

そうアシュマが言った。

「アシュマ様……………」

アンはその一言で、全てが報われたと思った。

そこへ、アーチエルが自分のベッドブースからやって来た。

目覚めたのだ。

「アーチエル様！」

「アーチエル……………無事で何よりだ」

アシュマに笑顔が広がる。

「アシュマさま……………」

アーチエルも微笑みで返す。

アンは面にこそ出さないが、嫉妬をしていた。

自分でも気付かないうちに。

夜明け、サースー・ウィー師は今だ瞑想の只中にいた。
ところが……

「……ワシの瞑想を邪魔する者は誰ね？」

「師父、お久しぶりに御座います。アングに御座います」

「……アング將軍ね。お前、まだこの国にいたね？ お前、この国にいないほうが良いね……」

「何を仰います？ 私こそこの国の救世主。まあ救世主の手並みでも拝見してくださいな。おい、連れて行け！」

「はっ！」

「自分の足で歩くな。触る事許さないね」

「頑固な爺だ。ま、いい。適当に連れて行け」

（サースー・ウィーさんが連れていられちゃう~~~~~!!）

クララテリアが小声で皆に訴えていた。

（だめだ、落ち着け！ クララテリア）

ラフェアがクララテリアを押さえていた。

（何で落ち着いていられるのよ！ ラフェア）

（今行かないでいつ行くのよ!!）

（そりゃ、そ〜だけどさあ）

ミアネが同意はしたが……

「あ」

「はあ〜い、お嬢さん方。こっちにきてくれるかな？」
敵兵に見付かってしまった。

「はあ〜い」

明るいのエメティアだ。

サースー・ウィーと同じ便でクララテリアは運ばれるらしい。
手錠を掛けられ連れて行かれるところだった。

クララの上を何か影がよぎった。

(……鳥?)

クララは思わず上を見た。

まぶしかったので、手をかざした

鳥などいなかった。

その代わり手錠の鎖が断ち切られていた。

「あ……」

クララの表情に喜びが蘇る。

彼女はミニスカートの下、内腿のホルスターから拳銃を取り出し、

手を上げて！」

そう兵士達に言った。

クララ達は兵士を縛り上げると、サースー・ウィーを助ける為アング將軍のサイコ・フライヤーに『入り口』から乗り込んだ。

「ああ、師父！」

「いかん！ ここに乗り込んで！」

サースー・ウィー師父は言った。

「え？」

全員乗り込んでしまった所で、ハッチが閉まった。

「え？ え？ え……？」

「お嬢さん方、そこは、『出入り口』じゃないんですよ
そう。」

ここは囚人を入れておくための、鉄格子部屋だった。

「あんた誰よ」

ミアネが言った。

「私ですか。私はアング將軍。これからアールヌーの代表となる者
だ」

「何よ、それ、やってること、クーデターじゃない!!」

ミネアが怒った。

「まあまあ、ミネア」

クララが言った。

「貴方、私達と仲良くしておいたほうが良いわよ？」

「クララ、あんた何を言っているか、分かっているの!？」

「まあ、任せてミーちゃん」

「!」

「クララテリア!! おめえ、まさか仲間を売ろうつてのか!？」

「ラフェア、まって!!」

「ミネア……」

「ほう、どう、良いのかな? 君たちと仲良くすると?」

アング將軍は言った。

「修理船トーガイアと補給船ゴハク。あれの運用を任されてるの、私達なんだけど。このまま、ここにいても、良いのかしら? あれの運用、素人には無理よ。私達だって、専用の特訓を一年半もやらされてきたんですもの」

クララテリアは言った。

「すると自分達を人質にするよりも、艦の運用要員として使え……
こう言うことか?」

「そつよ」

「……………」

「……………」

「そうか。分かった」

「ふう」

クララテリアはホッとした。

クララテリアの狙いは人質の人数を少しでも減らして、サースー・ウィー師や、ディーヌ・アデュ二第一王子へ一人でも多く、救出させる人数を裂くことにあった。

……………が。

きゅっ!!

と、言う音と共に天井が丸くくり貫かれ、上から人が降りてきた。

「アシュマ様だわ」

クララを除く三人がうつとりとした。

「確か貴様は……アシュマ・アトー!!」

「貴様に名乗った覚えは無いがな」

アシュマは鉄格子部屋に近付いて行った。

「きさま、それ以上近付いてみる！　う、撃つぞ！？」

「撃てるものなら撃って見る」

「！　おのれ、愚弄するか！　撃て！　撃て！！」

激しい発射音とマズルフラッシュで艇内は騒然とした。

だが、アシュマも含め、鉄格子部屋は、既に鬼虎の念導境界面内に入っており、弾丸は全て鬼虎の念導境界面内で光と変わり雷光となって鬼虎の本身に吸収された。

「お、おのれ！」

「止めて置け。影武者風情が」

「なっ、なにっ！」

アシュマは念導境界面ごと機体を『切り取った』。

たちまちアングの影武者（？）は機体の外に放り出された。

鬼虎の念導境界面包まれた球体は、重力に反してゆっくりと地上へ降りて行った。

「ご老体、お待たせいたしました。直ぐに戒めを外しましょうな」

アシュマが無造作に鬼虎を一閃させるとサースー・ウィーの手首の手錠が両断された。

「おお、楽になったワイ」

サースー・ウィーが言った。

「ご老体、ディーヌ王子が幽閉されているようです。アング將軍によつてでしょう。おそらく宮殿のどこかだと思つが……」

アシュマが訊いた。

「それより、さっきの奴が、どうしてアングの影武者と分かったね？　どうしてね？」

「気の色です。初めて会った時と、まるつきり違った……。それよりアングが居そうな場所は分かりませんか？」

「……知恵のドームね……」

サースー・ウィーは呟いた。

「知恵のドーム？」

「そ。これ門外不出ね。名前も存在も。場所も。尤も王族以外、場所知らないね。アールヌーの本当の聖地ね」

「本当の聖地。そこには何が」

「それを知る者、王族だけね」

アシュマの念導境界面の球は砂漠に下りた。

「大丈夫。心配ない。ヨデイが直ぐに駆けつける」

「まあ」

皆、喜色を示した。

特にクララテリアが喜んでいた

暫くすると本当にサイコ・フライヤー黒龍がやってきた。

黒龍が地上に降りると先ずアーチエルが降りてきた。

アーチエルはアシュマに跳び付き、

「お帰りなさい、だんなさま。お体のほうは大丈夫ですか？」

と、言った。

跳び付いておいてそれは無かるうと思ったが……可愛いので許した。

「大丈夫だよ、アーチエル」

そう言つてアシュマはアーチエルの頬にキスをした。

アーチエルはそのまま黒龍号の中に入ってしまった。

「ヨデイ特務大佐！」

クララテリアはヨデイを見つけると飛んで行った。

「クララテリア以下四名無事であります」

クララテリアは言った。

「うむ、ご苦労！ お？ 顔つきが変わったね？ 何か良いこともあったかな？」

ヨデイが言った

「はい！」

（それは貴方と出会えたことです）

クララテリアは心の内で呟いた。

アーチエルが艦内に行った所で、アンがアシュマのところに来て来た。

「お怪我とか無いですか？ アシュマ様？」

アンが言った。

「アンか、大丈夫だよ」

アシュマがそう言った。

しかしどこと無く元気が無いように見える。

（そうか。さっきのアーチエルへのキスカ）

「アン、アーチエルへのキスは仕方の無い事だろう？」

「分かつてはいるつもりなのですが……女と言う生き物の業が……」

「嫉妬と言う奴か」

「はい……」

「アシュマ・アトー、男冥利に尽きるかな」

「は？」

「冗談だ」

「ふふ、ふふふ」

「どうした？ 笑って」

「いえ、まさかアシュマ様が冗談を言う方だとは思わなかったもので……ふふふ」

「打ち合わせがある。艦内に行かねば……」

「はい、分かりました」

アシュマが黒龍号のブリッジに行く。

「アシュマ遅いぞ！」

オルバニアアンが怒る。

「済まない」

アシュマが謝る。

「皆、聞いてくれ」

ヨデイがミーティングを始めた。

「デイーヌ王子が、アング將軍なる者の手に落ちた。これは由々しき事態である。なぜならアングの命令が、全て王子の名で発布され

るからである。するとどうなるか。このアールヌーの軍を、アング将軍が私物化出来る状態になる。そうなる前に手を打ちたいのだが……。サースー・ウィー師父」

ヨディがサースー・ウィーの名を呼ぶ。

「なんじゃね」

「王子と、アングは知恵のドームに居ると仰いましたね？」

「いうたよ」

「で、その場所は分からないと？」

「王族にしかね」

「！？……王族は他にも居ると？」

「居りますとも。レンヌ・アデュニ第二王子が」

「だーっ！……！ 何でそれを早く言わないんですか！？」

ヨディは、身振り手振りのジェスチャーまで加えて、憤慨遣る瀬無い、と、言う風に訴えていた。

「何怒ってるね？ わし何か悪い事言ったかね？」

「第二王子が居るなんて何で言わないんですか？」

「知っているかと思つて……」

「知っているわけ無いじゃないですか。で、第二王子は今どこに？」

「ワシの山小屋におるね」

「じゃあ王子を確保しに行きましょうよ」

「そうですレンヌ第二王子をお救いしましょう！」

クララテリアが追隨した。

エファールの方頬が、ひくつ、とし、ゆっくりヨディを見上げた。

「お、オホン！ で、ではこのまま黒龍は、サースー・ウィー師の庵へ向かう！ 敵がいる場合は、これを排除する！ ただし、無理は厳禁。王子を死なすような事が、あつてはならない！ 以上だ。

各自持ち場に就け！」

各自が持ち場に着きグリーンランプが点灯していく。

「黒龍号、発進！！」

ヨディが号令をかける。

（はあ、ヨディ様……）
クララテリアが甘い溜息をついた。

暫く飛行した後、黒龍号は目的地に到着しようとしていた。

「皆さん、もう直ぐ現場に到着します。戦闘準備をお願いします」

「ヨディ様、私達に出来る事は何か有りませんか？」

「じゃあ、後の砲座四基にそれぞれ付いていただけませんか」

「分かりましたわ。ヨディ様。みんな、私についてきて！」

「はいな！」

ミネアたちが続く。

「『ヨディ様』？ あんた……」

エファールがヨディに、方頬をゆがめる笑いをしながら言った。

ヨディは、引きつった笑いをしながら、何も言えなかった。

「あの子達に何かあったら、ただじゃ済まさないからね」

エファールが、ヨディに釘を刺した。

「ヨディ。俺は一足先に出る」

アシュマが言った

「そうですか分かりました」

言ってヨディはゴンドラを用意する。

「あ……」

アンは何かを言いかけたが、何も言えなかった。

アシュマは、アンに向かって微笑んだ。

だがそれも直ぐに終わらせアシュマはゴンドラへと向かった。

アーチェルが後を振り返り、

「どうぞ、お気をつけて」

そう言った。

アシュマは微笑みながら、

「分かった」

と、だけ言った。

ああ、この言葉だ。

『お気をつけて』と、私はこの言葉を、言いたかったのだ。
アンはそう思った。

アシュマが黒龍号から飛び立って、サースー・ウィーの庵を目指して飛んでいると、案の定アング將軍の手の者が、少年をサイコ・フライヤーに乗せんとしている所であった。

あの少年がレンヌ第二王子に違いない。

アシュマは気配も無くそこへ降り立つと、王子を掴んでいる兵士の腕を、鬼虎でへし折った。

兵士は自分の腕を押さえて、

「ぎゃああ！」

叫んだ。

「うるさい」

アシュマは兵士の腹部を鬼虎で叩いた。

途端に兵士は黙って、ぐんにやりと地面に倒れこんでしまった。

「レンヌ第二王子とお見受け致します」

アシュマが言った。

「そちは？」

「アシュマ・アトーと申します。兄君、ディーヌ殿下に助勢する者です」

「おおつ、そちが剣名高きアシュマ・アトーか！一度会いたいと思っていたぞ。兄上はいずれそちは武道の王になると言っていたぞ」

「その話はおいおい。今はこちらへ」

言ってアシュマは、レンヌ王子を片手で抱え上げた。

直ぐにサイコ・フライヤーから、追手が剣を片手に出てきた。

アシュマは、それを片手で軽く捌きながら

「我が飛ぶのは暗雲の空

戦の女神を犯してもぎ取る

その背の羽根は既に漆黒

我が背に添えて我が羽根に
そして散るかなこのわが身
禁忌を犯して我が翼となれ
ウイング!!」

そう言っで飛び立った。

「馬鹿な。人間が空を飛ぶなんて……」
アング將軍の手の者が、驚いていた。
一方こちらでも随所で驚いていた。

「さつきはまさかと、思っていたけど……空を飛んでるのって、あれってアシュマさんよねえ？」

クララテリアは言った

「きゃっアシュマ様、空も飛べるなんてカッコ良い！」

ミネアたちは喜びの声を上げた。

「あ、そう。ミっちゃん達はアシュマさんなのね？」

「何、言ってるのよ。アンタがヨディ様」に、熱を上げたものだから、仕方なく譲ってあげてるんじゃない」

ミネアがそう言った。

「おろ？ 私は最初からアシュマ様、一本やりだったわよ。年下だけど、頼れるっって感じが良いのよね」

ラフェアが言った。

「あっあっ、私もですっ」

エメティアも言った。

「あ、あんたら裏切ったわね」

「別に裏切ってなんかいないですっ」

『各砲座！ 下から上がってくる、サイコ・フライヤーに照準あわせ！』

ヨディが言った。

「しょ、照準合わせました！」

クララテリアが、慌てて言った。

『撃ッ』

黒龍号から放たれる砲弾が、次々と敵サイコ・フライヤーに命中し、サイコ・フライヤーは爆発飛散していった。

『みなさん、ご苦労様です。いったん下に下りましょう』

「はい！」

クララテリアが、一番元気良く応えていた。

「あんた、あのクララって娘、どうやって手なずけたのよ」

エファールが言う。

「あの娘って言いますけど、エファールさんと同じ年ですよ？」

「うそ！？」

「爺！」

レンヌ第二王子は、サースー・ウィーに抱きついた。

「おお、若、小若！」

「小さいから小若なのね？」

アルミナが訊いた。

「俺に効くな。俺だって、良くわかんねーんだからよー」

オルバニアンが返した。

「爺、僕ね、僕ね、怖かったんだけど、一生懸命頑張ったの！でも、連れて行かれそうになって、怖いーって思ってたんだけど、そのね、そのね、アシユマ殿が来てくれたの。そしたら敵をバシバシーってやつつけてくれてね……」

「？ どしたの？ リイナ？」

アルミナが訊いた。

「わ」

「『わ』？」

「私好みだわーっ！ー！ あのものとも弱々しげで、健気な所が、思わず護ってあげたくなるわー！ー」

リイナが叫んだ。

「鼻息荒いわよ、あんた。だいたい弱々しげな所がゝなんて、一番
アンタの嫌いそうなタイプじゃなくて？」

「そういうのもいる。殆どがそうだ。だが、あのレン又王子は違う
！ あたしの命に代えても、護ってあげたくなるタイプだわ」

「まだねんねの癖に、良くそんな口が聞けたもんだ」

「なにおう！ 誰がねんねだ！」

「ねんねをねんねと言って、何が悪い」

「くすっ」

笑う声が聞こえた。

「な、なに？」

「！」

アルミナとリイナがそちらを振り向いた。
すると、レン又王子が、

「仲がお宜しいですね。ご姉妹ですか？」
そう言った。

「やですよ、王子。姉妹なんかじゃ、ありませんって」
そうアルミナが言った。

「……………」

リイナは黙ったままだ。
下を向いて、もじもじしてる。

「何照れているのよ、挨拶しなさいよ」
アルミナが、リイナの頭をぺしつと叩いた。

「……………何も言い返してこない。
いつもだったら、何か言い返しても、良さそうなものだった。
すると……………」

「うえつく。ひつく。うえ……………ひつく」

そう言って、リイナは泣き出してしまったではないか。

「あ？ あれ？ 普通のリイナ？ 今は、生意気リイナじゃないの
？」

「リイナって言うんだ？ 僕レン又。宜しくね」

「う、うん……よ、宜しく……うつく」

二人は手を繋いで庵の中へと入って行った。

庵の中で作戦会議が行われた。

「まずは、王子、兄君を救い出す為、知恵のドームの、在り所を知らねばなりません。お教えいただけませんか？」

ヨデイが尋ねた。

レンヌ王子がサースー・ウィーを見た。

サースー・ウィーはレンヌを見て頷いた。

レンヌも頷いた。

「皆さん、知恵のドームは……カンロン山に有ります」

「……………それで？」

ヨデイが訊いた

「……………それだけです」

「だーっ！？ それだけって、それだけの情報じゃ、わかんないのと一緒にゃん！！」

オルバニアンが言った。

レンヌは、リイナと繋いでない方の手に、握りこぶしを作って、耐えていた。

リイナはそれを見て思った。

きつとレンヌは、歯がゆいのだろう。

自分も勿論兄の救出に、手を貸したいのだろう。

だが情報も体力も、手助けするのに至っていない。

こんな自分が情けない。

レンヌは、きつとそう思っているのだと、リイナは思った。

「オルバニアン！ 謝れ！！」

リイナは叫んだ。

「！？ な、なんだあ？」

オルバニアンが言った。

「レンヌ王子は、持てる力のありつたけを使って、私達に情報を提供してくれた。カンロン山だけじゃ分からない？ 何を言ってる」
カンロン山に知恵のドームはある』んだぞ！ この国土と比較してみろ！ 大分範囲は狭まったではないか！ 後はカンロン山を血眼になって探せば、良いだけじゃないか！ 何を文句言っているんだ！ 文句を言う前に働け！」

リイナが論を展開した。

「わ、悪かった。王子も」

オルバニアンが詫びた

リイナの手をぎゅっと王子の手が握ってきた。

「ありがとう、リイナさん。見惚れてしまいました」

レンヌ王子がそう言った。

『見惚れてしまいました』

『見惚れてしまいました』

『見惚れてしま』

『見惚れて』

『見惚』

……

それはリイナの心で、心地よくリフレインしていた。

「まあ、リイナ大変。さあこっちへいらっしやい」

アーチエルは、リイナを連れて行こうとした。

「まで、アーチエル。どこへ連れて行こうというのだ。私はここが

……」

リイナは拒否の意思表示をした。

「あなた、そんな鼻血を出して。ほおって置け無いでしょ」

アーチエルが鏡を見せた。

本当だった。

それも半端な量じゃなかった。

ああ、これで自分の恋は、終わったなとおもった。

「王子、ありや王子にのぼせ上がったんだぜ。リイナは」

オルバニアンが言った。

王子は見る間に顔を真っ赤にし……

「アーチェル一人追加よ」

アルミナが来た。

連れを見るとレンヌ王子だった。

王子も鼻血を出していた。

「何、ませてんだか」

とは、エファールの談。

「うー……おほん！ では、会議を進める。では、まずカンロン山にあると言っ知恵のドーム。これを捜すには……爺、おるか？」

「はっ、これに」

アベニが、ぼあつと現れた。

「おわあっ！」

「ここに御座る」

「ここにいる爺と……」

「あーっ、わたしもー」

リイナが名乗りを上げた。

「どうでござるか？ ワシの臍霞は？」

アベニ爺がアシュマに出来を聞いた。

「上出来だ。これならどこへ出しても恥かしくない」

アシュマが太鼓判を押した。

「アシュマ殿は分かり申したか？」

「……分かった」

「そ、そうでござるか……残念に御座る」

「まあ、それは、後々の楽しみに取っておくがいいさ」

「お話を進めて良いかな？」

ヨディが言う。

「どうぞで御座る」

「じゃあ、アベニとリイナで知恵のドーム搜索をたのむ」

「分かったで御座る」

「分かったわ」

「後は後手後手に回るが、しょうがない。敵の出方を待つしかない……さて、漠然としているが以上だ。何か質問は」

「あの……私達はどう行動すれば宜しいですか？」

クララテリアが訊いてきた。

「あゝ君達は、自分の艦で待機だ。今後どういう命令系統になるかは分からないが、最悪の場合、自分の判断で行動してくれたまえ。まだ質問したそうな、顔をしているね。クララ」

「あの、もしもヨディ特務大佐が、アング將軍の言いなりに……なんてことになる可能性は……」

「十分考えられる。寧ろ^{むし}そうなる可能性のほうが高い」

ヨディはそう言った。

「そんなヨディ様……」

クララテリア呟いた。

（！ また、この女といちゃついて……）

エファールがそう思いかけたが……

「最悪はヨディ様……貴方と戦わなければならない事も、考えられるのね？」

クララテリアは今にも泣き崩れそうだった。

「最悪はそうなりますかね。考えたくは有りませんけれど」

ヨディが非情な事を言った。

「ですが……」

クララテリアは限界だった。

エファールはつい助け舟を出したくなって、

「クララテリア大佐！」

大きな声音で言った。

「そんな事は絶対にさせません！ 女の意地と名誉にかけて！」

エファールが続けて言った。

エファールの情け深い一面が見て取れた。

「そ、そうですね。今ここで泣き崩れるのは簡単だけど、黙って

みている手は無いわ。ありがとう。特務補佐官」

「はあああ、またこうやって、恋のキューピッド役になっていくのね。情けない」

エファールが一人呟いた。

「そうですね。悲しいですねえ」

ヨディは、言わなくても良いことを、言ってしまった。

「何よ！ 誰のせいだと思ってるのよ？ あなたよ！ あなた！！」

……あたしゃ、ホント……はあ……情けないやら何やらで……！！」

エファールはヨディの首を絞めた。

「うわつく・苦しいエファールさん……！！」

「今日はもう解散かな」

「そうじゃない？」

「ならいくか」

「そうね」

みんな口々に解散を連呼してミーティングの部屋を出て行った。

「う、老師、王子、後で伺いたいことが……」

「またそうやって、女のところに行こうと考えてるんでしょ？」

（す、鋭い……！！）

ヨディは、また首を絞められた。

「うつ……くくく……く……っ……！！」

「爺、ヨディ殿とエファール殿は、何をしてるのか」

レン又王子は訊いた

「若君あれば、じゃれあっているのね。子供の見るものじゃないね」

サースー・ウィーは、にべもなく答えた。

「あ、リイナ！」

レン又王子はリイナを呼び止めた。

「なあに？ レン又王子？」

「さっきはどうも有り難う」

オルバニアンの事だ。

「いいの。王子のためだったら」

リイナは照れながら言った。

「さて、お二方に来ていただいたのは他でもない。ルーンの黙示録についてお話をお聞きしたかったからです」

ヨディが切り出した。

ヨディの側からは、アシユマとオルバニアンとヨディ。

師父側からはサースー・ウィー師父とレンヌ・アデュニ第二王子。
「早速です……がつ！」

ヨディはタイン教の聖書を取り出した。

机の上に、ズシン！ と置かれ、埃をもうもつとさせたそれは、
四〇五キロは有りそうな原書だった。

「ごほつ。ごほごほつ。何も、原書でなくても、ごほつ。良かった
んですよ？ 携帯に不便でしょう？」

レンヌ第二王子に言われた。

「そうですね。じゃあこちらの普及版で」

ヨディは、普及版で話を進める事にした。

「その前にお聞きたい。アールヌーの民はタインを聖者として認
めていないはず。それが何故ルーンの黙示録を？」

ヨディが訊いた。

「答えは簡単じゃ」

サースー・ウィーが言った。

「当っているからじゃよ」
と。

「成る程。では早速解説を初めて欲しいのですが」
ヨディは解説を頼んだ。

「うむ。良かる。……では、一章、二章は飛ばしてよいね。これ、
神にささげる詩だから。で、問題なのが、三章、四章ね。これはも
う当って済んでしまった事ね」

「えっ！ 終わっちゃったって事かよ、爺さん！ そうしたら、さ

つきちよろつと読んだ『是にて新生人類滅亡せり』って書いてある
章まで後四章しかないって事かよ」

オルバニアンはパニクった。

「オルバニアン、先走るな」

アシュマが言った。

「師父、続きを」

「うむ。正確には三章と四分の三くらいジャがのう。くわつ。くわ
つ。くわつ。くわつ。……で、先ず三章であるが……

血脈を同じくする者の諍い、大地を血で染める事になるだろう。

これは嘆かわしい事である。

招かれざる者に蹂躪される事、これは辱められる事に等い事であ
る。

人の血を天秤で量り売る。

これは人の所業にあらず。

この間、偉大な龍はその眼を潰される。

祝福されぬ命の者、地上に災いの黒い太陽を以って大地を抉る。

大変多くの者を亡者にさせる。

なんと恐ろしい事か。

おお、神よ、私はそれも見た。

嘆かわしい事である。

この世にあつてはならぬ光である。

これで終わりではない。

これが始まりである。

「と、あるな。これはマリク紛争の事じゃ」

サースー・ウィー師は語った

「お」

と、低いどよめきが起った。

「まず『血脈を同じくする者の諍い、大地を血で染める事になるだ

ろっ』とあるが、これは同族で戦う事、つまり同じ民族同士で戦う事を示している。次に『招かれざる者に蹂躪される事、『これは辱められる事に等しい事である』とあるがこれはアヘイビアの参戦と、見てよかる。『この間、偉大な龍はその眼を潰される』これであるが、龍はクーロンの象徴とされておる。その眼が潰されるのじやかな、これはクーロン首都爆撃に違いない」

「成る程」

「で、じゃ。問題の『祝福されぬ命の者、地上に災いの黒い太陽を以って大地を抉る。大変多くの者を亡者にさせる』これじやが、『祝福されぬ命の者』『黒き太陽』難解な語句が続く。だがこの一節で一番重要なキーワードはこれじや」

サースー師父が指差した言葉は……

「『抉り』じや」

だという。

アシユマの顔色が俄かに曇った。

「流石にこれらの語句を前にして大若は流石に迷っておられた。見えないとまで仰った。特に『祝福されぬ命の者』これが全く何のことかサツパリじゃったらしい。だがマリク紛争のどん詰まり、あの災厄は起こった。『抉り』。正にそういう表現が、ぴったりの状況じやわい。これで『黒き太陽』は鬼虎の力『祝福されぬ命の者』は……お主じや、アシユマ・アトー。今後も出てくる『祝福されぬ命の者』と言う表現は、全ておぬしの事と思って、先ず間違いないかる。『祝福されぬ命の者』と言う異名に、何か心当たりは？」

「有ります。俺は遺伝子操作で、生まれて来たと、思ってください」
アシユマはそう言った。

「なんと、そういう出自であつたか」

「もう少し詳しく言えば、色々弄繰り回された遺伝子で出来た人間に、後から更に弄繰り回されたと思ってください」

「待ってくれ爺さん！ 鬼虎の黒き太陽って言うけれど、あのときや、太陽って言うより、ありや扁平な煎餅って感じだったぜ？」

オルバニアンが反論した。

「あれは始めは球体だった」

アシュマが言う。

「アシュマ……」

「じゃあ、次の章行つて見るかね？」

サースー・ウィーは言った。

「お願いします」

と、アシュマ。

「では行くかの」

師は言うつと、次の章の解説に入つた。

いつの間にかギャラリーが出来ていた。

アシュマ後にはアーチェルとアンが

ヨデイの後にはエフアールとクララテリアが

レンヌの隣にはリイナが

オルバニアンの隣にはアルミナが

その他にはミアネ達がいつの間にか寄っていた。

円形の大陸に住まうもの、既に幸福では無い。

その都に住まうもの、半分はもう福音を聞けない。

人々は炎によって半分を失う。

また、その人、巨大な亀に乗つて神の都を潰そうとするだろう。

これ、はなはだ不忠な事である。

一時、地上に黒き光を見る。

私はそれを見た。

これはちいさいこそすれ人々を覚めぬ悪夢に導くものである。

その光こそこの世に有つてはならぬものである。

「これが、つい最近話題になった、リスパダハル事変についての記述だね。『円形の大陸』は……まあ厳密に言うつと円形じゃないけどこれは、諸説から見てこれは南極大陸ね。もう、『極』ではないけ

れど、極に大陸があつた頃、上から見れば丸かつたね。氷河も含めて。これらの解説は簡単ね。『円形の大陸に住まうもの、既に幸福では無い。その都に住まうもの、半分はもう福音を聞けない』これも簡単ね。これはこの間のリスパダハルの首都の惨禍、戦艦同士の魔導砲の撃ち合いのことね。『また、その人、巨大な亀に乗って神の都を潰そうとするだろう』何か亀形の乗り物出てきたか？ 知ってるか？」

「ヘルガギルテの事かなあ？ 上から見れば正六角形だし、直径数キロだし、押し潰せそうだし」

オルバニアンは言った。

「おそらくそれだ。中に殻兵器を仕込んでいた。事実一発撃った」
アシュマも言った。

「そういうことかね。大体こんな所かね」

「師父。次を」

ヨデイが催促をする。

「最後までやらす気かね？」

サースー・ウィーが辟易して訊いた。

「行ける所まで」

ヨデイがにつこりしながら頷いた。

「次は」

サースー・ウィーが眼で探した。

「第五章です。師父」

レンヌが言った。

「おおお、そうか」

太陽の影で

我らが故郷、戦場になるであらう。

我らが故郷をそれはまさに土足で踏みにじる行為である。

一頻り蹂躪された後、悲しきかな、兄弟と相見えなければならぬ。
い。

その間、祝福されぬ命の者、敵の軍勢の半分を押さえる。

祝福されぬ命の者、既に鬼を携えており、対になる者、鬼を携えて来る。

この時、祝福されぬ命の者と対になる祝福されぬ命の者相見えるだろう。

この一対、空に予兆を残す。

私はそれを見た。

はなはだ不吉である。

このとき知恵の半球が出現するのを見た。

これにより我らが兄弟の諍い一旦は治まるだろう。

されど将来にわたり禍根を残すものである。

「これはおそらく、この国の事ね。はつきりとは言えないけど。状況証拠でそうだと言えるかも知れないね。で……さつき龍が象徴の者はクーロン言ったね。太陽も象徴の国あるね」

「どこですか？」

ヨディが訊く。

「予言学では太陽はノリトレアね。それが証拠にノーツ連邦から独立を宣言しようとしたら、真っ先に乗り込んできたのノリトレアね。独立の為の戦争もノリトレアがあつたればこそ、できたようなものね。『太陽の影』とは、ノリトレアの影響下で、と言うことね。『我らが故郷、戦場になるであらう。我らが故郷をそれはまさに土足で踏みに行き行為である』それはもうこの間からの、双方の陣営の砲撃のやり取りで明らかね。正に土足で踏みに行きようなことをしたね。ここからが予知になるね。さて、やるね。『一頻り蹂躪された後、悲しきかな、兄弟と相見えなければならぬ』うゝん若こはなんと云つてたかな？」

サースー・ウィーは考えた。

「兄上は『兄弟と相見えなければならぬ』とは、この周辺諸国での衝突が起これと云えておいでです。それを嘆いておいででした。

またこの頃、アング將軍の影が大きく見えるといつていましたから。嘆かわしい事です。……あつ、これは僕の予測も入ってしまったので正確な未来予測とは異なるかも……」

レン又は言った。

「いえ、なかなかの識見かとお見受けしました。素晴らしい」
ヨデイが畏まった。

「どこそのバカにも爪の垢でも煎じて飲ませたいぐらいです」
「けっ」

オルバニアンは悪態をついた。

「いやあ」

レン又は照れていた。

「もつと素直に喜べば？」

リイナが言った。

「いやあ……」

レン又は照れまくった。

語り部はレン又に交代していた。

「『その間、祝福されぬ命の者、敵の軍勢の半分を押さえる』とはアシユマさんが読んで字の如くの働きをなさるのでしょうか？ 甚だ疑問ではありますが、そう取るしかありません。『祝福されぬ命の者、既に鬼を携えており、対になる者、鬼を携えて来る』……祝福されぬ命の者……これはアシユマさんだとして、鬼は鬼虎。『対になる者』……これが分かりません。兄上もこちら辺は見えぬと申しておりました。でも次の行に『この時、祝福されぬ命の者と対になる祝福されぬ命の者相見えるだろう』と、対を成しています。アシユマさん、誰か心当たりは知りませんか？」

レン又は訊いた。

「待ってくれ、そうそう何度も逆に訊かれると、まるで俺を中心に世界が回っているみたいだな」

アシユマが冗談交じりのつもりで言った。

「そうです。ルーン自身がそう言っています」

レンヌは大真面目で応えた。

「それは、ここです」

指差した先は

「第一章、神に捧げる賛歌のこの部分、『これを祝福されぬ命の者に捧げる。例えこの者が人の子ならずとも、人を代表とするものだから。世界はこの者を中心に回るだろう』こう書いてあります」

「そのまんまやな」

オルバニアンが言った。

「さて先程の質問、『この時、祝福されぬ命の者と対になる祝福されぬ命の者相見えるだろう』……対になる人は誰か、心当たりはありませんか？」

レンヌは再度アシュマに問うた。

「……ナンバーズは論外、イレギュラーナンバーズもこれに当てはまる者がいるかどうかこれまた疑問。となると誰だ？」

「アーヌ様では御座いませんでしょうか？ 若しくは四天王の内のどなたか」

アーチエルが、恐ろしい事をさらりと言った。

「アーヌか。……そうか、そうかも知れん。……ということは、これより一行前の文章、『祝福されぬ命の者、既に鬼を携えており、対になる者、鬼を携えて来る』！ これはアーヌが自分の鬼虎を手に入れてやってくる……という事ではなかるうか？」

アシュマが言った。

「そ、そんな最悪の組み合わせ、言わないで下さいよ」

ヨデイがまさかと言った顔で言った。

「そ、そうよ。アーチエルもそんなアーヌに『様』付けしてえ」

エファールが半ば震えながら言った。

「じゃあ『この一対、空に予兆を残す。……はなはだ不吉である』ってこの一節は？」

オルバニアンが訊いた。

「兄上が言うには、それはただの現象だそうです。ただルーンが、

どうやってこの映像を見たかは知りませんが、空に『予兆』的なものが見えれば、それは大層『不吉』に見えたでしょうね。またこの後の運命が恐ろしいものだったり、悲しいものだったらやはり『不吉な予兆』なのかもしれません。寧ろ問題なのは、『このとき知恵の半球が出現するのを見た』。もしこれが知恵のドームだとしたら、『これにより我らが兄弟の争い一旦は治まるだろう』これは呼んで字の如くだと思います……が、『されど将来にわたり禍根を残すものである』と、ここまでの威力を持つ知恵のドームとは一体……？

「じゃあ、次行こうぜ、次」

「少しやすみませんか？　少々疲れました」

レン又王子は、ふう、と目頭を押さえた。

「レン又王子、これを」

横合いからリイナが冷たい飲み物と熱い蒸しタオルをもってきた。

「ああ、リイナ有難う」

言ってレン又はリイナに微笑みかけた。

「いや、なんて事無い」

リイナは照れて言った。

アンも人に先駆けて冷たい者と蒸しタオルを取りに行った。

万事こう言うことをするのが生業の人間である。

アーチェルよりも早くとりに行った。

確かにアーチェルよりも早く取りに行ったのだが、その代わりアーチェルは、アシユマに自然と抱きついて、アシユマとたあいもない事で歓談していた。

別に計算していたとか、意地悪をしたとか、そういうのでは無い。ただ二人にしてみれば、自然とこうなったただけであった。

しかしアンにとっては、そんな二人を見ているのさえ辛かった。まあ、兎にも角にももってきた蒸しタオルと冷たい飲み物をアシユマに渡さなければならなかった。

「あの、アシユマ様。冷たいお飲み物と蒸しタオルをもってきました」

「！ 有難う、アン」

アシュマはアンに微笑んだ。

アンにはその微笑で十分だった

アーチエルが立ち上がった。

「どこへ行くんだ？」

アシュマが尋ねた。

「そのままできて、アシュマさま……よつと。冷たい飲み物と蒸しタオルを取ってきます」

アーチエルが答えた。

「何を言ってるんだ？ あるじゃないか」

「アシュマさまのでは御座いません。わたくしので御座います……すつと」

（いまなら独占できる。アーチエル様はいない。アシュマ様は一人きり）

アンは周りが見えていなかった。

欲望に負けてつい、ふらふらとアシュマの隣へ……。

が、そこに……

「どうもアシュマさん。おひとりですかあ？」

ミアネが訊いた。

「『今』は一人だが？」

アシュマが答える。

「へー意味深ねえ。まあ、いいわ。向うで私達と一緒に酒飲まない？」

「済まんが、連れがいる」

「分かってるわ。アーチエル様でしょ？」

「あともう一人いる」

「だれ？」

「それは……」

アシュマは振り向きアンと眼があつた。

アンは一瞬鼓動が高鳴るのを感じた。

そして鼓動が早くなるのを感じてその言葉が来るのを待った。
つっー。

ぼたり、ぼたり。

「え？」

「あらあ、アンまで……こっちに来ましょう？」

丁度帰ってきたアーチエルに見付かってしまった。

「はい」

本当はアンは、人知れず処理しようとしていたのだが。

（また、アシュマさまの事考えてたんでしょう？）

アーチエルは小声でアンの事をからかった。

（い、いえ、そんなことは）

アンは慌てて否定した

（うふ。まあ、いいわ。ちょっとまってて）

アーチエルはアンを待たせて、

「アシュマさま、お酒お持ちしました。皆さんでどうぞ」
そう言った。

その後二人は暫く席を空けた。

「さすが嫁ご殿は気が利くね」

サースー・ウィー師が言った。

「すまねえ、姫さん」

「済みませんねえ、アーチエル様」

オルバニアンとヨデイも詫びの言葉を言った。

大人連中は酒を入れ始めた。

「では続きをします」

レンヌ王子が言った。

美しい処女の獵人と、愛と美の女神と、軍神と、大神と、農耕の
神。

それらが一つに重なる時、それは秘密が明かされる時。
対の鬼の秘密が語られる時。

しかしその秘密を語る時はあまりに短い。

その前後、龍は相反する痛みに身を囚われ、聖廟、鷲、鎌等は、祝福されぬ命の者による辱めを受けるだろう。

この日、又、天空に大地があつて、地上の人々、大層恐れ戦き混乱する。

あの黒き太陽がこの世を救うとはこれ皮肉である。

嗚呼、私はそれを見た。

「先ず最初の『美しい処女の獵人と、愛と美の女神と、軍神と、大神と、農耕の神。』これは星の占い事をしている者なら直ぐに分かります。これらは惑星をあらわしています。先ず『美しい処女の獵人』これは、アルテミスの事で月を表します。続いて『愛と美の女神』。これはビーナスで金星を、『軍神』はマルスで火星を、『大神』はジュピターで木星を。そして『農耕の神』はサターンで土星をあらわしています。『それらが一つに重なる時』と言う時がこれを読む限り近々あるでしょう。或いは一直線に並ぶのか。済みませんホロスコープは得意じゃないんです。後で調べておきます。

『それは秘密が明かされる時』、『対の鬼の秘密が語られる時』この二つは分かりません。文字通りの意味なのか、何かの隠語なのか……『その前後、龍は相反する痛みに身を囚われ』これも良く分かりません。クーロンに痛みと表現するような何かがあるのか？　こちら辺は兄上に聞き損ねてしまいました。済みません。『聖廟、鷲、鎌等は、祝福されぬ命の者による辱めを受けるだろう』えー……ここにも国の比喻があります。『聖廟』はレジルデ市国。『鷲』はアヘイビア。『鎌』はノーツ連邦。それがアシュマ様によって辱めを受ける……これも文字通りにとって良いものなのかどうか……。仮に文字通りに取ったとしたら、アシュマさんは短い時間の中で世界中を旅する事になります。『この日、又、天空に大地があつて、地上の人々、大層恐れ戦き混乱する』これは全くのお手上げです。文自体は平易なのに中身が全く分かりません。第一『天空に大地あ

りて』これはそのまま受け取ってしまったって良いものなのか？　ただ、驚天動地の事態である事は確かなようです。その自体を『あの黒き太陽がこの世を救うとはこれ皮肉である』とアシユマさんの力で救っていただく事だけは確かなようです」

王子は一気にまくし立てると、冷たいものを飲んで一息ついていた。

「よう、王子」

オルバニアンが声をかけた。

「はい、なんでしょう？　オルバニアンさん」

「今の章わからないとこだらけだったじゃねえか？」

すると、リイナが眼をくわつと見開き、およそこの世のものならぬ恐ろしい表情で、オルバニアンを睨んだ。

オルバニアンはその表情に怯み、

「いつ、いや、王子、なつ、何でもねえわ」

出しかけた話題を引つ込めた。

「さて次の章いつてみましょうか？」

レン又王子がそう言う。

「おう」

続いてオルバニアン。

幾夜に渡りあの黒き光の正体を掴まんと、黒き卵を欲するものがある。

幾つかその黒き卵奪われる。

私はそれを見た。

祝福されぬ命の者、黒き卵を潰す為、世界中を捜しまわる。

その間、聖なる学び舎、鷲に襲われる。

学び舎の者、祝福されぬ命の者に助けられ大事には至らない。

この間一人の黒き野心家一人大地に立つ。

私はこの人を見る。

甚だ傲岸不遜な人である。

鷲、これを認めず爪と嘴でこれを喰らわんと欲するだろう。此処に祝福されぬ命の者、壁になり、盾となり、矢となる。

その後、もう一人の黒き野心家、鷲の為に敵を打ち倒す剣になる。私はこの人も見る。神の人に近い間柄である。

聖廟もこれに立つが、頭を射抜かれ大事に至る。

嗚呼、なんと私はそれを見た。

聖廟の信徒激しく怒り、世界を震撼させる。

二人の黒き野心家相容れず、ぶつかるだろう。

この時も祝福されぬ命の者、一方の野心家の盾となり、矢となるん。

病に伏せるもその役目は果たすだろう。

その働き悪魔の如し。

私はそれを見た。

その後一人の野心家もう片方を追いかけてこれを撃ち滅ぼす。

黒き野心家鷲の巣の中からひとり立つ。

「先ず『幾夜に渡りあの黒き光の正体を掴まんと、黒き卵を欲するものがある。幾つかその黒き卵奪われる』で、『黒き光』はアシユマさんの鬼虎の光と同類、若しくは同じものと見て間違いないでしょう。その正体を知ろうとして『黒き卵を欲する』わけですから黒き卵は鬼虎と同質の殻兵器と見て間違いないでしょう。『祝福されぬ命の者、黒き卵を潰す為、世界中を捜しまわる』これは、文面通り取るのが自然かと思えます。『その間、聖なる学び舎、鷲に襲われる。学び舎の者、祝福されぬ命の者に助けられ大事には至らない』これはアシユマさんがアヘイビアから『聖なる学び舎』を護るらしいのですが、何か心当たりはありますか？」

レンヌはアシユマに尋ねた。

「多分スコラの事だろう」

アシユマはそう答えた。

「スコラと言うとアヘイビアにある魔法学校ですか？」

レンヌ王子は眼を輝かせて聞いた。

「まあ、有り体に言えばそうなる。詳しい事はそのリイナにでも聞くとよい」

リイナは顔を真つ赤にしてもじもじさせていた。

「は、はい」

レンヌ王子も顔を真つ赤にさせていた。

「でっ、では次に行きたいと思いますっ」

レンヌは声が裏返った。

「……『この間一人の黒き野心家一人大地に立つ。私はこの人を見る。甚だ傲岸不遜な人である』と有りますが、驚、即ちアヘイビアが自ら『爪と嘴でこれを喰らわん』とするほどの力を有する男といえ、世界中で二人しか居ません。それはオロ・エバスとイン・イーチャイルド。その人たちです。その内イーチャイルド家は親アヘイビアを名乗って憚らないですから、アヘイビアに楯突く者はオロ・エバスその人しか居ない事になります。『此処に祝福されぬ命の者、壁になり、盾となり、矢となる』これはアシュマさん、文面通りにとって構わないと思います。『その後、もう一人の黒き野心家、驚の為に敵を打ち倒す剣になる』これはイーチャイルド家がオロ・エバスに対して武力を以って対抗しようとしているのだと思います。また、『私はこの人も見る。神の人に近い間柄である』とは……皆さんは七賢人と戦っておられますよね？」

レンヌがアシュマを中心に皆の顔をぐるり見回した。

「おうよ、この、不肖このオルバニアン・マグマイヤー、微力ながら七賢人と戦わせてもらってるぜい！」

「有難う御座います。この七賢人、『神人』を奉じているのはご存知ですか？」

「『かみびと』？ いや、しらねえ！」

「またレジルデもこの『神人』密かにを奉じているのはご存知ですか？」

「いや、しらねえ！ でもそうだとしたら大変な事にならねえか？」

何せ『神』さんを祭らずに『神人』とやらを奉ってんだろ」

「確かにその通りです。この『神人』、随所に顔を現しますが、正体は全く以って不明です。ただ、『人』の字が入ってますが、必ずしも人の形をしているとは限らないと兄上が申しておりました」

「だから？」

オルバニアンが言った。

「え、だからと言われましても……」

レンヌが困っていた。

「俺達が戦っているのは七賢人だ。『神人』じゃねえ！」

「バカか、お前は！？ 七賢人が『神人』を奉じてるってことは、その七賢人の大ボスが『神人』って奴の事になるだろ！！」

リイナが叫んだ。

「え？ そうなの！？」

オルバニアンが驚いた。

「あたしや、アンタと別れなくなっただよ」

アルミナが言った。

「え？ ちょっと待て、アルミナ」

「続けて良いですか？」

レンヌが言った。

「つまり、言いたかった事は『我この人を見る。神の人に近い間柄也』はイーチャイルド家が七賢人の内の一人。しかもトップかトップに近い存在ではないかと、そういうことです」

「えっ！！」

黒龍号のクルーは驚いた。

今まで謎のヴェールに阻まれてきた七賢人の正体の一部が明らかになったからだ。

「続けます」

レンヌが言った。

「では……『聖廟もこれに立つが、頭を射抜かれ大事に至る』ですが、聖廟はレジルデのの象徴。でもレジルデ自体がこわれるわけ

なし……これは法王様が、お出ましになられるのでしょうか。しかし『頭を射抜かれ大事に至る』……これは文面通りに解釈していただいて結構です。『聖廟の信徒激しく怒り、世界を震撼させる』……その文面その通りですね。『二人の黒き野心家相容れず、ぶつかるだろう。この時も祝福されぬ命の者、一方の野心家の盾となり、矢とならん。病に伏せるもその役目は果たすだろう。その働き、悪魔の如し』これはオロ・エバスとイーチャイルドが直接対決をするということですね。その時アシュマさんは病に臥せているようですからお気をつけ下さい。後は文面通りです。そして、『その後の一人の野心家もう片方を追いかけてこれを撃ち滅ぼす。黒き野心家鷲の巣の中からひとり立つ』これはオロ・エバスがイーチャイルドかどちらが勝利者が分からないけれども決着がつくということですね。『黒き野心家鷲の巣の中からひとり立つ』は意味が分かりません。巣立ちということで独立を意味するのかもしれませんが。この場合の独立は独立国家となりますが、流石にそこまではしないと思うのですが……」

「でも、オロだったら、そこまでしかねないと思うぜ」

オルバニアンが言った。

「そうですねえ、オロならやりかねないかも、知れませんがねえ」

ヨデイも続いた。

「そ、そうですね。皆さんがご存知の方なのでから、多分そうなのでしょう」

レン又はそう言った。

「次を頼む」

アシュマが催促をした。

「分かりました。最後の章ですね？」

ついに月へと至る道を人は見つけるであろう。

祝福されぬ命の者、われの僕の末裔どもを襲う。

祝福されぬ命の者の勝ちとなるだろう。

その後、黒き卵世界に散らばる事になるだろう。

嗚呼、これは有ってはならぬ事である。

祝福されぬ命の者、その光に飲み込まれこの世より消えうせる。

驚くかな、もう一人の祝福されぬ命の者現れし時、祝福されぬ命の者この世に出現す。

私はそれを見た。

世界に散らばりし黒き卵の所為により、世界より戦船集いて争う。これ世界の行く末占う戦である。

しかしこれの勝者なし。

この間に龍は頭がすぐ替わる。

またこの間に日もまた頭がすぐ替わる。

この前後に天変地異あり。

祝福されぬ命の者と、祝福されぬ命の者との戦いがある。

私はそれを見た。

破壊の権化と祝福されぬ命の者との戦いがある。

その間、神人、天高く月におられる。

私はそれを見た。

神人、祝福されぬ命の者と月にて相見える。

祝福されぬ命の者、さながら悪鬼の如し。

私はそれを見た。

巨大な閃光が見えた。

是にて新生人類は滅亡する。

私はそれを見た。

我が予言もこれを以って成就する。

神は全てを見通せたり。

かくあるべし。

ターシャン。

さて、『ついに月へと至る道を人は見つけるであろう』。これは昨今のアヘイビアの宇宙開発を見れば分かりますね。きっと月へ行くロケットなりサイコフライヤーなりを開発するでしょう。『祝福されぬ命の者、われの僕の末裔どもを襲う。祝福されぬ命の者の勝ちとなるだろう』兄上は、これを七賢人の僕としました。そういう解釈で行くと『われ』即ち、ルーンも七賢人だった、としか言いようが無いのですが、真実は歴史の闇の中です。後はアシュマさん側の全くの勝利と言うことらしいです。『その後、黒き卵世界に散らばる事になるだろう。嗚呼、これは有ってはならぬ事である』これは殻兵器が世界中に拡散するという事です。『祝福されぬ命の者、その光に飲み込まれこの世より消えうせる。驚くかな、もう一人の祝福されぬ命の者現れし時、祝福されぬ命の者この世に出現す』……難解です。兄上もこれは見えなかったといいました。仮にここにアシュマさんとアーヌ……でしたっけ、これを当てはめてみても意味が良く分かりません。でもお二方の内どちらかが『その光』……これは殻兵器の光と見て良いでしょう。これに飲み込まれてしまうことを意味します。どうぞ、お氣をつけ下さい。これがアシュマさんで無ければよいと思うのですが……『世界に散らばりし黒き卵の所為により、世界より戦船集いて争う。これ世界の行く末占う戦である。しかしこれの勝者なし』これは、殻兵器拡散により世界情勢が、悪化するのでしょう。そして艦隊戦。でも勝者はなしと言っことらしいですね。これは戦が回避されたのか、戦が極限まで行われ、勝者といえるほどの艦艇が残っていないか……前者であつて欲しいのですが、戦うと書いてあるので……いえ、最後まで望みを捨てずに、大規模な戦は回避されたと解釈したいですね。次、『この間に龍は頭がすぐ替わる。またこの間に日もまた頭がすぐ替わる』前にも言ったとおり龍はクーロンを、太陽・日はノリトレアを現しています。この場合頭はその象徴として君主および政府を表しています。つまり、クーロン、ノリトレアと続いて政変があるかも知れないということです。『この前後に天変地異あり』これは文章

そのままの意味だと思います。ただし天変地異の原因が何かにもよりますが……。はあ、ちよつと休ませてください……」

するとリイナはレンヌの後ろに回りレンヌの肩をもみ始めた。

「くぅっ効きますね。でもリイナさん疲れませんか？ 大丈夫ですか？」

レンヌが言った。

「大丈夫だ、これぐらいではヘタレはせん」

リイナは言った。

「そうですね？ ではお言葉に甘えて。……うつ……くつ、はあっ」
レンヌは喘ぎだすと、リイナはドキツとするものを覚え、頭が熱くなるのを感じた。

心臓の鼓動は早くなり、鼻に先程感じたものと似た感触を得た。
まさかと思い手で拭ってみると、また鼻血だった。

「まあまあ、リイナ今日は一体どうしちゃったの？ こっちにいらつしやい」

アーチエルはリイナを呼んだ。

「ませちゃって。まあ、好きな男の喘ぎ声に、そんなにどきりとしたか？」

アルミナがからかった。

「ばかつ、そんな、ちが……ちが……うつつく。うえつく。……えつく」

またリイナは、泣き出してしまった。

「アルミナさん！ なんでまた」

アーチエルが怒った。

「わ、わりい、わりい。リイナ見てるとつい弄り倒したくなっちゃつてよぉ」

アルミナが詫びた。

少し酔っているようだ。

そういえば、酒が無くなった様だ。

「あたし、お酒取って来るわ」

エフアールが言った。

「こんな美味しい酒飲んだこと無いね。喉越しすっきりの辛口、通ね。でもどこからもってくるね？ この酒」

サースー・ウィーは一人ごちた。

「ああ、それでしたら、向うの氷室にあったものをもってきました」
アーチエルは言った。

「そうね。あの室にあるものみんな貴重品ね。特にイーハンから取り寄せたサケは貴重ね。何でも十年に一回あるかないかの、銘酒ね！ 三升しかないね。……！ ……って、まさか！」

氷室に行きかかるウィー師の両足をアルミナが抱え込んだ。

「な、何するね？」

ウィー師がじたばたした

「だ・め・よお、お爺さん。美味しい物は、皆で分けなきゃ」
アルミナが言った。

大分飲んでいるようだ。眼が据わっている。

「はい、持ってきたわよお。皆で吞みましょう」

と、エフアール。

「わあ、駄目ね。それ、ワシのね……」

「まあ、爺。良いではないか美味しいものは皆で食す。間違っでは居らんぞ？」

レン又は言った。

「わ、若はあれがどれ程貴重なモノか……」

（分かつておる。あれと同じものが私の氷室にもある。何本か好きな物を持っていくがよい）

（何故、若がそのようなものを！）

（もともと余の室は父上の室だ）

（！ 成る程！ 亡き国王陛下の！ 本当に頂いて宜しいので？）

（幾らでも、好きなだけ）

「このサースー・ウィー！ 生涯かけて王子殿下に忠誠を誓いまする！……」

この突然の大声に皆は一瞬ざわめいたが、アシュマが

「祝いに先ず一献」

酒器をサースー・ウィーに傾けた。

リイナが微笑みながら、だけれども少し照れながらレンヌの隣に座った。

レンヌはそんなリイナに微笑で返した。

どうやら、リイナに好意を持ち始めている様子だった。

「では皆さん、最後の部分の解釈に行きたいと思います。『祝福されぬ命の者と、祝福されぬ命の者との戦いがある』これは、アーヌとアシュマさんとの戦いかと思われます。残念ながらこの戦いの結末は見えていません。兄からも語られていません。ですからこれ以降の詩句、『破壊の権化と祝福されぬ命の者との戦いがある。その間、神人、天高く月におられる。私はそれを見た。神人、祝福されぬ命の者と月にて相見える。祝福されぬ命の者、さながら悪鬼の如し』など『祝福されぬ命の者』は、アシュマさんで無く、アーヌとやらである可能性もあるわけで……」

「いいや、若。その解釈は間違っておられるね」

サースー・ウィー師は言った。

そして、

「大若はこう申された。そこにいるアシュマ様の事を『人類の命運を担う人だと。それまでは自ら命を絶つことは許されない』。そのアシュマ様である。『神人、祝福されぬ命の者と月にて相見える。祝福されぬ命の者、さながら悪鬼の如し』ここまで順当に勝ち残るのはアシュマ様しか居らんね」

「そうですね。爺。……きつとそうです！」

「じゃあさあこの『是にて新生人類は滅亡する』ってどう解釈すんの？　これが『黙示録大戦以後の新生人類』って意味なら、滅びるのアタシ達じゃん！　『巨大な閃光』って何？　それとも、これから人類から分かれて進化するの？　それまで待てって事？　『我

が予言もこれを以って成就する』だよ?」

ヨデイの代わりにアルミナが言った。

流石アルミナである。

棘は無いが、辛らつな言葉で容赦が無かった。

その場にいる全員が黙ってしまった。

「な、何みんなマジにとつて……あ、あたしだって怖かったんだよ。本当の所はどうなのかなって……?」

「それなら足掻くしかないな。自分の全生命を以って、自分の生命を奪う者から、自分を護るんだ。護るには人それぞれの方法があるう。それはそれでよい。兎に角精一杯踏ん張るんだ!」

アシュマは皆に鼓舞するように言った。

皆は自分に言い聞かせるように頷いた。

第四節 アーヌ、対の鬼

「確かにこの下か？」

アーヌは女性科学者に向かって訊いていた。

「あら？ 疑うの？」

照りつける太陽と、青い海、そして深海調査船、その母船。

レジャーにはとても良い所だが、アーヌには、とても似つかわしくない所だった。

「疑うわけではないが、いきなりここだ、この六千メートル下だ、といわれてもな。それよりも今晚どうだ？」

「それ、誘っているつもり？」

その女性科学者は科学者の割には知的な美人で、ブロンドの髪に、ブルーの瞳と、薄紅色の唇を持っていた。

「どうだ？ サラ」

アーヌはいった。

「どうだといわれても……できるの？」

サラと呼ばれた女性科学者がいった。

「おや？ 疑うのか？」

アーヌが意外そうに言った。

「疑っているわけではないけれど、貴方のメンテナンス要員として言わせて貰えば、『貴方にはそんな機能はついていない』わ」

「観察不足だな」

「あらそう？ じゃあじゃあ今晚遅くに観察させて」

「良からう。だったら改修後は上手く『調整』してくれ」

「うふ、わかったわ。じゃあ行きましょ」

言って二人は深海調査船の前を……通り過ぎ、船の後部デッキにやって来た。

「本当にこの下にあるんだろうな？」

アーヌは念を押した。

「貴方も心配性ね」

「戦場ではこのぐらい慎重なほうが良いのさ」

「良く聞く台詞だわ」

「『鬼』はどうやって捜せば良い？」

「感じるはずよ。存在を」

「なかなかエロティックだな」

「茶化さないで。帰ってくるときは、背中の『飛行ユニット』を使って帰ってきて。もちろん水中での移動でも使って構わないわ」

「初めて使うフライトが水の中とは皮肉なものだ」

「同感だわ」

「では行ってくる」

「キスできないのが残念だわ」

「フェイス・ハッチは開けたくないものでね」

「分かってるわよ。見られたくない理由は」

「痛み入る」

「良いのよ別に」

「では行つて来る」

「ええ」

ザブン！

アー又は、そのままの出で立ちで、海へと潜って行った。

僅かに付いた新装備はといえば、背中にある薄い八角形の箱のようなモノだった。

しかしこれが優れもので、この大きさで、これがイメージスキャナとサイコ・フライヤーの用を足す画期的な装置であった。

今、アー又はは空中で言えば、自由落下のような状態で、前後左右の動きのみ最中のサイコフライヤーに頼っていた。

深度六千メートル。

アー又はは、みしりともぴしりとも言わない。

ただ淡々と潜っていくのみである。

深度を深めていくと、うすばんやりとだが、何かが見えてくる。

どうやらジンジャと呼ばれる古代の遺跡のようだ。

トリイと呼ばれる門を潜る。

全体的に左へ傾いているようだ。

中に土足で入り奥へ奥へと引き寄せられるように進んでいく。

奥に二柱、柱があるようだ。

片方の柱には隙間が出来ていて、がらんどのだが、もう一方の柱には、刀と思しき物体が挟まっていた。

柱はかなり太いもので直径が六十センチはありそうなものかと思われた。

間に挟まれている刀を引き抜こうかとした。

頑として動かない。

上を見ると横に長い額縁がかかっている。

呼んでみると古代イーハン語で、

『一対の鬼ここに封印す』

そう書いてあった。

アーヌは柱にはさまれた刀を強引に引き抜いた。

その右手首には接ぎが当てられた痕があった。

痕は脇腹にも。

これは、アーヌの生涯の好敵手、アシュマ・アトーによってつけられた屈辱の痕である。

それが為に『鬼虎』に匹敵する刀、伝説の『天龍鬼』を求めてやってきた。

匹敵するはずである。

一対なのだから。

アーヌは『天龍鬼』を持って帰ろうとした。

が、社は最後の支えを失ったらしく崩れ始めた。

「！」

アーヌは出口へと向かった。

だが間に合わず社の下敷きになりかけたその時、天龍鬼から莫大なエネルギーが放出され社を吹き飛ばしてしまった。

まだ鞘の内にあるというのに。

そのエネルギー放射はかなりの量であつたらしく、かなりの量が水蒸気となつて爆発的に膨張、水面にまでその影響をもたらした。

「なに？　これは。アー又は？　アー又は無事なの？」

アー又は天龍鬼に引き摺られて海面へ、天空へ。

天龍鬼は黄金色の光を放っていた。

「では、アベニとリイナは『知恵のドーム』の探索をお願いしますヨデイが命を下した。

「はい！」

と、リイナが、

「分かり申した、若」

と、アベニ爺が言った。

「無理だと思つたら撤退する事。いいね？　リイナ」

「何故私に言う？」

「リイナは直ぐムキになるから」

「なっ……！」

「ほらね？　では、用意が出来次第『知恵のドーム』探索へ言つてくれ」

「分かった」

「お？　聞き分け良いね？」

それは、向うにレンヌが居るから。

これで暫く会えぬと思うと、少し寂しい。

未だ続く独立戦争。

宗教的、民族的にモザイク状態であるこの地で、アールヌーを越えて戦火が一度広がれば、泥沼になることは眼に見えていた。

しかも三大宗教の聖地が一箇所に、集まっていることが問題にな

ると思われた。

ヨディはそんなことを危惧していた。
今日も散発的な戦闘が起こっていた。

偵察に出していたオルバニアンとアルミナが帰ってきた。

「どうでした？ 様子は？」

ヨディは訊いた。

「うーん、もう少しトーガイアとゴハクを前線寄りに押し出しても構わないと思う。そくだなあ、四〇五十キロってところか？」

オルバニアンが答える。

「結構行きますねえ。大丈夫ですか？」

「じゃあ、安全マージン見積もって三十五キロ」

「そうですね。それくらいが無難でしょう。このくらいの距離なら敵の反攻作戦が始まって何とかなちますし」

「じゃあ、そうしてもらおうか？ 俺の補給と機体の微調整終わったら、今度は南西地区回って来るわ」

「たまには貴方のメンテナンスもしておいてくださいね」

「大丈夫。夜してる。アルミナと、相互メンテって奴だな」

「もう、何言っているのよ。ばか」

アルミナが照れながら怒った。

「あ、そう。そりゃ、ご馳走様」

「ヨディ、俺も偵察に出ようか？」

アシュマが言い出した。

「そうなんですよねえ、アシュマ君の場合、偵察にでれちゃう事が出来るから、凄いですよねえ。じゃあ、南東地区の偵察を、お願いしようかねえ」

ヨディがお願いした。

「分かった」

「アシュマさま？ 気をつけて行ってらしてくださいね」

アーチエルが送り出そうとした。

「アーチエル、もし俺が大反抗部隊に出くわしたら、どうしたら良

い？」

「逃げてください」

「逃げられない場合は？」

「そんな不吉な事、言わないで下さい。とにかく逃げてください」

「わかった」

そしてアシュマがゴンドラに乗りかけた。

「あの……」

アンがアシュマを呼び止めた。

「なんだい、アン」

「お荷物になるかもしれませんが、水分補給用のペットボトルです。宜しかったら……」

「有難う。アン、これだけ貰っていいこう」

アシュマは二リットルボトルを腰にくくり付けた。

アシュマは今度こそゴンドラに乗った。

「「どうぞご武運を」」

アーチェルと、アンとで、綺麗に『はもった』。

「我が飛ぶのは暗雲の空

戦の女神を犯してもぎ取る

その背の羽根は既に漆黑

我が背に添えて我が羽根に

そして散るかなこのわが身

禁忌を犯して我が翼となれ

ウイング」

アシュマはウイングの呪文を唱え空へと跳び立った。

『ヨデイ、じゃあこれから出る。』

オルバニアンが言ってきた。

『どうしてさっきあんな事言ったのよ。恥かしいじゃない！』

『相互メンテの話か？ そりゃあ、股間の潤滑油って奴で……』

『バカね！ それを言うなら社会の潤滑油でしょ！』

機内で、オルバニアンとアルミナが痴話喧嘩を始めていた。

「うふ。くすくすくす」

アンは笑い始めていた。

「お二人さん、マイクのスイッチきり忘れてるわよ。アンに笑われているわよ」

エファールが言う。

『えっ？ こりゃ、失礼。メインハッチ開閉宣くう』

とは、オルバニアン。

「メインハッチ開いたよ」

ヨデイが言う。

『発進！！』

暫くはのんびりした時間が過ぎて言った。

ヨデイは、トーガイアとゴハクの二艦だけを、監督するのではなかった。

外国人部隊。

読んで字の如く外国人の混成部隊である。

一応隊の運用責任者は居るのだが、トーガイア、ゴハク、外国人部隊と三隊まとめて見るのが、ヨデイの仕事だった。

のんびりとした時間を突然終わらすように、オルバニアンから信じられないような第一報が届いた。

『ヨデイ！ オルバニアンだ！ 敵の部隊を発見！ 大部隊だ！

おそらくノーツ連邦とクローン人民共和国、リスパダハル共和国の混成部隊だ。魔導機兵はおよそ二千八百！ 敵艦艇は軽巡三、重巡三、戦艦三だ。魔導砲は確認できず。多分持っていないだろう。

王宮方面に向けて進行中。現在位置王宮より、南西約五百キロ。直ぐ来るぞ！ 部隊の応援を要請する』

「分かりました。部隊の派遣は任せてください。引き続き偵察お願いします。危なくなったら……」

『分かってるわよ。逃げてかえってくれば、良いんでしょう？』

アルミナが続けた。

「そーです。その通りです」

『じゃあ、何か有ったら、連絡入れるんで。宜しく』

オルバニアンが無線を切った。

「よかつたゝ、トーガイア動かさなくてゝ。トーガイア、ゴハクに連絡。稼動開始用意！ 続けて外国人部隊に連絡！ 応援の要請をして下さい」

「ヨデイ、全部、今すぐの要請よね？」

エファールが念押しした。

「全部今です。外国人部隊の内三千五百は敵の迎撃に、残り五百は予備に回して下さい」

「ちょ、ちよつと待つてください。ヨデイ！ アシユマの割り込み回線なんですけど、ちよつと聴いてみる？」

「先に各配置のほうを、済ませちゃってください」

「了解！ アシユマちよつと待つてて。……」

（戦力差は五対四。でも気になる数字ですねえ。びみょーだあ……）

「良いわよ、アシユマ。ヨデイ、アシユマと繋がるわよ」

『ヨデイ、聞こえるか？ アシユマだ』

「はいはい。聞こえますよ。こつち、今、大変な事になっちゃっているんですよ。アシユマ君も直ぐに戻って……」

『こつちも大変だ。敵の大部隊を捕捉した。南南東約千キロ。敵魔導機兵、およそ三千二百。敵艦艇、敵戦艦クラスおよそ二、重巡クラス四、軽巡クラスおよそ六、旗艦、空母は確認できず。以上だ』

「……そんな大部隊がまだ……よし此処はノリトレアに救援要請を

……」

『それで良いのか？ ヨデイ』

「他にどうしろと？」

『俺が押さえてみる』

「押さえる？ どうやって……まさかまた、黒い光の力を！？」

『安心しろ。通常攻撃しかせん。アーチエル、聞こえているかい？』

「……はい、聞こえています。アシユマさま」

『こちら側を守る為には敵を全滅させなくてはならないだろう。これはそういう戦いになる。すまないが、分かっておくれ』

「分かりました。アシユマさま。どうぞご自愛の程を。後は存分になされませ」

『有難う。アーチエル。千万の味方よりも心強い言葉だ。では行つて来る』

「ご武運を」

「ヨディ、チャンネル2にオルバニアンよ」

エファールが呼ぶ。

「今日は忙しいな。どうした？　オルバニアン」

ヨディは本当に忙しいような顔をしてインカムをとった。

『まずいぞ、このままじゃ押し切られる。魔導機兵の性能差が激しい。向うは最新鋭機で来てる様だ』

オルバニアンが返信した。

「エファ、ノリトレアの駐留軍本部に繋いでくれ」

「ノリトレア……」

アーチエルは呟く。

『おい、アル……ヨディ！！　それで良いのかよ！？　本当に？』

「なにがです？　向こうが最新鋭機で来るならば、こちらも最新鋭機を、ぶつけるまでです」

『なるほど！　そうか。そうだな！　よっしゃいくぜ……』

「オルバニアンは帰ってきなさい」

『はあ？　何言ってるんだよヨディ』

「さっき何か言い掛けませんでしたか？」

『何を？　もう良いだろ？』

「とにかく貴方は帰ってらっしゃい」

『ちえっ！』

「ヨディ、チャンネル1にノリトレア繋がったわよ」

エファールはそういった。

「こちらオロ・エバス艦隊帰属、黒龍号艇長、ヨデイ・ヨフル。艦の責任者に繋いでいただきたい」

『こちら、ノリトレアの、ガルマイン・デッド』

「！！」

ガルマイン・デッド。

その名は黒龍号に乗っている者で、半数以上がその名に、大なり小なり意趣を持っていた。

その一国の摂政にまで昇り詰めた男が、わざわざこのような前線地に立つのは珍しい。

いや、この男に限っては珍しいとは言えんだろ。

何しろ、おのれの霸道は、おのれの手で掴むが信条の男だから。

そのガルマイン・デッドにヨデイは意趣が有りや無しや？

『ヨデイとか言ったな。イルドリア以来かな？ 久しいのう。と、言っても直接話すのは初めてかのう』

「済みません。こちらは一分一秒も時間が惜しいのです。早速ですが、無礼を承知の上で申し上げます。貴国の魔導機兵をお貸し願えないでしょうか？」

『嫌だと言ったら？』

「……………」

『こちらも一国を預かる身、自国の兵の命は惜しい』

「お断りになされる場合は、この国にある豊富な天然資源を失うことになります。国策としてそれはまずいのでは？ 殿下」

『そこを突いてくるか。賢しいのう。ワシの知っていた人間とそっくりじゃわい』

「……………」

『まあ、よかる。魔導機兵千機を貸してつかわす。これで少ないなどとは言はせんぞ』

「殿下のご厚意に感謝します」

そういえば、おぬしの所にいるアシュマ・アトーはどうした？
まさか別働隊の方に行ったのではあるまいの？」

（何故それを……？）

ヨディは疑問に思った。

「ええ、偵察に出て、そろそろ交戦する所でしょうねえ。ところでこちらには、後何分で貴国の魔導機兵は到着しますかねえ」

「魔導機兵は後三十分程で戦場に着くよ。尤も、おぬしの所の移動ドッグを借りねばなるまいがの、……そうそう、アシユマ・アトーにはくれぐれも『あの力』は使わないで欲しいとガルマインが言っていたと伝えて欲しい」

（そこまで知っているのかッ）

「直接伝えるというのは？ 周波数をお教えしましょうか？ それともバヴェルを使って対抗するというのはいかがでしょうか？」

（こやつそこまでの事を知っておるのか……）

ガルマインは思い、

『結構だ。ワシの寝首は、掻かんでくれと伝えてくれい』

そう伝えて、

「畏まりました」

ヨディは話を閉じた。

ガルマインとの舌戦は、なんとも苦い、痛み分けだった。

「よしクララテリアに連絡だ」

「ヨディ、オルバニアンからよ」

エファールからの言伝だった。

『なんだよ、ヨディ！ やられっぱなしだったじゃねえかよ！』

オルバニアンが息巻いて……

「その手の話だったら後々。クララテリア……」

ヨディが言った。

「貴方の愛しいクララさんだったらもう繋がってるわよ」

エファールが皮肉混じりに言った。

『そんなエファールさん……ヨディ様と繋がってるなんて』

そんなクララテリアはどこか調子が変わった。

「壊れとるわあんた……」

エファールが言う。

「と、そんなことはおいといて、良いかいクララ、これから言うものを用意するんだ。ノリトレア規格の機体一式組めるライン、最低十ラインは欲しい」

ヨデイが話を強引に持つて行つた。

『ええっ！？ 今からですか？ 無理です。既に修理用の機体もラインに入っていますし、ライン自体組み替えるなんて…』

「いいかい、良くお聞き。基本的な構造は早々変わるもんじゃないんだ。特に魔導機兵の場合は。いいかい、大事なことは部下を信じて自分を信じる。『自分ならやれる』と思うことだ。いいね？ 大変なのは最初の一ラインだけさ」

「はい！」

「これが上手く行つたらどこかに呑みに行こう」

「はい、……みんなあ！ きいたあ！？ 今の話！！ きつちり組むだけで良いのよ？ きつちりこなした暁には、『ヨデイ特務大佐が何でも奢つて』くれるわよ！ いい？ 職人魂見せるわよ！？」

クララテリアは言った。

「艦内放送していたみたいね。どう？ 女つて怖いでしょ？」

エファールがマニキュアを塗りながらヨデイへと言った。

『こちら、ミアネ・コースティア・イチモンジ。ご相伴に預かりたくノリトレア規格の武器、パーツを取り揃えてお待ち申し上げます』
「これで来月の給料は消えたわね」

「きゅッ……給料が何ぼのもんじゃあい！！ 掛かってきんしゃい

！！ こうなりやヤケじゃい！！ エファール！ マイク！」

「あたし、いま、手が放せないから」

「おっしゃあ！！ 今戦闘で、特に著しい戦果を挙げたもの！ 著しいバックアップ態勢をしいた者！ とにかく著しい何かを残した者！ その者はトリプルスコアで奢つてあげよう！！ 可愛いお兄ちゃん・お姉ちゃんを呼ぶもよし！ ただひたすら、呑んだり食ったりするもよし！ 好きにしてくれ！！ 以上だ！！ ただし死ぬ

のはいかんぞ！！ それだけは堅く言って置く！！」

此処からの働く彼等は尋常じゃなかった。

運ぶ、直す、送り出す。この三拍子が遅滞なく進み常にブランクがある状態だったし、戦闘の方ではいつもより一、五倍の戦果を上げてくる。

これではノリトレアに救援要請などしなくても良かったくらいだ。こっちの護りは安泰になったとして、ではアシュマの方はどうなっただか？

「こちらこちらオロ・エバス艦隊帰属、黒龍号クルー、アシュマ・アトー。貴艦らに降伏を勧告する。さもなければ、貴艦らを撃墜する事もやぶさかではない。五分待つ」

降伏勧告をしていた。

実はあれから敵艦艇は魔導機兵を展開をし機兵の数を二倍弱の六千にした。

どうやらこちらが本命だったようで、ルーンの黙示録にある『その間、祝福されぬ命の者、敵の軍勢の半分を押さえる』と、有ったがとんでもない。

「五分過ぎたな」

もう一度降伏勧告を告げようと思った。

「約束の時間が過ぎた。降伏するのかしないのか。どちらなんだ？」

『……我々は何者にも屈しない！ 前進あるのみ！ 全軍最大戦速で突破せよ！』

「救われん連中だ」

まあ、仕方あるまい、と思いつつ、アシュマは鯉口を切った。

鯉口から溢れる眩い銀色の光。

アシュマは、鬼虎秘剣、真・蛭を使おうとしていた。

この技を使うのは久しぶりだった。

敵の軍勢が雲霞の如く進軍してくる。

「せいっ!!」

アシュマが気合を入れて鬼虎を引き抜くと無数の光の条が敵の軍勢千二百に向かって飛んで行った。

眼の前に広がる爆発のパノラマ。

これで敵は半減された。

そして、アシュマは

「もう一度訊く。降伏するや否や?」

そう訊いた。

「なあ、今回、俺、引かなくても良かったんじゃないの?」

オルバニアンがそう言った。

結局、オルバニアン側の戦闘は、オルバニアン達の勝利で終わった。

いったん均衡が崩れると呆気ないものだった。

それからは敵はその数をどんどん減らしていた。

「たまには指揮官が、どんな事を考えて仕事しているのか、考えるのも良い勉強ですよ」

ヨデイが諭すように言った。

「宴会の事だろ?」

とは、オルバニアン。

「ぎくっ!」

「クララテリアに良いように、利用されたんだってな」

「別、別に利用なんてされていないし、宴会だって自発的行動だよ?」

「ほんとかなあ?」

アルミナが会話に加わった

「『いいかい、大事なことは部下を信じて自分を信じる。『自分ならやれる』と思う事だ。いいね?』だって。きゃーっ。恥かしいーっ!」

アルミナが続けて喋った。

「ど、どこでそれを？」

ヨディが狼狽する。

「さっきオープンチャンネルにしていたら、これが飛び込んできて録音した訳。コピーして、とりあえず売り子のバイト見つけて今、売らせてるけど、何枚くらい売れたかなあ」

「売るな――！」

「それよりアシュマ、どうなったかなあ
オルバニアンが言った。

「そ、そうですね。ちよつと掛けてみましょうか。エファ、お願い」
「分かったわ……あ、アシュマ？　今ヨディに変わるから、まっ……え？」

エファールが何かしらと言う表情でヨディを見た。

「どうしたんですか？」

ヨディがエファールに訊いた。

「どうしたもこうしたも『敵は退けた。今は手が離せない』プツン。
訳分かんないでしょ？」

「まさか……」

アーチエルが言った。

「まさか……どうかなさいました？　王女」

ヨディが尋ねていた。

「『祝福されぬ命の者、既に鬼を携えており、対になる者、鬼を携えて来る』……アーヌ様がもう一つの鬼虎を携えてきたのでは？」

「そうなのか？　そうだとしたら由々しき事態だぞ。エファ、アシユマ君の発信ポイントは分かりますか？」

「大体なら」

エファールが言った。

「ではそこへ行きますか」

ヨディが操縦席に着いた。

「一時指揮権をトーガイアに移します。その旨をクララテリアに伝

えてください」

ヨデイがエファに言った。

「わかったわ。こちら黒龍号……」

アシユマは戦っていた。

対艦隊戦ではアシユマの圧倒的な勝利だった。

敵の四分の三を沈めて残りの四分の一の艦艇・魔導機兵から撤退を引き出させていた。

これでアシユマの完全な勝利かと思われた。

その時、奴は現れた。

『祝福されぬ命の者、既に鬼を携えており対に成る者、鬼を携えて来たり』

対に成る者。

アーヌ。

一合剣を交えてみて分かった。

これは鬼虎ではないけれども、鬼虎と同質の剣だと。

既に何合か剣を交えていた。

先程の艦隊よりも厄介な相手だった。

「それが対の鬼か、アーヌ」

「そうよ。貴様を倒す為に見つけてきた鬼……『天龍鬼』よ」

「『天龍鬼』……！！」

「ならば全力を出さねばなるまいな」

アシユマは、裏・閃光一刀・崩しの構えを取った。

対してアーヌも左脇に構えていた。

丁度黒龍号が到着したのはその頃合だった。

アシユマは鬼虎に気を充溢し始めた。

「ほう、気を集めるか。だがおぬしにはまだ学ばねばならん事があるらしいの」

アーヌが言った。

「……………」

アシュマは黙ったままだった。

「気を搾り出すんじゃない。気と一体化するのだ」

「何故、それを俺に教える？」

それは、まるで師匠が弟子に何かを教えているかの様に聞こえた。
「我はこう言つてはなんだが、それでも剣士の端くれだ。強い相手と戦い勝利する事が、私の生きがいよ。初めて言うが、お主には見所がある。我に見合うだけの剣士になって欲しい。弱い相手と戦つて、勝つても意味が無いからの」

「……………」

アシュマはあの、レキシタリアのルクルクの森での戦いを思い出していた。

アシュマは視点が定まらないような、それでいて全てを見ているような、そんな境地に自分を置いた。

「ほう、少しは出来るようになった様じゃの。あの森での戦いを思い出したのかな？　だがあれば『基礎』じゃ」

「……………」

「それは無想の境地の、ほんの入り口に過ぎぬ。己の内の生命の源と念と外界を繋ぐ生命の営み、生命同士のつながり、輪廻。その在り方を学ばおぬしは何にも増して強くなり何者をも恐れなくなる。無なる存在であり、有なる存在……全であり、無である……全てを悟れ。己を超えよ。さすれば鬼虎とて畏るるに足りん。無想の境地とは、無為無想、あるがままのことよ。無想の剣を目指せ」

「無想の……剣……」

「そうだ。ではそろそろ参る……」

アーヌは空中を滑るようにしてアシュマに迫った。

アシュマは裏・閃光一刀・崩しをアーヌに向けて放った。

アーヌはそれを何とかかわしつつアシュマに斬り付けた。

そして皮一枚を残してアシュマの腹を斬った。

「……………」

「負けるはずが無い、斬られるはずがないと思っておったか……この大たわけ者!!」

「……………」

アシュマは、アーヌを睨んだ

「基礎と言ったろくに。まあよい今日はその基礎に免じて見逃して使わす。ワシもあの女子おやこの眼の前でおぬしを斬るのは忍びない」

「あの女子？」

黒龍号を見るとアーチエルが杖を片手に黒龍のゴンドラの上に立っていた。

その間に、アーヌは飛び去った。

アシュマは黒龍号に帰ってきた。

「ああ、アシュマさまこんなに傷が」

アーチエルは驚いた。

アシュマがかつてこんな大怪我をしたことがあったらどうか？

「大事無い。皮一枚で繋がっている」

アシュマは、大げさなと言わんばかりである。

「皮一枚も、皮二枚も関係有りませぬ！　こんな大怪我をして……とりあえずヒーリングオールを掛けておきますね……聖なる契約を交わし者達よ……」

（アーヌはやけに親切ぶることがあるな。今日は俺の負けだ。あそこまで手の内を見せてこの様だからな）

「アシュマさま？　何をさっきからぶつぶつと……？」

アシュマはゴンドラから降りた。

「ヨデイ、アーヌが対の『鬼』を連れて帰ってきた」

「何ですって！？　それで……」

「ヨデイ様。お気持ちは分かりますが、アシュマさまは今怪我人休ませてあげてくださいな。さあ、寢床へ行きましょう？」

アーチエルは言った。

「おいおい、ヒーリングオールを掛けたんだ。もう大丈夫だろう」

「アン、お水を用意して頂戴。今日はたぶん、アシュマさま熱が出

るだろうから、着替えを用意してあげて」

「お腹のお怪我に水はどうかと……」

アンはアシュマを気遣った。

「傷は塞がるだろうから大丈夫。着替えの方お願い。あと、お洗濯も」

「はい。あの、切り裂かれたお召し物はいかがなさいます?」

「アシュマさま、いかがなさいます?」

「シャツは駄目だろう。革ジャンも駄目だが『アーヌにしてやられた記念』として取っておきたい」

アシュマはそう言った。

「まあ。アシュマさまにしては洒落が効いています事」

アーチエルが呆れたように言った。

「およし下さい。縁起でもない」

アンは嫌がった。

「捨てますからね? 良いですね?」

アンは念を押した。

「ま、しょうがなかる」

アシュマは言った。

「じゃあ、同じのを買っておきますね?」

アーチエルはその様に言った

「頼む」

「じゃあ、ヒーリングスフィア掛けますね」

「アシュマ、こつぴどくやられたな?」

オルバニアンが横から割って入った。

「何だ藪から棒に……」

「何やってるのよオルバニアン、治療の最中に……」

アルミナが止める。

「おまえ、酔ってるな?」

「先に宴会始めちゃってもう出来上がっちゃってるのよ」

「宴会? 何だそりゃ?」

「アシユマのほうも大変だったろうけれど、私達のほうも大変だったのよ。ヨデイ、士気を鼓舞する為に、実費で全兵士に奢る羽目になっちゃったのよ。その上、ガルマインに頭下げて機兵を借りて…」

「そうか、そんなことまでして……。それなのにアイツは、ああか！」

「そうなのよ。あたしも困っちゃって」

「よし、一言、言ってみよう」

「その一言を待っていたよ。アシユマ！」

アルミナが待っていましたと、言わんばかりに喜ぶ。

「駄目ですよ。まだ怪我人なんですから横になってください。ね？」
アーチエルがなだめた。

「ん……。わかった」

「やっぱり駄目か……。しょーがない、自分でやるか。ごめんねアシユマ、怪我早く治してね」

アルミナはいなくなった。

きつと、オルバニアンを、しばきに行ったのだろう。

「はい、良い子でしゅねえ。横になりましたようねえ」

「俺は子供か？」

「そうよ。大好きな大好きなあしゅまちゃん」

アーチエルがアシユマに顔を近づけキスしようとする。

「アーチエル。アンが見ている」

「あつ！」

「えっ！？」

「じゃ、じゃあ姫様わたくし洗物を……」

「アンはうるたえ……」

「ア、アン？ 今見たことは忘れて」

主人のアーチエルもうるたえる。

アンは嫉妬に駆られた。

主人だろうと何だと構わない。

私のアシユマ様になんて事を……？

……違う。

私のアシユマ様ではない。

アーチェルのアシユマさまなのだ。

とても悲しくなってきた。

こうして愛しい人の洗物までしているというのに。

アシユマはアーチェルにヒーリングスフィアを掛けられた。

案の定夜半に熱が出た。

いま、艇内にいるのはアーチェルとアンとアシユマの三人だけだ
先程ノーツ連邦から内々にアールヌーの独立を認めると連絡が有
った。

『勝った』のだ。

「勝ちましたわよ。だんなさま。取り敢えずはご苦労様」
アーチェルはそう言って、アシユマの頬にキスをした。

外では『宴会』が行われていた。

大いに盛り上がっていた。

そこに入ったノーツ連邦からの一報。

「アールヌー、ノーツ連邦より独立を勝ち取る」

さらに盛り上がる酒宴……。

ヨデイたちはサースー・ウィーの庵の前で酒宴を愉しんでいた。

「甘露なる哉、甘露なる哉」

サースー・ウィー師が酒を愉しんでいた。

「大体世の男ちゆうもんはわかってなあい」

エファールが、くだを巻いていた。

「そつだ！ わかってなあい！」

アルミナも追随した。

「本物の『女』の魅力ツちゅうもんに！ わかってなあい！！ なので、これから男漁りに行くッ！！」

「よしっ！！ 行こう！！ ……て、それは、まずいんじゃないすか？ エファールの姉貴。あそこからヨデイの兄貴がチワワになつてこつちを見てやすぜ。あんなにふるふるして、ちつと可哀相なんじゃねえんですかい？」

「良いのよ！ あんな男！ クララだあ？ 照り焼きだあ？ チキンでも食つてろっつーの！！ いくよアルミナ！！」

「あ、あの姉さん……？」

「何だい？ あんた、亭主に義理立てしてんのかい？ 先に、勝手に宴会初めて本番始まりや、きゅーごろり。カミサンそっちのけで、大イビキ。そんな亭主に、義理立てしてんのかいっ！？」

エファールは一升瓶をラッパ飲みしながら男を漁りに行った。

早速見つけると即ナンパ。

「あらあ、アンタいい男だねえアタシ達と良いことしなあい？」
誘ってみるが……。

「せ、『戦慄』のワルキューレだ！！ 男アサリの悪魔が帰ってきたぞーッ」

「何よいつつも直ぐ逃げて。面白くないったりやありやしない」

「あ、姉さん、ヨデイの旦那と契るまでは、生娘だったんですよね？」

アルミナが率直な疑問をぶつけた。

「そうよ？」

平然と答えるエファール。

「さっきの奴『男アサリの悪魔が帰ってきたぞ』って言ってませんでしたか？」

「ああ、当時は男漁りしても、素直に遊んでくれる男なんていない。だから腹いせに鞭でしばいてやったのよーッ。これが結構快感で何度かこれでイキソウになったわーッ！ おーっほっほっほっほっほっほっ！！」

「胸のボタンが苦しいんです。外してくれませんか？」

腕で胸をよせて胸をことさらに強調した。

「はい、いいですよ」

ヨディは事も無げに胸のボタンを外してしまった。

（これでも落ちないの？ ようしこうなったら）

「はあ、あついあつい。ヨディ特務大佐は熱くありませんかあ？」

「クララテリア、もう良いです。見ているこちらがづらいですよ。何をそんなにムキになっているんですか？ 良いですかクララ。人間は計算では動きませんよ。人を動かすのはいつでもハートです。熱い想いが人を動かす。分かりましたね？」

（くっっ！ ちょビット勿体無かったけど、君子危きに近寄らず。残念！）

ヨディはクララには見えないように残念がった。

（何なのこの人？ 私が、この私がここまでやっているのに、思ったとおりにならないなんて。こうなったら奥の手よ！）

「ヨディ特務大佐！ 好きです！ 大好きです！！」

クララはヨディの背に向かって叫んでいた。

すると不思議な事が。

今まで眠っていた何かが目覚めるように、胸は高鳴り、呼吸は速くなり、頭には血が上り、なにがなんだか、訳が分からなくなっていた。

すると、ヨディはくるりと踵を返しクララテリアの所へと戻ってきた。

「今のは、ハートに響いたよ」

そして二人は抱き合い熱いベレーゼを……。

口付けの合間に、

「優しくしてください……」

クララは震えながら言った。

「わかった。良いよ」

ヨディは言い、キスを優しいものに変えてクララテリアを抱きし

めた。

真夜中、黒龍号、ベッドブース。

アシユマはふとした拍子に目覚めた。

眼の前にはアンの顔があつた。

「アン……『虚』はそう易々と二度も取らせないよ」

アシユマは怪我人特有のかすれた声でそういった。

意外だった。

思った以上の大怪我だったのだ。

きつと傷は内臓にまで達していたのだ。

アシユマは自分の声に驚いた。

こんなにかすれた声だったとは。

「アシユマ様、済みません。こんな身体なのに……」

「ふふ、それにしても大胆だな。アン。主人がこんなに近くに……

あれ？ アーチェル……は？」

「ご自分のブースでお休みになられています。今はわたくしが当番

の時間。」

「……………そうか……………」

「少しお眠りになりますか？」

「ああ……………そうさせてもらおうか……………?? どうした？ア

ン」

「添い寝してもよう御座いますか？」

「……………アーチェルに見付かっても知らないぞ？」

「構いません」

「庇えないぞ？」

「構いません」

「いつからそんな俺の事を…………？」

「……………忘れてしまいました……………」

「寝るか？」

「はい」

「着替えてこないのか？」

「いえ、ここで……」

アンはアシュマのベッドブースで着衣を脱ぎ始めた。

「ちょ、ちょっと待て、アン…… お前、寝巻きは？」

「いりません」

「それがどういう意味か分かっているのか？」

「……… はい。………」

「主人を裏切る事になるぞ」

「私もつろう御座いますが、もう、この感情を抑える事が出来ません。今回だけ、今回だけで御座います。どうぞ、お情けをいただきとう御座います。これ以後困らせるような事は、決して致しません故」

「アン…… 覚悟の上なんだな？」

「……… はい。………」

「分かった。おいで」

「はい！」

「そこだけ元気が良いな。予め断わっておくぞ。半病人だからな。満足を与えられないかもしれないぞ？」

「別に『それ』を求めて、するわけではありませんので」

「全く主家筋の人間を…… 病み上がりだというのに…… ぶつぶつ……」

「済みません」

数刻後……

アシュマのブースから洗物と共に出てきたアンの表情には、満ち足りたモノがあった。

愛する人と一つになれた。

何度も絶頂を味わった。

もうこれでよいと思った。

この日の思い出と共に生きていけると思った。
暇を貰おうと思った。

どこかでひっそりと暮らして行こうと思った。

アップルトン家には恩が有りながら、それを土足で踏みにじったから。

でも悔いは無い。

私に幸せをくれた人、アシュマ・アトー。

私は貴方を忘れない。
有難う。

さようなら。

第五節 侵攻

三日後。

アンはブリッジに上がった。

元気になったアシュマの姿もある。

ここでの任務も終わり、やっと自由になれる。

レキシタニアに帰った時、正式にお暇を頂こう。

アンは、そんなことを考えていた。

だが事態はそんな一人の女の行く末など、かき消すように推移した。

ノーツ連邦がアールヌー国の独立を認めたことで、国際的にアールヌー国は独立国家として認められた。

それは良い。

しかしアールヌーが取った行動は国際的な非難を浴びる。

隣国エハボイ共和国に対して宣戦を布告したからである。

そしてこうした行為に異を唱えるノーツ連邦、クローン人民共和国、リスパダハル共和国。

そんな、アールヌーに援助をするアヘイビアをはじめとする連合国側。

特に武力的援助を惜しまなかったのはノリトレアで、国際的には非難轟々。

しかしガルマインは、そんなもの何するものぞと傲岸不遜な所を見せていた。

そんな情勢の中、国際的な紛争が再燃しようとしていた。

主にアヘイビアをはじめとする連合国側は魔導機兵の部隊を四千、ノリトレアは魔導機兵部隊二千と空母エルリナルティを置いて帰る。余談になるがノリトレアの空母エルリナルティは魔導機兵搭載数二千四百を誇り、搭載と同時に修理も出来る優れものだが、如何せん足が遅いという欠点を持っていた。

そして当然のことながらオロ・エバス財団も駐留を決定。

なんとオロはアング將軍と契約し、アング將軍は全軍の指揮権黒龍号に委譲。

その旨をヨデイに伝えた。

「オロ！ 何を考えているんだ！ そのアング將軍こそ今回の騒動の発端者じゃないか！！ 王子を拉致したのもそいつだ！！ こんな奴とは手を組めんぞ！！」

ヨデイが息巻いた。

「まあ、そういきり立つな、ヨデイ。負けられんだよ。ノリトレア如きに魔導石鉱山の利権を奪われるなど、我慢がならん！！」
相変わらず、オロは利潤追求だ。

「我慢がならんのはこっちのほうだ！ 今でも王子は拉致監禁されている！ それを盾に取られて奴の思いのままに動くのがいやなんだ！！」

「王子など、どうでも良い。利益だけが大事なのだ。利益の為に多少の犠牲には眼を瞑れ！ お前にだって多少なりとも経験はあるだろう？」

「くっ……もし、アング將軍が卑怯な手を使おうものならこっちはすぐさま手を切るからな！！」

「ヨデイ、お前には出来まい。特に王子の命が掛かっているとすれば尚更だ」

「くっ……」

「悔しいだろうが今までどおり働いてもらおう。そして機会が来たらアング將軍に反旗を翻すがよい」

「オロ、お前も良い様に使われるだけだぞ？」

「それはヨデイ、君達次第だよ」

「現場の事をこれっぽっちも分らないくせに」

「それが上司と言うものだよ」

そう言って通信は切れてしまった。

アンは、今、とてもこんな状態の中での暇乞いは、無理だと判断

した。

「皆さん、お茶などいかがですか？」

アンは少しでも場の雰囲気のを和ませようとした。

ヨディは、はぁ、と一つ大きな溜息をした後、よしと言った感じ
で、

「じゃあ、アンさん、一つ頂こうか」

そう言った。

「アシユマ様は？」

アンは聞いた。

「一つ頂こうか」

アシユマもヨディと同じ返事をしていた。

「こんな事になるのなら、なんでオロはアロアオゲルの一つでも出
さなかったのかね？」

オルバニアンがそうぼやいた。

早速戦闘が開始された。

旧国境付近でだ。

早速ノリトレアとアヘイビア以下混成部隊が出撃した。

勿論アールヌーも外国人混成傭兵部隊を発進させた。

同時にトーガイア、ゴハクも展開した。

ゴハクはこの三日間で補給物資を満杯にして戻ってきた。

態勢は万全だ。

それにしても、ノリトレアは別にしてアヘイビアと以下ノルブル
王国、ドラスティス共和国、レボトミノ連邦共和国、の連合国軍側
は何故ここまでアールヌーに加担するのか？

勿論権益の為でもあったが、それは連合軍側の国々の要所、要所
でアールヌーの民アール人が要職についている為である。

特に多民族国家のアヘイビアではそれが顕著だった。

ロビイスト活動の多いアヘイビアではそれがものを言った。

アールヌー国外にいるアール人は、著名人、商人、科学者等となるものが多かった。

かのイー・イーチャイルドもその一人と言われている。それがゆえにアールヌーに加担するのである。

黒龍号よりオルバニアンとアルミナが発進する

「気をつけてくださいね。今回の戦いはいつもより混戦、乱戦が予想されます」

ヨディが二人に言う。

「わかってらあな。なあ、アルミナ」

「勿論よ、安心してヨディ」

そう言って二人は出撃して行った。

「よし、ヨディ、俺も出る」

「アシュマさま。アシュマさまは病み上がり。無理をせず、今回はお休みくださいませ」

アーチエルがアシュマを心配した。

「その通りですよアシュマ君」

ヨディがアーチエルの言葉に同意した。

「ヨディ、敵味方が分かる表示のついたインカムがあつたな？ 出してくれ」

アシュマは構わずそういった。

「貴方は人の話を聴いてないんですか？」

「弟と妹みたいな奴等が発進するんだ。黙って見ていられるか。その代わり黒龍は後方に下がっててくれ」

「アシュマ君」

「分かりました。アシュマさま。その代わり、無茶はしないで下さいね。後、出来ましたら……」

アーチエルが言いだした。

「分かった。敵パイロットを生かすようにするよ。なるべく」

「済みません我儘ばかり申しまして」

「今日のは俺の我儘だ。許せ」

「ホントにしょうがない二人ですねえ。はい、アシュマ君これがそのインカム。サングラス状になっていて、マークが重なります」
「×」
「が敵になります味方は」
「○」で表示されます。味方は表示、非表示
両方出来ます」

「分かった。じゃあ、ゴンドラを上げてくれ」

「アシュマ様くれぐれもお気をつけて」

アンがそういった。

アシュマは頷いて見せた。

「アシュマ、随分と遅かったな待ち草臥れたぜ。それでも弟たあ、
チヨツとねえんじゃねえの？」

オルバニアンがわざわざアシュマが出てくるのを黒龍号に掴まっ
て待っていた。

「あら？ 私はアシュマが兄貴なら、それはそれでいいわよ？」

アルミナはまんざらでもなさそうだ。

「俺の兄貴は他にいるのっ！」

「なに？ 初耳！ どの誰？ 幾つ？ カッコいい？」

「いいの！ それは！！ アシュマ、行くぞ」

「ああ」

アシュマとオルバニアンたちは発進した。

敵味方入り乱れて、雲霞の如くわき起こり、戦闘していた。

「オルバニアン、シールドを掛けておけ」

アシュマがインカムを通じてオルバニアンに言った。

「分かった。アシュマ何枚掛けくらいがくらいが良いかな？」

オルバニアンは言った。

「基本は五十だな」

アシュマは言った。

「分かったそれで行ってみる」

「常時五十枚はキープしとけよ？」

『わかった。聖なる女神タテトラム。聖なる盟約に従い……』
『俺は先行する』

言って、アシュマは速度を上げた。

先ず眼を引いたのが魔導機兵の数である。

双方合わせて一万二千。

コレほどの数の魔導機兵を見たことがあるのか？

コレほどの空前絶後の数の魔導機兵など見たことが無い。
だがアシュマに戸惑っている暇は無かった。

インカムにスイッチを入れる。

周りは敵だらけだ

こうなったら鬼虎秘剣、真・蚩で……駄目だ！

所々に味方機が混じっている。

一機一機落としていくしかない。

アシュマは先ず眼の前の敵機に集中した

アシュマは、携帯している武器を使用できなくなる為にN字型に
飛び、両腕のマニピュレーターを、斬り飛ばしてしまった。

『な、なんだ今のは人かッ！？』

等と言われた。

その様な行動を十数回程繰り返していると、

『に、人間業じゃないっ！！』

『悪魔だ』

『閃光のだ！ タインよ！ 奴こそ悪魔だ』

『ブラッディアシュマが来ているぞー！！』

等と忽ち、その恐怖が敵機に伝染して行った。

『なんで、そもそも人間が空に浮いていられるんだ？』

『悪魔のアシュマが来ているぞ』

『あの生き血を欲する悪魔が、何故機兵同士の戦いにしゃしゃり出てくるんだ！？ おかしいじゃないかッ！？』

そうこうしているうちにアシュマはさらに敵機を十数機程戦闘不能に陥らせていた。

『悪魔だ！ 悪魔が帰ってきた！！』

アシュマに見れば魔導機兵の動き等スローモーそのものだったし、マニピュレーターを斬り飛ばすことなど造作も無かった

中には果敢にも、立ち向かってくる機体もあった。

マシンガンを斉射しながらこちらに向かってやってくる魔導機兵がいた。

それは仕方ない。

鬼虎秘剣・物干し竿で刀身を伸ばし真っ向から竹割に斬って捨てた。

または剣で勝負を挑むものもいた。

そういうものには尋常に勝負（と言ってもサイズが違うのだから尋常もへつたくれも無いのだが）し、綺麗に両腕を切り落とした。

そういうもの達に限ってエースパイロット級だったりする。

だから、また悪評が広まるのに拍車を掛ける。

アシュマがいるという伝聞は、瞬く間にその悪行（戦果？）と共に敵中に知れ渡り、潮を引くようにアシュマの周りから敵が引いて行った。

（よし、今だ）

アシュマは鬼虎に気を込めた。

鬼虎秘剣、真・蚩を使おうというのだ。

裏・閃光一刀・崩しからの鬼虎秘剣、真・蚩。

鬼虎の刀身は激しく銀色に光り輝いていた。

アシュマが止めに鬼虎を振ろうとしたその時

『アシュマさま、それまでです』

アーチエルの透き通った声が聞こえてきた。

『止めを刺すまでも無いでしょう。』アシュマさまの勝ち』です』

『……そうか、俺の勝ち……か』

一度、恐怖で均衡を崩した戦の集団と言うものは、烏合の衆に成

り下がり、とても戦が出来る状態では無くなるという。

今日アシュマがしてのけたことはそれで、一人で六千の敵を退けた。

これは後に語り継がれる伝説となった。

アシュマは黒龍号のゴンドラに手を掛けた。

アシュマは黒龍号の中に引き入れられた。

「お帰りなさいませ。だんなさま。ご苦労様に御座いました」

アーチエルが言った。

「うむ今帰った。アーチエル」

「アシュマ様お召し物を」

侍女のアンが言った。

「うん……？」

アシュマはいつものアンと違う感じを受けた。

少しよそよそしいのである。

ま、そういう時もあるだろう。

アシュマはそう思った。

アシュマはそう思ったかもしれないが、アンにとっては大変な葛藤を強いられていた。

アンは、アシュマとの契りが終わった時点で、この恋を人知れず自分の中で終わらそうとしていた。

そして出た態度が『素っ気無い』。

これ以上無駄な好意を表したくないのである。

自分が辛くなるから。

自分が惨めになるから。

アーチエルがいるから。

その日の夜……ブリッジにて。

「アーチエル様的には、双方最小限の被害ですんだのだから、万々歳なんだろうけどね」

ヨディは言った。

「このままじゃ、決着がつきにくいなあ
と、アシュマ。」

『ヨディ様、起きてますう？』

クララテリアは無線で言ってきた。

「はいはい。起きてますよ」

『ああ、ん、だありい、ん』

「こらこら、アシュマ君がいますから」

『え？ アシュマ様？』

「何でキミ達はアシュマ君の事を『様』付けで呼ぶの？」

『なんかそんな感じしません？ アシュマ様って』

「僕アなんか複雑な気分だなあ」

『きやつ、妬いて下さるんですね？』

「ま、端的に言えばそうなんだけどね」

「二人の事はエファールは知っているのか？」

アシュマは訊いた。

「フルフルフル！ エファ何かに言えませんか」

「あたしなんか何を言えないって？」

エファールがブリッジにやって来た。

「え？ あ？ な、なんでもないよ？ 『エファール』」

「あら？ 何かしら？ 通信パネルが点いてるわね？」

（ぎくっ！！）

「どれ、チョツと！ どいて……あら、貴女は……貴方あ？」

「わあっ！ 誤解ですう！ 何もしてません」

『まあ、酷いですわ、ダーリン何もしてないだなんて、あの夜の事は全てなかったって言うの？』

「わあっ！ クララテリア何もこんな所で……」

「ああた？」

「わあっ」

『だーりん！』

「わあっ」

「まあ、まあ。クララテリア、通信の目的は？」

アシユマが言った。

『あ、そうでした。オルバニアンとアルミナさんに、新しい機体のパッケージが来たので、取り合えずお話ししようかと思って』

「あいつら、今、何やってるんだ？」

アシユマがエファールに訊いた。

「えっちよえっち。可哀相だから、させといてやりましょうよ」

『じゃあ、明日の七時に、こちらに出頭するように、伝えておいていただけます？』

「わかりました。伝えましょう」

最後にはヨデイが閉めた。

今の事を伝える為に三人はオルバニアンのベッドブースへ向かった。

三人はオルバニアンのブースの前まで来た。

ヨデイはインタフォンのスイッチを入れる

『あん！ あっあっ！ ああん……！』

アルミナの喘ぎ声が聞こえて来る。

「聴いてないで喋りなさいよ。恥かしい」

エファールは照れて言った。

「あゝ……おほん！ ヨデイです。聞こえますか？」

『……………』

「もしもし……」

『わあああああっ！ 何勝手に聞いてんだよお！』

オルバニアンの悲鳴が聞こえてきた。

「あーすぐ済みますから。明日朝七時、お二方は、トーガイアのクララテリア大佐の下に出頭して下さい。ニューマシンが届いているようですよ」

『ニューマシン！？　どんな！？』

『ちよっと、オルバニアン』

アルミナが困った様な少し怒った風に言う

『おっとすまねえ。とにかく明日出頭すりゃ良いんだな？』

『そういうことです』

ヨディが頷いた。

『ではごゆっくり』

ヨディがオルバニアンたちに達に話した。

『さて、我々も寝ますか』

『あなたはこつち』

エファールがヨディの腕を絡め取ってきた。

『じゃあ、アシュマ君、お休み』

『ああ、おやすみ』

（ふふ、困った連中だ……）

思いながらアシュマは自分のベッドブースで眠りに就いた。

「オルバニアン・マグマイヤー、アルミナ・ラ・シア両名出頭いたしました」

オルバニアンは言った。

「ふむ、時間通りと。ま、当たり前だね」

これまたクララテリア管理官が言った。

朝、ここはトーガイアのブリッジ、眼の前にはクララテリア管理官がいる。

「でも軍人でなし、ただの民間人と言うわけでもなし……少々、扱いにくいわね」

（やり難いのはこつちも同じなんだよっ！）

「まあ、いいわ。今日、あなたがたに来てもらったのは、新型魔導機兵の、テストパイロットになってもらうためです」

「新型の……」

「魔導機兵……」

二人は思わず呟いていた。

「そう。新型の。今度の魔導機兵では副操縦士無しに空中戦闘が行えます」

「冗談はよしてくれ。空中戦を行いながら、機体の制御なんて、とても一人じゃ行えねえって」

オルバニアンは言った。

「それが出来るのです。このイメージスキャナーで」
クララテリアはヘッドギアのような物を取り出した。

「イメージスキャナー？」

「簡単に言つと脳波読取装置みたいなものね。何にでも応用が利くわ」

「それを空中戦中の機体の制御に使うわけですか？」

アルミナが訊いた。

「そうね。今回はそういう事になるわね。財団ではいずれ、機体の空中制御から基本動作、戦闘行動までを、イメージスキャナーで行おうと考えているわ」

「へえええええ」

「そこで、オルバニアン君、アルミナさん」

「ん？」

「はい？」

「入ってきて良いわよ……」

クララテリアは何かを促した。

プシュッ、と音がしてドアが開き、筋肉質だが細面のちょっと良い女が入ってきた。

「彼女はね、コクレト軍曹。こんななりでも、メカには滅法強くて頼りになるわ。はい、ご挨拶！」

「自分はアリシアナ・コクレト軍曹であります！　これからオルバニアン・マグマイヤーさんと、アルミナ・ラ・シアさんと、マシンの調整をさせていただく事になりました！　宜しく願いますッ

！」

「オ、オルバニアン・マグマイヤーだ宜しく」

「アルミナ・ラ・シアよ。宜しくね」

「は、はいっ！」

「はい、オルバニアン君とアルミナさんは、これからこちらに、一週間泊り込んでもらうから。そのつもりで覚悟して」

クララテリア管理官は言った。

「え？ 聴いてないよ！ そんなこと！ 着替えだって持って来てないぜ？」

オルバニアンは憤った。

「お願い。時間がないのよ。着替えは部下に持ってこさせるから。ごねないで。お願い」

クララテリアは説得しようとした。

「……アンタ、なんか変わったような気がする」
オルバニアンが言いだした。

「は？ か、変わった？」

「前は、なんでも頭ごなしって感じだったけど、今は曲がりなりにも一応話を聴いてくれる。なんかあったのか？」

「お、おほん。なにもありません。他に何かあるかしら？」

「いや、特にねーけど。アルミナは？」

「私も特にない。寝泊りする所だけ見せて？」
「こつちよ……」

それからの二人は二人の特性に合わせて、それぞれ機体の調整を繰り返しながら、結局そこで寝起きし、食した。

油まみれになることもあった。

機体の調整をシミュレーターにフィードバックして大失敗する事もあった。

機体を調整しては、シミュレーターにフィードバック。

そしてまた調整しては、シミュレーターにフィードバック。
これの毎日であった。

話を聴けばこの機体、ロールアウト仕立てでいわばこれはテスト機、オルバニアンとアルミナは、実戦テストパイロットと言うことになるそうだ。

それこそ、最初は憤慨していたが、マシンを弄りシミュレーターに乗ってしまえば、そんなことはすっかり忘れて、ご機嫌になっていた。

二人とも、早くもこの機体に愛着を、感じ始めていたのである。
ちなみに機体名は『ラヴァー』。

愛する人、恋人と言う意味である。

これが完成すれば、史上初の一人での機体の操縦、飛行制御、魔導石による防御、攻撃などを行える機体となるそうだ。

アーチエルが陣中見舞いにやって来た。

珍しい事もあるもんだと、話を聞いてみると、なんとシールドの魔法を、アルミナに教えに来た、と、いうのである。

アシュマの計らいだった。

普通は、オルバニアンの機体を整備している時に、アルミナが休み、アルミナの機体を整備している時に、オルバニアンが休む。

このローテーションな訳だが、アーチエルに割り込まれてしまうと、アルミナの休む時間が、無くなってしまう。

迷惑顔をしたアルミナだったが、アーチエルの『授業』が始まった。

「呪文を覚えるだけでいいんです。なんだったらお札に書いて、それを読むだけでいいんです」

アーチエルは言った。

「面倒くさいよ。覚えなくても良いよ。眠い……寝せて」
アルミナは眠そうに言った。

「アルミナさん、あなたの命に関わるんですよ？」

「あたしにとつては今が命の危機……。お願い寝せて……」

「じゃあ、お札に書いておきますから、出撃の時はこれを読んで下さいね」

「んー。わかったあ……」

「本当に分かったのかしら？　じゃあ、アルミナさん、私、帰りますからね？」

「すー……」

「駄目だわ。これは。……また来ますね」

「すまねえ、姫さん」

オルバニアンが言った。

暫くして、今度はオルバニアンが、休む番になった。

見ると、アルミナが休んでいる隣で、アーチエルがうつらうつらしていた。

自分や、アルミナならいざ知らず、一国の姫君が、よくもまあまあ、こんな騒々しい場所で寝れるものだと思った。

「姫……。アーチエル姫……」

オルバニアンはアーチエルをゆすった。

「は、はい……。あ、オルバニアン様」

「そろそろ帰らないと、アシュマが心配しますよ」

「はい。オルバニアン様に渡す物があつて」

「俺に？」

「はい……これを」

それは包みに隠された一振りの刀だった。

包みを解いてみるとそこには……

「……！！……いつ……『逸鉄』じゃねえか……！！」

「はい」

「ア、アシュマがこれを俺に……？」

「はい」

「あんなに大事にしていた刀を……何故、俺に？」

「さあ、真意はどこにあるかは分かりません。ただ、『オルバニアンなら、使いこなしてくれそうだ……』と仰っておりました。『機械弄りも大いに結構だが、こちらのほうも頑張れよ』と、仰ってましたよ」

「アシュマに伝えて欲しい。確かに承ったと」

オルバニアンは、身体をくの字に折って頭を下げていた。

そして人知れぬ様に男泣きに泣いていた。

「はい。畏まりました。では行きます」

アーチエルは去った。

オルバニアンは、その姿勢を保ったまま、アーチエルを見送った。

アーチエルは黒龍号に帰ってきた。

今にも寝てしまいそうな位、ふらふらしていた。

「おかえり、アーチエル」

他に誰もいないブリッジでアシュマがアーチエルに挨拶をした。

「ただ今戻りました。アシュマさま」

アーチエルもアシュマに倣って挨拶をした。

二人は歩み寄り抱擁しあった。

「一緒に寝ようか？」

「はい。でもその前にお風呂を頂きとう御座います」

「そうか。その後で一緒に寝るか」

「はい、後でアシュマさまのブースにお伺いします」

アーチエルが入浴を済ませてアシュマのブースにノックした。
アシュマはアシュマはベッドシエルを開く

アーチエルはゆっくりアシュマの夜具に身を滑り込ませる。
ベッドシエルを閉じ二人は抱擁を交わす。

そして、

「アシユマさま？」

そう話を切り出す。

アーチエルが切り出した。

「ん？」

「オルバニアン様に『逸鉄』を確かに渡してまいりました」

「ん。有難う。奴の武器は相当年季が入ってたからなあ。そろそろ代替わりしても良い頃だと思ったのさ」

「まあ、そうだったんですの。大変喜んでおいででした。涙を流して喜んでおいでのようでしたわ」

「そう、喜ばんでもいいものを……」

「アシユマさま？」

「なんだい？」

「最近アンはどうしてます？」

「アンか……。俺が、アンに冷たくあしらわれてるよ。そりやもう、素っ気無いもんさ」

「……何かで踏ん切りをつけたんだわ！ 早まった事考えていなければ良いけれど……わたくし、アンのブースに行って参ります」

「アーチエル今夜はよそう。もう寝てる」

「大丈夫かしら……」

「それに、さも俺の所から来ました見たいな出で立ちだとまずかう」

「そうね。今日は我慢したほうがいいのかも」

「と、俺は思う」

「あゝ、何だかもやもやして、素直にアシユマさまに、甘えられませんか」

「しょうがない、しょうがない。さあ、寝よう」

「もう寝るのですか？ いつものようにたんと、アーチエルを可愛がってくださいませ」

（いつもながら、側から聞くと凄い台詞だよな）
「さあ」

アーチエルはうつとりと眼を瞑りアシュマの口付けを待った。

アシュマは、朝から嫌なものを、見てしまったと思った。

あの顎がしゃくれた、神経質そうなアング將軍の顔である。

『アシュマ・アトー、今、貴様、露骨にいやそうな顔をしたな？私、直々に処刑してやる』

「アング、お前はバカか！？　そこからどうやって俺を処刑するんだ」

アシュマはわざとアングを挑発してみた。

「バカはお前だ、この知恵のドームさえあれば……」

アングは途中部下に窘められ

「まあ、よいコレさえあれば……、おい愚図ども！　貴様等に、神からの御神託が下ったぞ！　このまま、砂漠を南下しろ。すると、敵の本陣が見えてくる。そこでアシュマ・アトー、貴様の出番だ。このまま敵陣の中央突破だ。多少周りを引つ掻き回せ。この間みに綺麗に勝ちすぎると、敵の損害が見込めん」

「酷い！　貴方はアシュマさまに、殺人鬼になれって言つの？」

アーチエルはアングを非難した。

「何だ貴様は？　人の話に割り込みおつて……お？　なかなかの美形じゃのう。ワシの愛人にならんか？」

「この無礼者！！　わたくしに愛人になれとは、言語道断！！　きつときつく仕置き申すぞ！！」

「無礼者とは何だこの女………」

部下が慌ててアングに耳打ちしに来た。

「なにになに？　……アーチエル王女？　……へえつ、へえつ、へえつ、へえつ。アーチエル様とはつゆ知らず、このアング、血統書のあるものが大好きでしてなあ、是非是非、私めの愛人に……へへへ」

アーチエルは背筋に悪寒が走り、何か気持ち悪い物でも見るよう

にし、やがて目を瞑った。

「お前にアーチエルは渡さん！ 俺のアーチエルに、指一本でも触れてみる。即座にお前のそつ首、刎ねてやる！！」

「ほざいたな？ 小僧！ その女は絶対俺の物にしてみせる！！」

そして、アシユマ・アトーよ、精々戦場を引つ掻き回してくれよ？

はあっはっはっはっ！」

プツッ！

通信は途切れた。

「どうでした？ エファールさん？ 探知できましたか？」

ヨデイが訊いた。

「駄目だったわ。惜しかったけど」

「そうですかあ」

「ところでアシユマさま？」

「なんだい？ アーチエル」

「『愛人』ってなんですか？」

今回の作戦の概要はこうだ。

敵の要塞外周で陣を取る。

それをアシユマが突貫を掛ける。

敵をかく乱した所で、任務は終了。

だが、その、作戦前に自分たちの居場所が知られるのはまずい。最初に下された命令は『偵察』だった。

偵察を行う段になって、アーチエルも付いて行くと言いだした。別に面白い物ではないから、ついて来なくても良い、と言うと、どうしてもついていくといって聞かなかった。

「外のほうが跳べそうな気がするの」

アーチエルは謎の言葉を言った。

「アーチエル、ついて来なくても良かったんじゃないのか？」

「いえ、なにやら予感がしたもので」

アシュマ達二人はバイク型の小型サイコ・フライヤーで偵察して回っていた。

「予感？ デー又王子みたいなことを言うなあ」

「う……ん、そんなのとは違って」

「なんだ？ 眠いのか？」

「う……ん」

どうも煮え切らない。

具合が悪いのか？

熱中症なのか？

急いでバイクを止めアーチエルを寝かす。

汗はかいているようだ、と判断する

まずは、水分を補給しないと。

あと、電解質を。

「アーチエル、水だ」

「うん、……有難う」

「アーチエル、少し危険な状態になりかけている様だ。黒龍に戻る」

「……うん、……御免ね。アシュマさま」

少し意識の混濁があるのか、反応が鈍い。

とにかく、急いでもどらなといけない。

その時、何かの気配を察知したのか、アシュマの身体がアーチエルを抱いて無意識に前へ跳ぶ。

地中から突き出た挟み状のアームがバイクを挟む。

アシュマは横目に、アーチエルを見ながら、その挟み状のアーム目掛けて、突っ込んで行った。

敵は地中だ。

どれだけの深さがあるのか分らない。

アシュマは、鬼虎秘剣・物干し竿を使うことにした。

刀身の長さはおよそ八メートル程。

どんな物でも切り裂く光の刃だ。

アシュマは気合を込めて砂地に向かって、光の刃をたたきつけた。
ざくり。

手ごたえはあった。

数泊おいて爆発。

そしてアーチェルの行方を追う

(いない、どこに行った?)

気の残光でアーチェルの行方を追う。

この丘の向こうか!?

見るとアーチェルは砂に埋もれかかっている。

アシュマが今から行っても間に合わない。

多分砂に埋もれて行方が分からなくなるだろう。

もう駄目かと思ったとき……

「……我を死の淵から救いたまえ、纏え漆黒の羽根、ブースト!!」
そう言う声が聞こえてきて、上空から砂地の中へ、自身も半分砂地に埋もれさせ、何か巨大な塊をぶち込んだ奴がいた。

そいつはアーチェルを砂地から救うと、

「我が飛ぶのは暗雲の空

戦の女神を犯してもぎ取る

その背の羽根は既に漆黒

我が背に添えて我が羽根に

そして散るかなこのわが身

禁忌を犯して我が翼となれ

ウイング!!」

そう唱えて素早く浮き上がった。

砂地では爆発。

その男はゆっくりと地上に降りて、アシュマの前まで来るとアー

チエルをゆつくりと砂地に寝かせたあと、急に『おこり』のように身体を震わせはじめ、こう言った。

「さあ、借りは……返したぞ。アシュマ・アトー……!!」

その男はエディアード・ウルフィだった。

そして巨大な塊は彼の持つ大剣だった。

女王キャサフローレンと共に信徒の都レジルデを恐怖の底に叩き込んで以来、国をも追われて逃亡中の男だった……はずだ。

「確かに返してもらった」

「さ、さあ……勝負だ」

「その身体では、まともに剣も振れまい」

エディアードの『おこり』のような震えは、彼が『ブースト』の魔法をかけた代償だった。

『ブースト』は強大な力を手にするあまり、代償として肉体を極限まで酷使してしまうのである。

「そ、それでは、また、お前に、借りを作って、しまふ事になる」

「もう、貸し借りの話は止めよう。キャサフローレン。久しぶりだ」
エディアードの後にキャサフローレンが控えている。

彼の事が心配なのだろう。

「お久しぶりです。お元気そうで何より」

キャサフローレンが切り出した。

「キャサフローレンも。助けてもらっておいてなんだが、こいつを連れて帰ってくれ。またバカな事を言い出しかねない。俺もアーチエルを連れて帰らねばならない」

「分かりました」

「馴れ合うな、キャサフローレン、今のこいつらは敵だ」

「その他に敵には誰がいる？」

『レジルデ』と言う言葉が、帰ってくるのを分かかって、敢えて訊いた。

「俺の敵はレジルデと七賢人だ。だが、勘違いするなアシュマ・アトー。貴様も敵の内の一人に変わりはない」

「そうか。一つ教えろ、七賢人とレジルデはどんな関係があるんだ？」

「同じ穴の貉だ表裏一体をなしている……さあ、勝負だ!!」

「何度も言わせるな今のお前には無理だ」

「勝負だ……」

アシュマは、そんなエディアードを無視して、キャサフローレンに「ではな」

声をかけた。

「はい」

そういう返事を聞いた後、アーチエルに、応急措置としてヒーリングスフィアを掛け、そしてアーチエルを抱えて、ウィングの呪文で空へと飛び立った。

相変わらず軽い。

鳥の羽のようだ。

不謹慎だが、気を失っている顔もまた可愛い。

アシュマはアーチエルを抱き寄せ頬擦りをした。

そして黒龍号へ戻った。

どうやら、アーチエルの言った『予感』とは、エディアードの事だったのか、真偽はアーチエルに訊かねば分かるまい。

だがアシュマには訊く気が失せていたが。

黒龍号についた。

早速アンが大騒ぎをし、アーチエルをベッドに寝かせた驚いたのは、アンにしては珍しく、アシュマに対して激しく非難したことだった。

何故、姫様にこんな仕打ちをさせるのか？

何故護ってやれなかったのかと。

だが、それを言っている場合でもなかったし、治療を優先させなければならなかったのだ、アンの非難もそこまでとなった。

実際の治療はアシュマが当たった。

一回ヒーリングオールをかけて、気になったところを、ヒーリングスファイアで補強してやった。

おかしいと思ったのは、これだけでも意識の回復がないことだった。

アシュマはおかしいと思い、アーチエルに呼びかけてみた。

「アーチエル、アーチエル？」

すると……

「……キス」

返事が返ってきた。

仕方ないので口を付ける程度のキスをしてやった。

するとアーチエルは、ゆっくりアシュマの首に抱きつき自分からキスをしてきた。

これも口をつける程度のキスだったが。

相変わらずアーチエルは目を瞑ったまま寝息をたてていた。

すると、アンは我慢していた何かに、耐え切れなくなったかのように、自分のブースへ戻って行った。

アシュマはアーチエルも気になったが、アンの事も気になったので、アンのブースへと行ってみた。

アンもブースは女子側の一番奥にある。

そこでアンは無言の内に肩を振るわせ泣いていた。

「アン」

アンに向かって声をかけてみた。

アンはこちらを振り返りアシュマに身体を預けてきた。

そして、アシュマの胸で泣き

「あの一夜の事で、全てを吹っ切るつもりでしたのに、それが出来ません。こんな我儉な女、アシュマさまはお嫌いでしょうに……」

言ってアンは暫く泣いた後、やがて自分を取り戻したかのように、

「もう、大丈夫です」

毅然として言った。

アシュマは、そうかと一言返し、

「もう大丈夫なんだな」

アンに念を押した。

「はい」

アンは答えた。

「じゃあ、俺はアーチェルのほうへ戻るから」

アシュマは言った。

「はい」

アンは言った後、再び涙で眼が滲み出し、涙をばろばろと零し始めた。

「駄目ね、私って。弱い女」

そう呟いた。

アーチェルは暫くすると眼を覚まし、意識を取り戻した。

「アシュマさま！」

「アーチェル」

二人は抱き合った。

「心配したぞアーチェル」

そしてアシュマはそう言った。

「済みません。知恵のドームへ跳んでおりました」

アーチェルは意外な事を言った。

「え？ 知恵のドーム？」

そこにいた全員……と、言ってもアシュマ、ヨディ、エファールの三人だけだったが。

兎にも角にもそこにいた三人は驚いていた。

「知恵のドームに跳んでいたって？ 場所は分かったのかい？」

「いいえ御免なさい。場所は分からなかったの。でも知恵のドーム

の『知恵』なんて嘘。とんでもない代物でしたわ。言うなればイメージスキャナーつきの巨大プラズマ発生装置みたいな物でした。『知恵の』なんて可愛い表現して、その実あんな恐ろしいモノだったなんて、アング將軍が立て籠もるわけです」

「王子は、王子はどうしてるの？」

エファールが訊いた。

「王子は、全裸の女性に囲まれていました。皆、絶世の美女ばかりでした」

「なんて羨ましい！」

ゴン！

ヨディはエファールに殴られていた。

「でも何でまたそんなことを……」

ヨディが続けて言った。

「下手な事をする、王子はその女性たちに純潔を奪われてしまうそうです。純潔を奪われたら、王子は予知能力を失ってしまいます。いわばその女の方々は、生きた牢獄のような物です」

「アングは何をしている？」

アシュマが訊いた。

「アングは……作戦室のような所で地図を見ながら、悦に入っている毎日です」

「アングらしい。その作戦室みたいな所はどこにある？」

「ドームの中央に仕切り無しでテーブルを置いています。そのとなりに王子がいる感じですね。ドーム全体が巨大なイメージスキャナらしいです」

「そうか。兵士の配置状況は？」

「流石にそこまでは」

「そうか。ご苦労さん」

「はい」

「少し眠ると良い」

「はい」

エハボイ共和国の要塞外周にこちら側の陣営の魔導機兵約六千が揃った。

その中には魔導機兵に乗らず、生身で戦うアシュマや、最新鋭機『ラヴァー』に乗っているオルバニアンやアルミナの姿があった。その『ラヴァー』で戦うオルバニアンと、アルミナの兵装だが、オルバニアンの『ラヴァー』には三十ミリ念封弾バルカン砲、ライフル、魔導石製の幅広な刀、装甲は並み。

そして、アルミナの『ラヴァー』の兵装は全長六メートルの魔導石製の太剣のみ。

各関節には様々に加わってくる力に対応できるよう強化が施され、近接戦闘用の機体の為装甲が分厚く作られていた。

突撃性能を上げる為に飛行ユニットに加速機能を付け加えてある。双方とも基本的に装甲はミスリル、一部コクピット周り等には装甲材を魔導石にしていた。

一人で飛行ユニットの魔導石の運用もしなければならぬ為、念動力のブースト機能をつけてある。

このため、通常運用の限界リミットが三十分となって、以前二人で魔導機兵を運用していた時より、格段に時間が短くなっていた。

その代わりに絶大な戦闘能力を手に入れたが……。

ちなみにアルミナと、オルバニアンの為に『シールド』と、唱えるだけで、シールド五十枚掛けをしてくれる、ミスリル製の御札をアーチエルが苦心して作った。

その札は、ちゃんと二人の首に掛かっている。

突撃のラッパはいま、ヨディの手にかかっている。

敵魔導機兵は、中に潜んでいるのか、場所を移動したのか、要塞前には居なかった。

ヨディはなにやら予感めいたものを感じ、

『アシュマ君、ちょっとヌーの都までひとつ飛びして来てくれませ

んかねえ』

ヨデイがそう言った。

『アルヌーの都である、ヌーの都か？　ここにいない魔導機兵が都を襲うとでも？』

と、アシュマ。

『ここにいないのが気になるだけです』

『もし敵を発見したら？』

『アシュマ君の判断にお任せします』

『ヨデイ様！　アシュマさまにそんな危険な事を？　アシュマさま？　もし敵に遭遇したら逃げてくださいね？』

アーチエルが割って入ってきた。

『分かったよ、アーチエル』

『アシュマ、俺達も行つてやろうか？』

オルバニアンが申し入れてきた。

『運用時間に問題があるだろう？　俺一人で大丈夫だ。ヨデイ、敵が裏を搔くとしてヨデイだったらどう動く？』

『僕が敵だとして、裏を搔くとしたら遠回りになりますが、一度海岸線に出てぐるり回って都の裏側に出て占拠をするでしょうね』

『なるほど。じゃあ逆に都まで一直線に飛んで海岸線に出れば間に合うな』

『そういうことになりますかね。行きますか？』

『ここの攻略が気に掛かるがな』

『ここは大丈夫です。これだけの数の魔導機兵がいれば何とかありません』

『そうか。オルバニアン、アルミナ、後は頼んだぞ。慎重に行け』
『分かった。アシュマ』

オルバニアンが、そして

『慎重すぎるぐらいで行くわ』

アルミナが言った。

勿論アシュマは、こいつら、言ってる事とやってる事が違うから

な、と思っていたが。

『じゃあ、言ってくる!』

アシユマは最初からウィングですっ飛ばしていた。

ここから、ヌーの都まで約四百キロ、そこから海岸線まで五十キロ、アシユマも飛んだことのない距離である。

だが、念が途切れる心配はなかった。

鬼虎から供給される力が気の役割を果たしてくれるからだ。

ヌーの都が見えてきた。

王宮も見える。

王宮の脇を抜けて海岸線へとやって来た。

後はこのままエハボイ共和国方面へと逆に飛んでやれば良いだけだ。

『こちら本部、先導隊、航行は順調か?』

『こちら先導隊、航行はいたってじゅんちょ……』

『どうした先導隊?』

『何か空に浮かんでやがるな……なんだありや……あれは人だ……ヒト? まさか!』

『どうした先導隊? 何か有ったのか』

『うわあぁっ!! 出た! アシユマだぁ!! 血まみれの悪魔だぁ』

一方こちらはアシユマ。

『ヨディ聞こえるか?』

アシユマは発した。

『はい、聞こえますよアシユマ君』

そうヨディが受けた。

『そちらはどうだ?』

『順調ですよ。アシュマ君のほうは？』

『こつちも見つけたよ。これから殲滅に入る』

『アシュマさま。殲滅だなんていけません。せめて手足を切って、戦闘意欲をそいでください』

再び割って入る、アーチエル。

『弱ったなあ、アーチエル。この数を一人で相手するんだ。それをやっていたら、都を占領されてしまうよ』

空を見ると雲霞の如くわき立つ敵機の集団。

その数およそ六千。

『……それは……仕方有りません。せめて犠牲者は少なく……』
『やってみる。アーチエル。ヨディに変わってくれ』

『はい。はい、ヨディ様』

アーチエルは言って、マイクは再びヨディに戻った。

『じゃあ、アシュマ君、気を付けて』

『分かった』

そう言って通話を終えた。

「さて、どうするか」

『敵はたった一人だ。無視して都へ向かえ』

敵の指揮官はそう言った。

アシュマは、腰を落とし居合いに構え、鯉口を切ると眩い銀色の光が漏れ出した。

そして居合い宜しくこれまた鬼虎を一気に引き抜くと、幾千条の光の条が敵の魔導機兵に伸びて行き魔導機兵を貫いた。

それから爆発を引き起こした。

一振りで敵の約三分の一、二千の魔導機兵を屠って、敵の戦意を挫いた。

敵は反転し逃げるようにして帰って行った。

「流石は万人殺しの鬼虎。すさまじき破壊力かな」

アシュマは一人呟いた。

『ヨディ、敵が逃げていく。数はざっと四千。そちらで対応できる

か？ 無理ならこちらで処理するが？』

『四千ですか。微妙ですな。今、まだ戦っているんですよ。やっと要塞に取り付いたところでね。これから砲台とかを潰そうかなと。だから、今こちらに機兵がこれると、挟み撃ちになって、いやゝな思いをしますね』

「そうか。ではこちらで処理をする」

『すいませんねえ』

実際、ヨディは、今、敵機兵に出てこれると、まずいと思った。要塞の護りが思った以上に堅牢で、責めあぐねていたからである。敵の砲台も、遠距離から近距離までをカバーしており、要塞に取り付いたからと言って油断が出来ず、砲台を一つ一つ潰していくのに手間が掛かりすぎた。

実際、トーガイアとゴハクがいなければ出来ない戦いだった。

また、オルバニアンとアルミナが存在も大きかった。

常に二機一対で行動しており、中距離からオルバニアンがバルカン砲で牽制をして、止めをアルミナの大剣が止めを与えると言うパターンで確実に敵を打ち取って行った。

そのオルバニアンとアルミナの限界タイムが来ようとしていた。

『オルバニアン！ アルミナ！ 限界よ、もう戻って！』

クララテリア、トーガイア管理官が、オルバニアンたちを呼び戻していた。

『ラヴァー』の実際の運用する権利はトーガイア側になっていた。

また実際の整備もトーガイアでしか出来ない。

オルバニアンとアルミナは、いわばトーガイアに出向の形を取っていた。

オルバニアンとアルミナは、トーガイアに収容された。

「お帰りなさい二人とも。少し休んだら？」

「すんませんが、そうさせてもらいます」

「あたしも……」

二人は仮眠室に行くなり爆睡した。

しかし戦闘は依然続いていた。

ヨディは爪を噛んでいた。

アシュマがいない上、オルバニアンと、アルミナと言う決定打を失ってヨディは焦っていた。

今まで、如何にこの三人に甘えてきたかが分かった。

いない者は仕方ない。

手持ちの駒で何とかするしかない。

「エファさん。各機に通達。防御優先を徹底させてください。また功を焦って勝手に飛び出すバ力は厳罰に処すと」

「わかったわ」

それでも、堅牢なこの要塞で、百機程度しか犠牲を出してないのもヨディの指揮の賜物といえよう。

『ヨディ聞こえるか？』

「アシュマ君ですか!？」

『敵の半減に成功した。今からそちらに助勢に行く』

「いやあ、待ってましたよ。エファさん！ 各機に通達さらに防御優先で要塞攻略に当たるべし」

『いや、ヨディ、全機を要塞から撤退させてくれ。一気にケリをつけてやる。』

「ケリですか。分かりました。エファさん全機に通達、各機、敵の反撃に気を付けつつ要塞から撤退。くれぐれも気を付けてと」

「了解したわ」

一方的要塞内では……

「司令！ 敵が撤退を始めています!」

「ふはははは！ さもありなん！ この要塞は別命『貝』と呼ばれるほど堅牢なのだ！ どこぞの外国人の部隊になぞ、落せはせんわ

！」

「司令これからいかがします？」

「ふむ、追撃するにも手駒は無し。それにしても、敵は、何故、急に、撤退等を始めたのだ？ 都を陥落させるはずの部隊はどうしたのだ？」

「司令！」

「何だ、騒々しい」

「上空百五十に人影！」

「人影ぐらいで何を騒々しい……人影？ 魔導機兵ではないのか？」

「いえ、人かと……」

「その人型より、入電！ 降伏勧告です！ 受け入れられぬ時はこの要塞を『破壊』するそうです」

「わはははははっ！ バカかそいつは？ 普通要塞などに『破壊する』と言う表現は使わないだろうに。構わんほうって置け」

「再度、降伏勧告が入電です」

「うるさい奴だ。『馬鹿め』とでも返信してやれ」

「はっ」

アシユマに向かって『馬鹿め』の入電が終わった頃、上空より光の楔が地面を襲った。

それは長く深く地面を抉っていた。

アシユマが鬼虎の真の力に目覚めてからと言うもの、やる事なす事全てが派手だった。

まず規模が大きくなった。

魔導機兵の大群を蹴散らし、今また、要塞を陥落させようとしている。

鬼虎の力の底が見えなかった。

その力の一端を見せられた、要塞司令も、部下のオペレーターたちも皆言葉を失っていた。

「！……先程の人型より入電が……『我が名はアシユマ・アトー。今のは警告である。命が惜しかったら、直ちに武装解除をして、我

々の命に従え。五分だけ待つ』以上です、指令。いかがなさいますか？」

「バカか？ 降伏しかあるまい！ あの、アシュマ・アトーだぞ！ 化け物の。先の戦いでたった一人で幾つもの戦果を上げている、そんな奴に戦いを挑むほうがバカだ」

「本国にはどう説明しますか？ ここが落ちるとなると本国の護りが……」

「本国よりも自分の命だ！！ 降伏勧告を受け入れると伝えろ！ あんな物を見せられては、降伏するしかあるまい」

『……と、言う事だ。ヨデイ。後の事は頼む。これから黒龍に戻る』

アシュマが黒龍号に戻つてくると、アーチエルとアンがゴンドラ下の脇で待ち受けていた。

「お帰りなさいませ。アシュマさま」

アーチエルが声を掛け

「お帰りなさいませ、アシュマ様」

アンがやはり出迎えてくれた。

「ただいま。アーチエル」

アシュマがアーチエルの口に軽くキスをした。

要塞陥落を受けてエハボイ共和国政府はアールヌーに対して降伏勧告を受け入れた。

後は戦後処理となるだけであつたが……

事もあるうちにアールヌーはエドシャン王国に侵攻し始めた。

アールヌーは一体どこまで進行を続ける気なのだろう？

ここはリイナやアベニが血眼になって捜している、知恵のドーム

……。

「今、あそこに脅威が存在する以上、排除しなければなりません。王子。でなければこの緑豊かなこの国は、様々な国に千切られ、犯され、滅んでしまう」

「アングよ。それはもう、最早、正気の沙汰を逸しているぞ」

「王子までなんと言っことを。これは王子の考え方を、矯正せねばなりませんな。さて……どういう方法を採用か……」

「アングよ。どのような考え方にしろ、僕に押し付けるような事をしてみろ。僕はその場で舌を噛むぞ」

「……分かりました、その代わり予知の方はよろしく頼みますよ。」

王子

「アング、お前は滅びるぞ。怒り狂う兵士達の中で。祝福されぬ命の者の手によって」

「その様な予知はいりません。今の予知を訂正しなさい」

「訂正できる予知などあるものかッ！ 僕は事実を述べたに過ぎない……」

「おのれ……多少、予知能力があるからと言って……」

ヨデイの元には指令書が届いていた。

それに基づいて検討する為、主だったメンバーがトーガイアに集まっていた。

そこにはなんとガルマインの姿もそこにあった。

何でも重要な局面には顔を出さずにはおられない性格である。

この戦場にも顔を出していた。

が、この場に顔を出す事はやりすぎかと思われた。

「先の要塞攻略戦ではよう戦った。ワシ抜きでな。今後はノリトレアの部隊はノリトレアが運用をする。構わんな？」

ガルマインが口火を切った

「構いませんとも」

ヨデイが応ずる。

「おぬしがヨデイだな？」

ガルマインが訊く。

「どうも。お初にお目にかかります。ヨデイ・ヨフルに御座います。ガルマイン・デッド殿下。と、言つて実際はお初でもないんですけどね。立ち話もなんなので座つても宜しゅう御座いますか？」

ヨデイはそう言った。

「ワシに向かつて、よう物を言う。気に入った。座るが良い。あとは、アシュマ・アトーか。ようもまあ、悪名高き剣豪に育つたモノよ。のう『BLOODY（血まみれの）』アシュマ」

アシュマに憎まれ口を叩いた。

それに対しアシュマは、鬱陶うっとうしいと言つた所作で、

「言つ事はそれだけか？ お前の戯言に付き合っている暇などない」
アシュマはそう言った。

「そうか。後はアーチエル様に、オルバニアン。それにレディールだつたか？ ……そんな所か」

品定めでもするようにいった。

「まだ、アタシが残つてるッ！！」

声高に言つた者がいた。

「誰だ？ このシヨンベンくさい小娘は？」

ガルマインが眉根を寄せた。

「シヨンベン臭くて悪かつたなっ！ アタシはアルミナ・ラ・シア
バウンティハンター
！ 賞金稼ぎにしてオルバニアン・マグマイヤーの妻だ！」

アルミナが怒りながら言つた。

「分かつた分かつた。そう、がなるな」

ガルマインは辟易とした。

「ガルマイン殿下始めても宜しゅう御座いますか？」

クララテリア管理官が言つた

「宜しいですとも。クララテリア管理官。それにしてもこのトーガ
イアは素晴らしい。規模で言えば、我がエルリナルティを上回る規

模だ。それにこの修理能力……」

「おほん！」

「おっと、失敬」

「それでは始めさせていただきます。まず、運河攻略と軍司令部攻略ですが……」

エドシャン王国には巨大な運河がある。

いくらサイコ・フライヤー全盛の時代だからと言って、海を渡る船も多数ある。

そういう意味で運河は多大な利益をその属する国に与えてきた。だから、エドシャン王国は先ず運河の攻略を考えねばならない。向うも運河を護ってくるだろうが、先の紛争でノーツ連邦、クーロン人民共和国、リスパダハル共和国の三国混成魔導機兵部隊は数を減らし、おそらく数で圧倒できるので問題はない。

寧ろ余剰戦力で軍司令部攻略が出来る。

「……これが今回の概略です。楽なもんです」

クララテリアは言った。

が、ガルマインは

「これだから能天気娘は困る。血液がみんな胸に行って、脳まで届いてないか？」

そう揶揄した。

「なっ、セ、セクハ……」

「セクハラかどうかはこれを見てから言ってもらおう」

ガルマインが胸のポケットから出した物は一枚の写真であった。

「魔導機兵輸送船団？」

オルバニアンは呟いた。

「そうだ。その通り。分かるじゃないかオルバニアン君」

ガルマインに揶揄されて密かにオルバニアンはムツとした。

「この輸送船団はタベ我々のエージェントが捕えた物だ。どれくらいの兵力を積んできたと思うね？」

「しるか！」

「ノーツ連邦千五百リスパダハル共和国千五百。驚くべき事にクローン人民共和国は三千体を用意してきた。流石、人間が資源の国だ。数に物を言わせている」

「あ、あのセクハラ以前に、人権にかかわるような事を、言ってるんですけど」

クララテリアが言った。

「あの国に人権などあるのかね？」

ガルマインは言った。

そして続けて、

「まあ、要するにだ。今現在の我々の戦力に匹敵する物を、引つ張ってきたわけだ。彼等は。そこに現存する兵力を加えれば、敵の兵力は約八千。現在の我々の兵力を上回るわけだ。これに対し我々ノリトレアとしては今回のこの戦、一步引いたところから見物させてもらおうと思っている」

「なっ！」

その場にいる全員が耳を疑った。

「そ……それでは、私達はノリトレアを除いた約四千で戦わねばならないの!？」

ミアネ管理官が言った。

「そうでもしなければ、ノリトレア一千の兵を、尖兵にされる恐れがあるからな。のう、ヨディ殿？ 加えて追うならばアヘイビアいか連合国側も兵を退く」

「そんな！それでは、我が方はたった千の兵力で戦わなければならないのっ!？」

クララテリア管理官が悲鳴を上げた。

「……………」

そしてヨディは沈黙を守った。

「ヨディ、何で黙るんだよ黙ったら『そうだ』って言うのと、同じ意味になっちゃうだろうが！」

オルバニアンがイライラしながら訊いた。

「違う」

ヨデイが呟いた。

「ヨデイ、特務大佐……」

クララテリア管理官が同じく呟いた。

「果たしてそうかな？ ノリトレアの兵共は絆が固い。チームで組ませれば、それなりの成果を出してくれるだろう。おまけにここで兵を削って置けば、戦後処理に有利に働く。国力も削れる。自分の手駒は無傷だしな。そう言う目論見だろう？ ヨデイ殿？」

「違う！！ 見くびるなガルマイン！！ その様な事で兵の選り好みはせん！ 最初の方の話は別にしても、誰がノリトレアの民を無駄に死なすような事を、するものかッ」

「やはり、その、ものの言いようアルス……」

ガルマインが、何か言いかけてきたところに、アシュマの話が被さった。

「安心しろ、ヨデイ、危ないからと言って、後でのうのうとしている兵は、俺が綺麗サッパリ処理してやる。そんなことを命令する上官なら尚更だ。俺が即座に斬ってやる。よもや、そんな士官・将校等居りませぬよなあ。ガルマイン殿」

アシュマは鬼虎の鯉口を切った。

（こやつ本気か！？ まさかこんな所で斬るのか？ 出来まい。こんな上級将校たちがいる前で……さて、ここにはヨデイの派閥しか居らぬではないか）

「まさか、この中でそんなことをする者などいよう筈もない」

ガルマインが言った。

「運用はヨデイ特務大佐に一任して構いませぬな？」

アシュマが念を押す。

「勿論」

「話しはまとまった！ 俺も最前線に出る。後はよろしく頼むぞ、ヨデイ！」

「まだ、まとまってない。お前がまとめたのは、兵の運用までの話

しだ！」

ヨデイがそう言う。

「そ、そうか」

アシユマは小さくなって紅くなった。

「まあまあ、小さくならず、アシユマさまも頑張っていますものね」

アーチエルはそつとアシユマの側に寄った。

「ほう、アーチエル王女といつの間にそんな間柄になった？ アシユマ・アトーよ」

「いつだろうとどんな間柄だろうと、ガルマイン！ お前には関係有りませぬ！ 控えよ！」

アーチエルが手厳しく言った。

「ははっ。これは口が過ぎました。お許しを」

「ところで、敵の軍司令部ってどこにあるの？」

アルミナが言った。

「それはですねえ……」

それから話しは具体的に推移し、運河の攻略、用兵の問題、アシユマをいかにうまく使うか、軍司令部の攻略と話しは進んで行った。その中でアシユマ一人で軍司令部攻略の話が出たとき……、

「それは、あまりにアシユマさまに、頼りすぎだと思います！」

アーチエルが皆に訴えかけた。

が、当のアシユマが、

「オルバニアンとアルミナを連れて行くにしても運用時間に難があるし、魔導機兵を五百機なり、千機なり借り受けたら今度はそちらが苦しくなるう。かといって十機、二十機じゃあ、意味がない。結局俺は一人がやりやすい」

そう言った。

「アシユマさま。折角アシユマさまのためを事を思ってたのに……」

アーチエルは少し気落ちした。

「有難う」

アシユマは謝意を示した。

「ではよろしく頼むよ。諸君」

そう言ってガルマインは消えた。

「……で、今回私は何をすれば良いわけ？」

エファールがヨデイに訊いた。

「司令にも参謀役は必要です……兼秘書……兼雑用係……兼……」

「はいはい。じゃあ、アタシは資料持ってまとめているから。先に黒龍に行っているわよ」

「僕はもう少しこちらで打ち合わせしますから」

「はい、はい」

「だあゝりゝん」

ヨデイを呼ぶ声が聞こえた。

クララテリアである。

すっかりあれ以来、ヨデイの愛人となってしまうた感がある。

「ヨデイ、俺達、帰るけどどうする？」

オルバニアンが訊いてきた。

アルミナも一緒だった。

が、手に手を取る二人を見た途端ぴーんと来た。

「は・はーん、ヨデイ、お前……」

「あ、あのラルバニアンくん？」

ヨデイが何かを言おうとしている。

「精々、エファールには気をつけなよ」

アルミナが言った。

「ま・この件、貸しにしとくから、ヨデイ」

オルバニアンは言って、

「明日の十時に、ここにいれば、いいんですよ？ 管理官」
続けて言った。

「え、ええ」

クララテリアは固まった。

「それじゃあ、愉しんでねえ〜ほほほ〜ははは〜」
アルミナが止めを刺した。

.....。

（やなやつらに見付かったなあ。）

ヨディは思った。

「さあ、クララテリア」

「はい、ヨディ様」

やっと二人の時間は来るのか……！？

「おい、ヨディ」

「ヨディ様」

アシュマとアーチエルだった。

ヨディとクララテリアの二人は轟沈していた。

「何やってんだ？ 二人とも？ ヨディ俺達は先に帰るぞ？」

「はい、どうぞ。ご勝手に……クララテリア……」

「……はい？」

「盛り上がるのは、クララテリアの部屋についてからにしようか」
「そうですわね」

「あら、アシュマ。どう？ ヨディ。まだ打ち合わせ、時間掛りそうだった？」

エファールが訊いてきた。

「打ち合わせ？ ヨディ様、クララ……もがっ！」

アーチエルが何かを言いたげにしていたが、アシュマに口止めを食らってしまった。

「ヨディか。あれは掛りそうだな。四〜六時間と言ったところか」
「そう。じゃあ、先に食べちゃいましょうか……」

エファールが珍しくキッチンに立った。

「お？ 今日はエファールがキッチンに立つぞ？」
オルバニアンが揶揄した。

「あら、愛する人が頑張っているんだもの。私だって頑張らないとね。と、いつでも簡単な物しか出来ないけどね」

（うわあ、こりゃあ、真相を知ったら血の雨が降るぞ……）

オルバニアンはそう思い、思わず身震いした。

で、エファールが、オルバニアンの方を何げに見ると、

「ん？ なに。なんかやましい事でもあるの？ あたしのお仕置きは半端じゃないわよ」

につこりとして言う。

思わずオルバニアンは、また身震いしてしまった。

「あの、お食事でしたら、わたくしが作りましたものを……」
アンが近付いてきてエファールに言った。

「いいの。やらせて。おねがい」

「そこまで言うのでしたら……」

いって、アンは下がった。

エファールは鼻歌交じりに夕食を作っている。

エファールも優しい女なのだと、アシュマは思った。

夜半、ヨデイがそろりそろりと黒龍号に戻ってきた。

「御前様だな」

と、言う声を、ハッチを開ける直前、ヨデイは聞いた。

「だ、誰？ 何男君？」

「何男君って何だよ、ヨデイ」

「なんだ、アシュマ君か」

「エファール、相当カリカリ来てるぞ」

「え、エファールさんが」

「ま、相当お楽しみだったようだから。その報いだな」

「アシュマ君、助けて」

「俺に助けを求めるくらいなら、最初からしなきゃ良いものを」

「おねがい〜！」

「わかった。じゃあ、まず、へたれてないで、しゃんとする事！」

「サー・イエス・サー！！」

「そこまでになれとは……まあいいか。あとはもう一ラウンド頑張るんだな。いや、二〜三ラウンドかな？」

「それじゃあ、アシユマ君は僕に死ねと？」

「死中に活あり。まあ頑張れ、ヨディ」

それでもヨディはエファールの料理を上手い上手いと食べ、エファールと一緒に入浴し、一緒にベッドインした。

そこで浮気防止用に思いつきキスマークをつけられた。

ヨディからすればそれは思いつきり浮気防止でもなんでもなかったが、そこが男の浅知恵。

思いつきり浮気防止（と、言うよりは浮気発見器とも言おうか）になるのである。

作戦当日午前十時、運河を見渡せる丘の上で、戦いの火蓋は切つて落とされた。

味方、魔導機兵、五千五百に対して敵方、魔導機兵、約八千。

こちらは如何に早く、アシユマの攻撃が決まるかが、それが正に勝負の分かれ目であったし、逆に敵側に見れば、如何にこちらと乱戦に持ち込んで、アシユマに技を打たせないかが勝負の分かれ目といえた。

まず、アシユマが居合い腰に落として、鯉口を切った。

眩い光が鯉口から漏れる。

アシユマは一気に、敵魔導機兵に向かって、鬼虎を抜き放った幾条にも伸びる白金色の光。

それらが敵魔導機兵を貫いて爆発させる。

一気に視界が広がった。

これで、約二千の敵が粉碎されていた。
敵は動き始めている。

早く第二回目の攻撃に入らないと……。
その時アシユマは見た。

港湾施設が崩れ去るのを。

迂闊にも敵が巧みに、港湾施設を盾にしているのに、気が付かなかった。

この位置からの鬼虎の力の発現は無理と見た。

『アシユマ君どうしましたか？ 早く第二撃を』
ヨデイが叫ぶ。

「この角度では港湾施設に傷がつく。別の角度から撃つ！」

アシユマは敵が水平方向に並ぶ地点。

そこに先回りしていた。

鬼虎を納刀する。

先ずは右側に鬼虎を振り右側の敵を殲滅しそのまま鬼虎を左に振
つて左側の敵を殲滅。 それでも上下の敵が残ってしまった。

敵の残存勢力約四千。

約半分を殲滅出来たにせよ、最初のごたごたで敵を仕留め損なっ
たのは痛い。

敵四千に対し、味方五千五百。

敵を殲滅するのに、こちらも相当の犠牲を覚悟しなければならな
いだろう。

それでも味方の全滅は有り得ないだろう。

それは、鬼虎の恩恵だ。

アシユマは敵の追撃に入った。

鬼虎で、敵を斬って斬って斬りまくった。

飛びながら腕を、足を、胴体を。

魔導機兵のマシンガンで斉射を食らっても、お構い無しだった。

その機体に鬼虎をつきつけ、そのまま突っ込んだ。

その頃、オルバニアンとアルミナも戦っていた。

周りを敵に囲まれてはいたが……。

周りから、いつマシンガンの斉射があるか分からなかった

アルミナの機体が下に下がった。

同時にオルバニアンは機体の回転をはじめ、三十ミリ念封弾が、バルカン砲の砲身の回転と相余って、凶悪な破壊力を持って敵機を破壊して行った。

オルバニアンは機体の回転を止めた。

「大丈夫かい？　オルバニアン」

「フエ〜〜〜気もちわりい」

「あんなに回ったらそうなるよ。じゃあ、アタシも行かせて貰うよっ！」

アルミナは敵にとっこんで行った。

分厚い装甲とシールドの魔法で護られて、多少の銃撃では、蚊に刺された様なものだった。

そしてその突進力で大剣が振るわれ、敵を断ち斬って行く。

そしてオルバニアンはバルカン砲で狩っていく。

二人の周りの敵がどんどん減っていく。

流石最新型だった。

ところで、味方機を次々落としているという敵機がいるらしい。

コンセプトはアルミナ機に似ているようだ。

どでかい剣と分厚い装甲で味方機をなぎ倒して行ってるらしい。

「行ってみるか？」

と、オルバニアン。

「勿論いくわ」

と、アルミナ。

二機は敵を蹴散らしながら、目指す『敵』を追った。

その『敵』に遭遇した時に、周りに味方機は一機もいなかった。

『オルバニアン、アタシが行かせて貰うよ。アタシ向きの獲物みただい』

『どこの誰だかわかんないけど、その言葉、そっくりそのまま返さ

せてもらうよ』

（おんなー！）

『女だよオルバニアン、向こうの機体のパイロット！』

『そうだな女だな』

『女、女ってうるさいよ！ これでも、あたしにや、ターニヤって立派な名前が、あらあな！』

『早速名乗ってくれて有難うよ！ 生憎、アタシも女でねえ。アルミナ・ラ・シアって言っんだ』

『ほう！ 隻眼のアルミナかい。最近トンと行方知れずになったかと思いきや、こんな所で機兵乗りになつてたあねえ』

『ふゝん、アタシの二つ名を知ってる奴に、お目にかかれるたあ、珍しいやね。しかも、こんな空の上で』

オルバニアンは周りの敵の掃討に入つたようだ。バルカン砲が回りっぱなしだ。

『じゃあ、行くよっ！』

ターニヤが言い、

『応よ！』

アルミナが受けた。

双方フルスロットルで、相手に向かって飛んで行つた。剣を振り上げ、双方剣を降り下げた。

「ばっ！ ばか、真正面から突っ込んでいきやがった」

オルバニアンはアルミナを救う為に自分が犠牲になるのも厭わずに飛び込んで行つた。

（ちくしょう！！ 敵兵を掃討するのに、気を取られ距離を開けすぎた。間に合うか？ 間に合ってくれっ！！）

だが間に合わず、刃は重なり合おうとしていた。

『アルミナー！！』

刃はお互いの剣に重なつた。が、ターニヤの剣は何故か弾き飛ばされ軌道を変えさせられた。

そしてアルミナはターニヤの機体を両断していた。

『合し撃ちだ』

アシュマが呟いていた。

『アシュマ、来てたのか』

オルバニアンが言う。

『敵の密度の多いところを追っていたらな。！……敵はまだいる
ようだな。ここは任せるぞ』

『あ、ああ。』

アルミナが飛んできて、

『今のアシュマ？』

そう訊いた。

『ああ』

『なんだって？』

『ここは任せるってさ』

『タ、ターニヤがやられたぞ！！』

敵の一人が叫んだ

『奴らバケモンだ！ 逃げろ！！』

もう一人叫ぶ敵方の男がいた。

『だとさ。どうするアルミナさん？』

オルバニアンが訊く

『去る者は追わず。残敵の掃討を優先しましょ？』

『賛成だ向うはアシュマが行ったから、こっちに行こう』

『了解』

アシュマはまた、非効率な事に一体、一体、敵機兵を排除して行
った。

アーチエルにおもねって、敵パイロットを殺さない方法を探りな
がら。

『ありゃあ、アシュマの旦那だろ？ 何で旦那は、あんなちまちま
した戦い方をしてるんだよ？』

『そりゃあアーチェルの姉さんが怖いんだろうよ』

『アシュマ君！ アシュマ君の戦果が、思うように上がりません。もう少し何とか上がりませんか？』

ヨディから無線が入った。

『アーチェルに言ってくれ。今のままではこれが精一杯だと』

『矢張りそうだったんですね。良いでしょう、分かりました。説得はこちらで引き受けます。アシュマ君は、いつもの戦闘モードで、頑張ってください』

『分かった。その代わり俺のアーチェルの説得任せたからな。くれぐれも頼んだぞ』

アシュマの動きは急に変わった。

完璧な戦闘モードに突入したのである。

アシュマがそこを通り抜けただけで敵は爆発飛散するのである。

けれども、ちゃんと攻撃はしていてそれが高速なため通り抜けただけで爆発しているように見えるだけだった。

とにかく、枷の取れたアシュマは凄かった。

飛んで斬って飛んで斬って……。

正に鬼気迫るとはこの事か。

『うつ、うわあっ！ アシュマだ！ 血塗られた悪魔だアッ！！』

『うわああっ！！ B L O O D Y アシュマだ』

『戦鬼のアシュマだ！』

どうもインカムに入ってくる敵方の自分の評価はあまり芳しいものではないようだ。

五百機も落とした頃……

『アシュマさま！！』

突然インカムに入ってきた声は、アーチェルだった。

『！！』

『ヨディ様に説得されて、今回は許しますけど、今回限りですからね』

『分かってるよ。苦勞ばかり掛けてすまん。好きだよ。アーチェル』

ル」

『アシユマさま……わ、私もアシユマさまの事を……好いておりま
す』

アーチエルは頬を染めながら会話していた。

『アーチエル様！ そんな会話の為にマイクをお貸ししたのではあ
りません！』

『すつ、すみません！ じゃあ、アシユマさま、また後程』

会話にヨディが入って来たようだ。

『アシユマ君、オルバニアン、アルミナ嬢の働きで、敵の数もどう
やら我等の軍に、圧倒されつつある感じです。これから敵の軍司令
部に、攻撃をかけに行きます。』

『オルバニアンとアルミナは？』

『彼等達今頃グロッキーでしょうね』

『で、俺と、ヨディで攻撃を仕掛けるわけだ』

『いや、仕掛けるのはアシユマ君一人ですよ？』

『俺一人？』

『行けば分かりますよ』

敵の軍司令部は、奇妙な形をしていた。

丁度、瓢箪を逆さにしたような、形なのだ。

だが表面はツルツルのピカピカだった。

『一体何を使えばあんなに下品で趣味の悪いコーティングになるん
だ？』

アシユマがぼやいた。

『アシユマ君おなじみ、魔導石ですよ』

『なに。じゃあ、硬いな』

『あんなに磨かれていては、プラズマキャノンも利かないでしょう。
レールガンも貫通するかどうか』

『で、俺にどうしろと？』

『斬っちゃって下さい』

『軽く斬れとか言うけどなあ』

『早くしないと守備隊なり何なりがやってくるよ……ん』

『分かった斬ってくる』

『こつちで降伏勧告しますから』

「司令、この軍総司令本部に降伏勧告の通信が入りました」

「なんだ？ バカか？ そこいらの、直ぐ破裂する出来の悪い魔導石で、作っているのではないのだぞ？ 最高級の魔導石を精製して作った装甲材だ。貴様等には指一本……」

ズドン！！

大地が揺れる。

大きな揺れだ。

司令部でも大きく揺れた。

その時軍司令部の隣の平地に巨大な亀裂が現れた。まるで楔でも打ち込まれたかのように、長く深く。

「何だあの、長い亀裂は？」

基地総司令が辛うじて聞く。

「さ、さあ、揺れの前にはなかったかと」

副指令と思しき人物が答える

「て、敵の新兵器か？」

基地総司令が言った。

皆、何もいえなかった。

その時、オペレーターが……。

「し、司令、再び降伏勧告です。今は脅しだ。二度目はない。武装解除して無条件降伏をすべし。以上です」

「そんな無条件降伏など……出来様筈が……ここが落ちたら首都まで一直線。直ぐに都など陥落する。……しかし、この司令部にいる三万の命を、やすやすと散らしてよいものか……」

「司令あんな所に人影が！ 亀裂の端です！」

「なんだと！？ 拡大して見れんのか！？」

「ズームしてみますか？」

「してみてください」

「はい」

言ってオペレーターは画面をズームしていく。

ズームしていくに連れて、基地司令は顔面を、蒼白にしてい

く……もう終わった。何もかも」

基地司令は小さく呟いた。

「は？ 今なんと」

副指令は聞き返した。

副指令は司令の話を聞いて愕然とした。

「あれが、近隣諸国をを滅ぼした悪魔…… アシユマ・アトー……！」

「本当に警告だったのだな。エハボイ共和国の要塞を落としたんだ。この司令塔をどうにかするなんて事は、なんでもないことだろうよ。敵の司令に連絡！ 武装解除と無条件降伏直ちに受け入れるとな。又全館に通達………」

「やった、やった、全面降伏！」

ヨデイがはしゃいでいた。

「何がそんなに嬉しいんですか、ヨデイ様？ そんなに戦争に勝つことが、嬉しいんですか！？」

アーチエルは怒り心頭だった。

「何で怒るんですか？ 血が流れないんですよ？」

「国と国民の威厳が傷つきまする！」

「血が流れなきゃ、今度は威厳と来たもんだ。一体どうすりゃ、うちの女王様は納得するのかね？」

「そんなことも分からないのか、ヨデイ？」

「アシユマさま！ お帰りなさい」

「ならアシユマ君は知っていると？」

ヨデイが今度が機嫌を斜めにした。

「初めから戦などしない事さ。な？ アーチエル」

「その通りにございます」

「ヨデイ、もう流石に戦はないだろう？」

「それがその……アシユマさま……」

「まだ有るんですよ実は。今度は流石に一週間の休みを貰いましたけどね。機体のオーバーホールに人間のオーバーホール。やることは目白押しです」

「そうか」

「まだ、アソコにキョウイがが……ある。……はははハイジヨセネバ」

一人アングは呟いていた。

（いかん、アングは常軌を逸し始めている。このままではアングはアールヌーを道連れにこの周辺各国を滅ぼすぞ。何とかせねば。ぼくが自分の能力にこだわりさえしなければいいのか？ いや、例えば能力がなくなつたとしても、アングは僕を人質として使い続けるだろう。所詮、ぼくは籠の中の鳥だ）

「なな……ナンデ……スカナ？ オウジ……ワタシノハウシंगा……キニ……イラナイトデモ？」

「ああ！ 気に入らないとも。何もかも。人を人とも思わぬその倣岸さ。人の上に立つ器ではない！」

「ナンダ……ト？」

「もっと言つて欲しいなら言つてやる！ 貴様は人間として最低の屑だ——！」

「な、なな……ナンダ……と……？」

「いっちょ前に怒るか、アング」

「くくく……マケイヌトオボエネ……」

「クソッ、変なとこだけ冷静になりおつて」
「デモ、おシオキハ、ヒツヨウデスね……」
アングは鞭を持って立ち上がった。

各隊の修理が終わる頃、ゴハクに詰まれてあつた、サケと食料庫が開封された。

そして同時にサーサー・ウィー師とレンヌ・アデュニ第二王子が到着した。

早速レンヌ達は黒龍号を訪れた。

「王子、良いのですか？ こんな所に来て。政治的空白を空けられ
ては、アングの思う壺なのでは？」

レンヌは開口一番、ヨディにそう言われた。

「ははははっ。ヨディさんに、そういわれるとは、思つてなかつた
なあ。どちらにしても王宮はアングの手の者に落ちて帰れませんけ
どね」

「えっ、そんな……レンヌ王子」

「これ、レンヌ王子」

サーサー・ウィーに窘められた。

「そうでした」

レンヌは言い、小声でヨディに

（本当はアルステイン王子なんですよね？）

耳打ちした。

「お、王子！ それは……！！」

「大丈夫ですよ秘密にしておきます」

「ふう」

ヨディは溜息を漏らした。

「あら、レンヌ王子いらっしやい」

「こんばんわ。エファールさん」

「相変わらず可愛いわね。今度お姉さん食べちゃおうかしら？」

「いえ、それは、ちよつと……」

「冗談よ、冗談」

「いらつしゃい。レンヌ王子。楽しんで行つてね」

「はい、アーチェル王女」

「ただのアーチェルで良いですね。王子」

「あの、リイナは……」

「リイナか。リイナはなあ」

「アシユマが言いかけ、その時、後のハッチが開き……」

「ただいまあ」

と、声がした。

「リイナ!？」

レンヌが言った。

「リイナじゃねえよ色ボケ王子」

オルバニアンが言った。

「何ですつてえ! 今の言葉聞き捨てなりません、オルバニアンさん。決闘を申し込みます!」

「なに若い子からかつてんのよ!」

後からぺしつとオルバニアンを叩いて、

「御免なさいね。レンヌ王子」

アルミナが言った。

また、ぷしつ、と音を立てて、後ろのハッチが開いた。

「外では宴会をやつてるようだな。最近、宴会ばかりしてないか?

まあ、この疲れた身体にや、餃子でこう、きゅつとビールでも一杯引つ掛けて……」

「リイナ!」

「!!! 王子……」

「会いたかったよリイナ!!」

「王子……王子、今の話聞いちゃった?」

「ああ、訳の分からない呪文? ギョーザデコーキュットビールデモイッパイヒツカケテ……だっけ? よく覚えられなかったよ。御

免ね？ リイナ」

「うっん、いいの。忘れて。でも王子、会えて嬉しい」

「僕もだよ。リイナ」

そうして二人は抱きあ……わなかった。

「どうしてリイナ？」

「わたし、お風呂入ってくる」

リイナは言った。

そうと決まれば一目散である。着替えを持って風呂に入った。

「あ……」

「大丈夫ですよ、レンヌ王子」ちゃんとして戻ってきますわ。あの子だつてレンヌ王子に『ぞっこん』なんですもの」

エファールが言った。

レンヌがその言葉を聞いて、今日は鼻血こそ出さなかったが、真っ赤になった。

その間にアベニの報告をヨディとアシュマが聴いていた。

「麓と山の中腹には何も御座らんかった。後は山の上の側と頂上だけで御座る」

「そうか、わかった。今日は沢山吞んで、食って、ゆっくり休んでそれから行動を再開してくれ」

「分かり申した……が、若、そんなにゆっくりでよう御座いますので？」

「どうせ次の攻略地はハライン王国だ」

「なるほど、辛う御座いますな」

「ふ。もとより承知の上さ。辛いのは」

黒龍号の宴会が始まった。

リイナがやって来た。珍しく花柄のワンピースだった。

「御免なさい、王子。私、戦闘服（体操着とブルマの事らしい）以外はこんなのしかなくて……」

「うっん、リイナ似合ってるよ、とても」

「ほんと？ 王子？」

「勿論だよ」

「よかったあ」

アシュマは専ら呑む、食う、アーチエル話を聴く。そして時々サースー・ウィーとレンヌと、リイナ話を聴いてやっただ。

食事中レンヌとリイナは盛り上がってついには……

「ぼくたち」

「わたしたち」

「結婚しますー!!」

二人してそう言っただを驚かせた。

「ま、まで。結婚と言っただはもつと慎重にですねえ……」

ヨデイが慌てた。

「まあ、ヨデイ。物事、その場の勢いと言っただもある」

アシュマが言っただ。

気が付くとアシュマの背にはアンが寄り添っていた。少し酔っている様だ。

アシュマがアーチエルの方を見る

アーチエルが柔らかな表情で頷く。

ならばと、アシュマもそのままにして置いた。

ヨデイはエファールに大量の酒を飲ませていた。

その酔っている課程でエファールは面白いほど表情の変化を見せていた。

始めはヨデイをなじる女王様。

次に、ヨデイ私を捨てないで、という泣き上戸。

最後にはどうにでもなれという笑い上戸。

ヨデイによれば、泣き上戸と笑い上戸が、反転する事もあるとか。とにかくエファールはつぶれた。

そしてひっそりとヨデイは黒龍号を出て行っただ。

「おい、今、ヨデイ、出て行っただろ」

アシュマが言っただも、誰も聞きやしない。

アーチエルでさえ笑って、聞いてやしないのだ。
「ま、いいか」

そして、ヨディとクララテリアは密会した。

トーガイアに行きクララの部屋に行き早速、事に及んだ。

（まあ。キスマーク。あの年増ね？）

エファールが付けたキスマークとは丁度反対側にクララはキスマークを付けた

「なにやってるの？ そんなとこ吸って」

「対抗意識」

「そう」

こうして二人の夜は更けた。

砂漠の夜は冷える。

夜明け近くになりその寒さもピークに達する頃、がたがたと震えながら黒龍号に近付く者がいた。

ヨディである。

『事』が思った以上に長引いてしまったのである。

アシュマが起きていて黒龍の外で一人稽古をつけていた。

最近は体術の稽古を取り入れているようだ。

武道の王足るべき何かを、模索しているのか？

そこへヨディが帰ってきた。

「わああっ！ ビックリしたあ」

ヨディは驚いた。

「こつちこそビックリだ。今の今まで、クララテリアの所にいたのか？」

アシュマは言った。

「う・うん」

「呆れた奴だな。さあ、入ろう」

「もしかしてアシユマ君待っていてくれたの？」

「さあな」

しかし、中ではエファールが仁王立ちをしていた。

「あなた？ どこに行ってたの？」

「ど、どこにも？」

「眼が泳いでるわよ。今ならまだ許してあげるわよ？」

「も・森の中を散歩してたんだ」

「あなた。いつもと違うコロンつけているの？ まるで香水の香りだわ？ どう？ 今ならまだ許してあげる」

「な、何もしてないよ？ 僕は」

「そう、悲しいわ。『ヨデイ』じゃあ……これは何！？」

エファールはヨデイの胸をはだけさせた。

「いやん、えっち」

「ふざけないで。……ふ。やっぱりね。これはなに？」

「え？ エファールさんのキスマーク」

「それはこっち！」

反対側の胸をはだけさせた。

「！！！」

「さあ！！ もう許さないわよ！！」

「済まん。御免して。別れるのだけは勘弁して！！」

「なに言っているのよ？ 早くシャワー浴びて、私のブースにいらつしやい！ 私が満足するまで離さないわよ！！」

「や、やだ……殺される。彼女はベッドの上では豹変するんだあ。

助けてアシユマ君！」

「自業自得って奴だろ？ 諦めて死んで来い」

アシユマは冷たく突き放した。

「ひーっ！ 薄情者ひーっ！！」

「良いから早くシャワー浴びろよ」

第六節 知恵のドーム

ハライン王国に進行もせず宴会等を繰り返しているヨディたちに、業を煮やしたアングは、ヨディたちに命令する為、無電を入れてきた。

『ヨディ・ヨフルはいルカ?』

「いません!」

返信したのはアーチエル・アップルトンであった。

勿論、逆探知装置を入れてある。

『おオ。アーチエル・あつぷルとんデはナイカ? どうダ? ワタシのアイジンになるキになった力?』

アーチエルはアングの人間離れした『なり』と言葉におぞましいものを感じていた。

「アシユマさまあ!!」

「何だ騒々しい」

「アングがあ、なんか気持ち悪いんですう」

「どれ」

『わたシのアーチエル・アップルトンカラ、ハなれる!』

「これは何かに取り付かれかかっているな。妄執か何かだな」

「妄執って?」

「何か凝り固まった妄想や執念の残留思念みたいなものさ。スペルファントムを思い出してもらえればよい。多分、知恵のドームの妄執だな」

「あんまり思い出したくありません」

「そうか。そうだったな。すまん」

ちゅっ!

詫びにアーチエルのうなじにキスをした。

「きゃん」

『!!! わたシのアーチエルあつぷルトンニ、テヲだスナ』

「アーチエルは俺のモノだ！ 誰にも何にも渡すつもりはない！！」
「まあ、アシュマさまッ」

そう言ってアーチエルが抱きついて来た。

「で？ アング貴様の要求は何だ言ってみろ」

『ようキュウでハ、ナイ！ めいれイダ！！』

「要求はなんだ？」

『ヨウキュウでハ、ナイ！ めいれイダ！！』

「話しにならん。要求は何だ？」

『ようキュウでハ、ナイ！ めいれイダ！！』

「命令など受け付けん。要求なら『考えてやっても』良い」

『はなシにならん』

「話にならんのはこっちのほうだ。何が將軍だ。これぐらいの交渉
ことも出来ないで。貴様の部下だったものを、心から同情するよ。

お前のお陰で無駄に命を落とされて！」

ピピピピッ！

インカムのヘッドフォンに割り込まれるアラーム音

「ちよつと待て！」

一旦チャンネルを回した。

「やりましたね！ アシュマさま！ 初めて逆探に成功しましたよ」

「まあ、ちよつと待て」

「アーチエルこの座標がどこなのか割り出してくれ」

「はい、アシュマさま……………アシュマさま、分
かりましたが、妙です」

「妙？」

「この座標は空中です。何もありません」

「そうか、妙だな……。後でヨディの判断を、仰ごう」

「はい」

「仕方ない。アングの対応をするか」

「そうですね」

カチッ！

『！』

「待たせた、アング」

『ナにヲしていタ』

「野暮用さ。聞くな！」

『なにヲしていタ！！』

「しょうがない、アーチエルここにおいで」

アーチエルを膝の上に座らせた。

そして、キスをした。

アーチエルは未だ、たどたどしい。

『わたシノ、アーチエる・アップるとンが、けがサレテいク……』

「そういうわけだ。じゃあな、アング大將軍殿」

そう言つてアシュマはスイッチを切つた。

「アシュマさま……もう少し良いですか」

「なにを？」

「……キス」

とろんとした眼で、アーチエルがおねだりをしてきた。

やれやれ、とアシュマは思った。

そこにレンヌ王子とリイナが手を繋いで入ってきた。

エファールも入ってきた。

なにやら艶やかだ。

機嫌も良い。

「らー、らー、さあー今日も張り切って仕事しましょう」

その後からヨディがやつて来た。

「あーああー人生無常だな」

エファールが見ると通信席にアシュマが座っていて、その膝の上にアーチエルが座っている。

そして二人は抱き合っている。

「もう、やーだー二人ともー。朝からここで、ちゅっちゅ、してたんでしょ？」

エファールが艶っぽく訊く。

「ああ」

「ええ」

「あら？ そうなの？ つまんない答えねえ」

「そうだ、アングの座標、手に入れたがな」

アシュマがそう言った。

「うそ！」

エファールが驚き、

「ホントですか」

ヨデイが驚愕した。

「一応データとして残しといたから。でも使えないんじゃないかなあ？ 場所は空とか言ってたからなあ」

アシュマがぼやいた。

「空……ねえ……」

ヨデイが呟く。

「若、そろそろ行つて来るで御座る」

アベニが言った。

「ん。気をつけて行つて来て下さい」

ヨデイが応えた。

「レンヌ王子、わたし、行つて来る。必ず兄君のディーヌ王子を助け出してみせる！」

そうリイナが言った。

「有難う。リイナ。でも、無理をしないで。ぼくはサースー・ウィー師の庵に戻るよ」

「じゃあ、言ってくる」

言つて、リイナはレンヌの頬にキスをした。

「あっ」

と、言つて驚いたレンヌだったが、レンヌもリイナの頬にキスをした。

実は周りで見ていた大人たちは口をあぐりさせてそれを見ていた。

その後、アングからまた連絡が入り、ひと悶着あった後、結局進軍する事になった。

次の目標はハライン王国である。

こちらの国は皆建国が古く、レキシタニア程ではないにしろ、国としての権威は高かった。

言わば神話の時代に生まれた国々である。

とくにハライン王国はその中でも歴史が古く、決して侵してはならない禁忌めいたものがあつた。

それがこの部隊に進軍を躊躇させる理由だった

兵士の中には戦いを拒むモノさえいた。

だがアングはただ進軍を命じるだけだ。

段々とアング離反組が現れ始めた……。

ハライン王国には高い丘陵地帯に存在する高精密度射撃の超長射程砲郡があつた。

それは十数人の男がイメージスキャナで精密射撃を行っていた。

威力は魔導砲並み。

精密さはミリ単位。

正に虎の子超長射程砲郡であつた。

「……と、言うわけで今回の先陣はアシュマ君一人をお願いします」
ヨデイが発表した。

「そんな！ 相手は魔導砲みたいな奴なんでしょ！？ 冗談じゃないわ！ 私のアシュマさまに傷一つ、つけさせてなるものですか！
！ アシュマさま、駄目ですよ、そんな仕事引き受けちゃ！」

アーチエルは叫んでいた。

「もう引き受けた」

それに対し、アシュマは事も無げに言っただけだ。

「アシュマさまっ!!」

アーチエルはさらに叫んだ。

「アシュマさまはどうしてそう、危うい橋ばかり渡るうとするの！
？ そんなことは止めて下さいまし!!」

「アーチエル、俺しか居ないんだ。わかっておくれ」

「嫌よっ！ 分からないわっ」

アーチエルは走ってブリッジから出て行った。

皆が

「アーチエル！」

と、言っただけを立ちかけた。

それをエファールが手で制した。

「こういう役で私の役でしょ。まかして」

そう言っただけでブリッジを出て行った。

そしてエファールが廊下に出てクローゼットを通り過ぎベッドプ
ースまでやって来た。

アーチエルのベッドプースで、アーチエルは泣いていた。

「アーチエル、大丈夫？」

「エファールさん…… アシュマさまが何でもできるからって、危な
い事はみんなアシュマさまに任せて…… みんな卑怯です……」

「そうね。確かに卑怯だね。それは認める。でもアシュマ一人の力
のお陰で何千と言う将兵の命が助かるのよ？」

「それはアシュマさま一人の犠牲でって事ですか？」

「そうじゃないわ」

「そうじゃないですか！ アシュマさま一人の命と、全将兵何千人
かの命を天秤にかけて…… 皆でよってたかって、アシュマさまの命
を翻弄して。アシュマさまの敵は誰？ 七賢人？ それとも私達？

…… 私もう嫌…… そんなの見たくない」

「…………… 負けたわ。貴女の方が正論だね。だからと言って、これ

はもう発動された作戦なの。もう誰にも止めようがないわ。貴女がここで泣いていても、アシュマは出撃していくのよ」

「そ……そんな……！ 酷いです……！ 理不尽すぎます……！」

「もう、遅いわ。私達に出来る事と云ったら、如何にアシュマが無事に帰ってこれるようバックアップするか……それだけなのよ。それが分かったのなら、あなたはあなたの仕事をなさい。それがいやなら、ここで泣いていなさい」

「……………」

「私はもう行くわ。アーチエル、貴女はアシュマに挨拶をしなくて良いの？ 今生の別れになるかもしれないよ？」

「！ ア……アシュマさまっ……！」

アーチエルは急ぎブリッジに戻っていった。

ブリッジに戻ってきてアシュマの元へ戻ってきた。

「アーチエル。何を言われてきた？」

アシュマが問うた。

「どんなに戦争が理不尽で、止め様のないものがあるっていわれても、それでもわたしは納得できません。わたし、やっぱりアシュマさまを行かせたくありません！」

アーチエルが、自身の正直な気持ちを吐露した。

「でも俺が行かなければならない事は、分かったね？」

「……………」

「今度の戦争は俺も納得できない物もあるし、はらわたが煮えくり返る想いもしている。多分限界を超えたら反乱だな」

「反乱？」

「そう、反乱だよ。アングへのね。まあ、それはおいおい話そう。

そろそろ出撃だ」

「アシュマさま……ご武運を」

「うむ。俺にはその言葉が似合うようだ。言ってくる」

「言ってらっしゃいまし」

アシュマが、ゴンドラに乗った。

「ヨディ、頼む」

「ほいきた」

ヨディがゴンドラの昇降ボタンを押す。
アシュマがゴンドラと共に外へ出た。

「ゴンドラそうですね。人が乗っているみたいです」

「ここから撃てるか？」

「射程外ですが、それなりに効果が期待できるでしょう」

「では、やってみてくれ」

「はっ」

ここはハライン王国の超長距離砲の砲座の一つである。
作られて四半世紀。

それより数えて一度もここを突破できた者はいない。

その砲口よりプラズマの砲弾を、アシュマ目掛けて発射しようとしていた。

その時鬼虎の鯉口がカチャリ、と、ひとりでに切られた。

「砲台は見えないぞ？ それでも攻撃はしてくると思うのか？ 鬼虎よ」

「撃ッ」

「ヨディ、一応警告しておく。敵の攻撃が来る」
「へ？」

遠距離からの攻撃で、拡散されたプラズマが、鬼虎の念導境界面で、バチバチと音を立てる。

『うわっ、わっ！！』

ヨディが叫ぶ。

「ヨディ、黒龍はもっと下がったほうが良いな。じゃあ、俺は行く」
アシュマはそう言った。

『アシュマさま、お気をつけて』

アーチエルが言う。

「わかった。行ってくる。帰りを待っててくれ。アーチエル」
『はい』

「人？ 人型の何かがこちらに飛んできますね。人型……人間だあれは……！」

「何だと！？ 人だと！？ まさか……」

上官と思しき人は自分のスコープを砲座のスコープに端末をジャックインし、視界を共有した。

「あ、あれは……」

上官は声を震わせた。

そしてマイクに向かって叫んだ

「全砲門開け！ 飛来してくる人型に照準あわせ！ アシユマだ！ 血まみれの悪魔、アシユマだ！！ いいか！ 必ず仕留めるぞ！ 奴一人の為に千単位で人が死ぬ！ それだけは避けねばならない！ 各砲門、発射準備できた所から撃ち方はじめ！」

早速第一波がやって来た。

狙いは非常に正確だ。

どれも真芯で当ててくる。

圧力もなかなか相当のものがある。

が……

「言つたろ？ 超新星爆発までなら耐えられると……おっと、おたくらには言っていないか」

なにやらぶつぶつ言って猛スピードで砲身に向かって行った。

鼻歌交じりで。

「アシユマ、なんか鼻歌交じりでやってるわよ。人がこんなに心配してるのに」

エファールには無線が筒抜けだった。

「もう！ アシユマさまったら！ もうキスさせてあげない！」

アーチエルが怒りを顕にした。

アシユマは砲身第一門目までたどり着き、鬼虎秘剣・物干し竿をつかった。

十メートルほどの刀身が六メートル程の砲身を切り裂いてゆく。続いて次の砲門へとアシユマは飛翔していく。

「第十番砲塔沈黙」

「第七番砲塔音信途絶」

「第十二番砲塔大破」

「第十一番砲塔沈黙」

「第五番砲塔……」

砲門がどんどん潰されていく……。

「残っている砲門は後何門か!？」

「本砲門のみであります」

「敵接近!」

「どこか?」

「正面であります!!」

「馬鹿め。横合いから来れば良いモノを、わざわざ方面から来るとはな。この砲座群の中でも、最大口径を誇るこの零番砲座に向かって、真正面から来るとは、よほどのバカか、それとも……」

「出力最大!」

「出力臨界へ!」

「よし。発射準備!!……撃ッ!!」

轟音と共に巨大なプラズマキャノンの、砲弾は発射された。

アシユマは、そのプラズマのビームの直撃を、もろに受けた。

だがそのエネルギーの束は、アシユマに鬼虎の念導境界面で光に変換され、雷光となって鬼虎の本身に吸収されて行った。

プラズマの奔流の中を飛び回る

念導境界面で本身に吸収されなかったゴミのようなものが、ちりちりとはじける

そろそろプラズマの滝を抜けるだろう。

だが、その、プラズマの滝の向う側では、何もなかった。

ただ、巨大な砲口があるだけだった。

アシュマは砲身に沿って飛び、砲身の根元で、止まって浮かんだ。そして長く光る白銀の刀身で、砲身をまるでチーズでも斬るように、斬り裂いた。

刀身は元の長さに収まった。

護衛用の副砲塔が、アシュマを攻撃してきたが、先程の主砲の攻撃に比べれば、焼け石に水だった。

だが一応仕事なので、副砲塔を潰しておいた。

副砲塔といえども、一応武装されているものである。

砲口も四十センチ、レールガンだった。

後は、主力本体が首都占拠まで、何とかしてくれるだろう。

自軍に、権威ある国に、敬意を払うような対応をしてもらおう、アシュマは切に願った。

兎にも角にも、アシュマは黒龍号に戻ってきた。

見るとアーチエルが、よくぞ無事と言うような顔つきで、ゴンドラが降りてくるのを待っていた。

「アシュマさまお帰りなさいませ」

アーチエルが唇に軽くキス。

「ほら、大丈夫だったろう？」

アシュマが言った。

「大丈夫云々の話ではありませんせぬ。わたくしは今回の作戦の、企画立案に対して、問題があるというのです。危険な事は、全てアシュマさまに任せておけばよい。大量の敵を退けるにはアシュマさまに任せておけばよい。なんでもアシュマさま、アシュマさま、アシュマさま、アシュマさまは機械ではありませんせぬ！……うっ、うえっ、うっ……」

アーチエルは感極まったのか泣き出してしまった。

「アーチエル、向うで話そう」

「うつ、うつ、うつ」

艇内では、アーチエルの短い嗚咽の音が、響き渡っていた。

「アーチエル様どうなさったんですか？ アシユマさまに抱えられて……」

アンが、血相を変えて、ブリッジに飛び込んできた。

「自我と軍隊式の集団の矛盾って奴です。自己と集団のありようって奴で、悩んでしまったんですよ。お姫様は」

ヨディはそう言った。

「そうでしょうか？ アタシには今回圧倒的に、アーチエルのほうが、正しいと思いますけれど？」

「ところがそうじゃないのさ。被害最小。効果最大。これがどうやらお偉いさんの考える事でね…… っつてもお偉いさんはアングー人だけだね。これで王子が人質になってなきゃあ……」

「その理屈変です。まるでアシユマ様は死んでも良いけど、王子は駄目って聞こえます」

「あー、もう。どうしてこう、君達レキシタニアの人たちはもう」

「あ！ アーチエル様の仰りたい事が、分かりました」

「なに？」

「全体に押し潰される個の、大多数による少数派が押し潰されていく、そんな様が許せないのではないのでしょうか？」

「そんなことを言ったら、政治の世界では当たり……」

「どうなさいました？ ヨディ様？」

「……ヨディ……」

………

（父上！ 納得いきません！ それでは少数派の一族が済む所を失われてしまいます！ 絶対多数の想いだけが民の為になるとは思えませぬ。数少ない民にも明かりを与えてこそ本当の民の為になる政ではないでしょうか？ 父上！）
まつりごと

.....

「……ヨディ……」

「いかがしました、ヨディ様」

アンが訊いた。

「いや、昔、似た様な青臭い事を言っていた奴を、思い出していたのさ」

ヨディはそう答えていた

「それでその方は、どうなさったので？」

「世俗の垢にまみれちまったさ。もうそいつは見る影もない」

「……………」

「彼女……アーチエル様は偉いよ」

（本当に偉いよ。僕がなくしてしまったものをまだしっかりと握って離さない）

「危ない事、汚い事、損な事、全部アシュマさまに被せて、自分は安全な所からのうのうと高みの見物。許せません」

「でもアングに、ディーヌ王子を人質に取られている。でなければあいつの事など、いの一にぶん殴りに行くだろうな。おっと、それだとアングが死んじゃう」

「アシュマさまってそんなに強いんですか？」

「達人級って訳じゃないけどね」

「まあ、アシュマさまだったら。うふふふ……はっ！ こんな冗談話で私を陥れようたって……」

「冗談話も何も普通に会話しているだけじゃあないか？」

「そ・そうでしたわね……じゃあ、矢張り原点に戻って、ディーヌ王子を助けなければ、ならないのですね？」

「そう。そうでなければ戦禍は広がる。戦禍は長引く」

「じゃあ、それまでは我慢しなければいけないのね」

「それに何でもかんでも俺にお鉢がまわってくるって事もないよ」

「信じて良いのね」

「信じて良いよ」

「分かりました」

アシュマとアーチエルは口を重ねた。

それは優しいキスだった。

次の攻略戦はツハーイ共和国。

既に市街は一部分だけを残して明け渡した。

残った一部分と言うのは……

その、残った一部分と言うのは、国会議事堂だった。

そこにツハーイ軍は陣を張った。

ノーツ連邦、クーロン人民共和国、リスパダハル共和国、合わせて約二千五百の魔導機兵。

それにツハーイ共和国の魔導機兵、旧式ながら、千体。

占めて三千五百機の魔導機兵団がツハーイ国会議事堂を護っていた。

国会議事堂には有志で募った、国会議員、職員合わせて千五百名が残っていた。

これは、敵の攻撃を躊躇させる、人間の盾の役目を果たしていた。対するは各国連合軍。

魔導機兵は各国あわせて四千五百。

ヨディは頭を悩ませた。

中にいる、有志の国会議員に少しでも傷でも付こうものなら、それだけで国際問題になりかねないと思ったからだ。

よって、攻撃方法は限られてくる。

その上相手は、背水の陣だ。

激しい攻撃が、予想される。

結局は正攻法で行くしかなかった。

かくして決戦の火蓋は切られた。
総力戦になった。

ツハーイ共和国の旧型の機兵、これが又悔りがたかった。

旧型のくせに、意外と手ごわい。

下手をすると、こちらが危ない。

事実十何機か、こちらのが落とされている。

そしてアシュマも戦っていた。

電光石火の働きを見せる、アシュマ。

敵機兵を次々と落として行った。

その時、アシュマは異様な気配に囲まれた。

人間……人型約十人に囲まれた。

どうやら飛行ユニットを、装備しているらしい。

勿論アシュマは、関知しないが。

「アシュマ・アトーだな？」

「何だ貴様等？ 俺に用なら後にしてくれ。今俺は忙しい」

と、アシュマは言った。

「我らは七賢人のマシンナリービーイング。俺はゲール。どうだ、七賢人の名を聞いたんだ。戦わざるを得まい？」

「関係ないな。そこをどけ」

「そうか、じゃあ、こう言うのはどうだ？ お前を殺してアーチェルを犯す」

これで、ゲールは精神的優位に立ったと思った。

「くつくつくつく……」

アシュマは声を殺して笑った。

「何がおかしい」

「機械人形のくせをして、お前にそんな機能がついているとはな。トンだお笑い種だ。バイブレーション機能でもついているのか？」

「言っ たな！！ この……」

「まっ て」

女性型マシンナリービーイングが止めた。

「彼、貴方を挑発しているわ」

「なに？ ふ、ふはははは。『どけ』と言っておいて挑発するのか。矛盾した奴だ」

「大きなお世話だ」

「じゃあ、自己紹介と行こうじゃないか。さっきも自己紹介したと思うが俺はゲーレ。特技は……これと言ってないな。彼女はラナリア。特技は秘密……」

「テレパシストだな？」

「……よく分かったな。そのとおりだ。彼はオイーダ。お前の鋭いツメを見せてやれ！」

「ききいいっ！」

「ちいっ！」

アシュマは鬼虎で巨大な爪をいなした。

オイーダが大きな爪で、アシュマを攻撃してきた。

「ハイネ。牙だ！ お前の何でも噛み千切る牙を見せてやれ！」

犬頭のハイネは、

「がるるうっ！！」

と、アシュマを威嚇する。

そして、アシュマ目掛けて突進してきた。

「ち！」

アシュマはこれを寸余で交わした。

どうやら自己紹介が巧みな連携攻撃になっているようだ。

「へーム。お前の腕を見せてやれ。ドリルだ！」

へームは巨大な魔導石製の前腕で攻撃してきた。

「……………」

キュイイイイイ！！

巨大なドリルがアシュマを襲う。

「くそっ！」

ガリガリガリッ！！

アシユマは鬼虎でドリルを斬り割った。

「さがれ！　へーム！　お次はフィサ。いけっ！」

へームの口が、がばつと開いて量子ビーム砲が現れた。

そして発射されるビーム砲。

しかしその攻撃は鬼虎の念導境界面で変換されてしまった。

「その攻撃は、俺には通用しないぞ？」

「くそっ！」

ゲーレは悪態をついた。

「オーナ。お前の色香と鞭捌きを見せてやれ」

現れたのは殆ど全裸で、褐色の肌を持ち、完璧なボディラインをもつ、魅惑の眼を持った絶世の美女だった。

アシユマは頭を振った。

アシユマはこの女が幻惑攻撃をしてきているのを理解していたが目を離せなかった。

（そうだ。いつその事、眼を瞑ってしまおう）

そうアシユマは思った。

「何をしている」

ゲーレは理解に苦しむと言った表情でアシユマを見た。

「オーナ！　お前の鞭を見せてやれ」

「わかったわ」

オーナの鞭がひゅっ！　と唸る。

鞭の軌道は眼を見開いていても見切るのが難しいと言われている。だが、アシユマはそれを見切った。

その上、鞭を切り飛ばした。

その時、鼻に香る何かを嗅いだ。

「匂い……か」

アシユマは念導境界面を厚くした
そして眼を見開いた。

「その女の攻撃見切った！」

「おのれ、アシュマめ！ エゲレ！ お前の自慢の声を聞かせてやれ！」

エゲレと呼ばれたマシンナリービーイングは口を大きく開け超音波を発した。

この超音波、常人には聞こえなくとも、アシュマには聞こえた。

「ぐっ！ かっ！」

「苦しいか。常人以上に鋭敏な感覚器官を持つとつらいよなあ。特にこの音域は」

アシュマは段々と崩れるように膝を付く

「かはあっ！ ね、念導境界面を……」

アシュマは、苦しんでいたかと思うと、急にけろっとしてすくと立ち上がった。

「なんだ？ どうした？」

ゲーレは、何が起こったのか、わからなかった。

アシュマは、念導境界面を二枚構造にし、間を真空にした。

暫くするとインカムに、ゲーレからの無線が届いた。

『何をどうしたのかは分かんが、エゲレの声も破ったか。ならば次はタロスお前だ！ お前の怪力を見せてやれ！』

「があああああっ！！！」

（怪力か。避けてしまえば問題ない）

アシュマは思ったが、アシュマの動きに反応して、意外な俊敏さに驚く。

『怪力だけかと思ったか？ 甘いな。オドロ、行けッ！』

オドロと呼ばれたマシンナリービーイングはちよつと変り種で、トカゲのなりをしていた。

そして全身には魔導石を精製したような鱗が張り付いていた。

コイツは尻尾で攻撃してきた。

危うくこれをかわす。

しかしこれ程までのなりをして、尻尾攻撃だけとはなんとも寂し

い。コイツにはまだ隠し玉がありそうだとふんだ。

『よし奴は大分戸惑っているみたいだぞ。ルル、行けッ!』

ルルと、呼ばれたマシンナリービーイングは、人並みはずれた速さで襲ってきた。

アシュマは素早く上へ逃れて難無きを得た。

（くっ!! コイツの武器はスピードか!! しかもブースト並みと来ている。一番厄介な敵だ。）

アシュマは、念導境界面の二重化を解いた。

敵の気配が読みにくいからである。

マシンナリービーイングたちは、アシュマについて宙を昇ってきた。

「どうしたアシュマ。我々の力に恐れをなして逃げ腰か?」
ゲーレが言った。

「方法さえこだわらなければ、お前たちを倒すのは容易い」
アシュマが言い切った。

「なに?」

「苦戦しているようだなイレギュラーナンバー。助太刀が必要か?」
聞き覚えのある声が上がった。

アシュマが上を向くとそこには……

「エディアード・ウルフィ!」

「借りを返しに来た」

「借り? いつのだ」

「つい先日、砂漠にて、ブースト開けを見逃された」

「その考え方は、もう止めろ」

「敵が来るぞ!」

「ウルフィ! ブーストは使うな。敵の数が多い」

「了解だ」

「たかが、裏切り者のイレギュラーナンバーが増えただけだ! 数に頼んで、押し潰してしまえ!」

ゲーレは言った。

しかしゲーレの言葉よりも早くアシユマ達は動いた。

アシユマはオイーダの方へ行き鬼虎を上段に大きく振りかぶって
そして振り下ろした。

オイーダはその爪で防御を試みた。

が、オイーダはその爪ごと頭の先から股まで斬り割られていた。

「オイーダー!!」

ゲーレが叫んだ。

続いてアシユマが獲物に狙ったのはハイネだった。

犬頭のハイネはアシユマの鬼虎をくわえに来た。

どうやらその自慢の歯で鬼虎を噛み砕こうとでもしたのだろう。

アシユマも鬼虎を水平に走らせた。

ハイネが鬼虎を噛み砕きに来た。

見事ハイネは鬼虎をくわえた。

が、鬼虎はそのままハイネの牙を斬りながら口の部分を抜け、ハ
イネの頭蓋骨を水平に両断していた。

「ハイネ!!」

そして続いてエディアードが、オーナを串刺しにしていた。

「男をその色香で惑わす毒婦め！ 我が剣、思い知ったか！」

「ああ、すごいわあ、その大きな剣で貫かれて……」

「まだ言うかッ!!」

エディアードがその大剣を一気に下まできり割った。

二人は背中合わせになった。

「ウルフィ、よくあの女に惑わされなかったな」

アシユマが言った。

「くくく、僕にはキャサフローレンがいるのに誘惑しようとするか
らだよ。だからお仕置きしてやったのさ。僕のこの太い剣でね。く
くく……」

……思い切り惑わされていた。

「くそ三人が死亡して一人が戦闘不能になるとは」

ゲーレが言った。

「今日のところは引いたほうが良いわ、ゲーレ」

「よし、今日のところは引き上げた。運がよかったな。アシュマ・アトー！そのもう一人のイレギュラーナンバーがいて」

「……………」

アシュマは、無言を通した。

「では、又の機会に、アシュマ・アトー」

七賢人どものマシンナリービーイングは去った。

「ウルフィ、お前はどうする？」

「お前に決闘を申し込む。アシュマ・アトー」

「何故だ？ 何の必要がある？ そんな用なら俺は御免蒙る。暇人ではないのでな」

「お前に我が野望を挫かれた」

「そんな物言いは止める。お前には似合わん。野望だの、挫かれただの、そんな事にこだわるな！」

『アシュマ君いますかー？』

ヨディから連絡が入った。

「ご覧の通り用事が出来た。俺にはさっきのお前の方が、本当のお前だと思う」

「さっきの俺？」

「俺に助太刀を申し込んだ時のお前だ。あれは頼もしかったぞ」
「……………」

「俺はもう行く。お前も気をつけて帰れ。目立つなりだ。機兵の良い餌食だ。死ぬなよ」

「あ、ああ……………」

アシュマは去り、エディアードはそこに残った。

「ヨディ、すまない何だ？」

『何だじゃありませんよ。アシュマ君が、戦闘から離れたお陰で、戦闘係数二十五パーセントも、下がっちゃったんですからね。何してたんですか？』

「七賢人のマシンナリービーイングのもと、戦っていた」

『え？七賢人のマシンナリービーイング？』

「詳細は帰ってから報告する」

『あ、ええ。分かりました。アシュマ君は、そのまま戦闘に復帰してください』

「わかった」

戦いは一進一退の攻防を見せていた。

敵も味方も順当に数を減らして行った。

アシュマが序盤動けなかったことも響いた。

戦闘の最初で、エース級がいないと、こう言うことになると思う、分かりやすい一例だった。

また、敵機が危なくなると国会議事堂を盾にするのも痛かった。

そうして味方機たちが、窮地に追い込まれた時……。

『連合国側の味方機に告げる。これから敵方に向けて最終攻撃を開始する。すぐさま国会議事堂より離れられたし』

「ガルマインの声だ」

ヨディは言った。

『何を考えているんだ、ガルマイン！！　僕はそんな命令を出した覚えはないぞ！？』

『それはそうでしょうとも。今、命令を言い渡しているのはワシだからな』

『どういうことだ？』

『お前はクビになったんだ。指揮権は今からワシに移る。分かったら、早くどこかへ！　この青二才！！』

この通信も敵方に聞こえていたらしく、皆、警戒して国会議事堂を後ろにひかえさせ、盾とした。

このときオロからヨディへ無線が入った。

『どうしたんだ？　今、アング殿から一方的に、解雇の通知を受け取ったぞ？』

「知りませんよ！！　今、命令を出しているのは、ガルマインですからね！　僕はもう蚊帳の外ですよ！！」

『なんだと？ なんとかならんのか！？』

「むりですね」

『この役立たず！！』

「なんとでもお言いなさい！」

（ガルマインは何をするつもりなんだ！？）

太陽を背にガルマインは空母エルリナルティから新たに魔導機兵約二千四百機を発進させた。

皆、背にはミサイルを左右に六発ずつ合計十二発を、積んで。

敵方は、まさかあれで攻撃はすまいと思っていた。

それに対して、ガルマイン側の魔導機兵は、何の前触れもなくいきなりミサイルで攻撃してきた。

ミサイル合計二万八千八百発。

それを食らって敵魔導機兵は全滅した。

国会議事堂と共に。

「酷い！ あれが人間のやること？ 一方的な虐殺じゃない！！」

アーチエルは涙を浮かべながらガルマインを非難していた。

「ガルマインめ……まだ、あんな隠し玉を持っていたとは」

ヨディは呟いていた。

「そのガルマインから通信が入ってるわよ」

「よし、言ってやる！！」

ヨディは息巻いた。

「ガルマイン！！ 今のはなんだ！！」

『今のはなんだと問われても今までの行動は、全て貴殿が行った行動ではないか』

「なっ??」

『貴殿は作戦途中で、司令官の任を解かれる。それを受けて自暴自棄となった貴殿は、強引に我が国の魔導機兵に出撃を命令。理由の知らない末端の兵は、それが正式な命令と思い込みミサイル十二発をつんで出撃。そして今回のような暴挙に及んだ。そうである？』

ヨディ・ヨフル殿？』

「な？　なんだと？？」

『魔導機兵各機に告ぐ。反逆者ヨディ・ヨフルを捕えよ。生死は問わん。捕えた者、殺害した者には特別報奨金をさげわたす。行けッ！！』

「待てッ！！　そういう事なら、このアシュマ・アトー、敢えてヨディ・ヨフルを擁護する！　これからかかってくる者は全て敵とみなし、そう対処するから覚悟しろッ！！」

（ち！　そういえばこやつが残っておったか。いつも我が覇道を阻みおつて）

ガルマインは心の中で舌打ちをした。

「ええい！　何をしている！　早く奴等を捕えんか！」

幾らガルマインが叫んでも動こうとする者はいなかった。皆、アシュマを恐れているのである。

そして又、ヨディを信頼しているのであり、ガルマインを信頼していなかった。

『俺、そっち側に付くよ』

一人の兵士が言った。

その兵士は素早く隊列から抜けると、黒龍号の方へ近付いてきた。アシュマは念のため黒龍号の上に立った。

『撃たないでくれよ……頼む……』

一機目が黒龍号の近くに降り立った。

『信用してくれて有難うよ』

『俺も行くよ』と二機目が飛び出してきた

『俺も』

『俺も』

ガルマイン側から抜け出してくる者は後を絶たなかった。

『俺も今回の作戦には納得がいかなかったんだ。俺も仲間に加えてくれ』

『何をしておる！　裏切り者だぞ！　撃て！　撃たんか！』

ガルマインが幾ら言っても、誰も仲間を打つものはいないし、続

々と黒龍号に合流した。

「アーチエル、シールド五十枚掛けだ。ちょっと見てくる」

アシュマは言った。

『はい』

「オルバニアン、アルミナ、お前等はトーガイアに戻れ」

『へっ、やだね。こんな面白い見世物、ちよつとやそつとじゃ、見られやしない。最後までつき合わせてもらうわ』

『アタシも同じだよ最後まで見させておくれ』

オルバニアンとアルミナがそれぞれ言った。

「とつくに限界超えてるだろうに、強情な奴等だ」

その後も続々と仲間が増え、ガルマイン側の兵は減って行ったが、アシュマの眼鏡に適わない機もいて、その機体は武装解除をさせられた後、一箇所に集められた。

アシュマが気の色を診たのだ。

これで彼我戦力はガルマイン側魔導機兵八百、空母一それに対してこちらは魔導機兵二千二百。

戦力差は明らかにこちらの方が上だった。

「アーチエル、ガルマインを殺して良いか？」

『駄目よ。アシュマさま。殺しては駄目』

「何故だ？ 百害あつて一利なしだぞ」

『国際法廷に引き出して、その罪を白日の下に晒すの。あくまで法の下で裁くのよ』

「その、国際法廷だつてどこまで信用できるか……」

『とにかく殺しては駄目』

その時空母から、高速で飛び出す、何かが見えた。

『アシュマさま、あれ……』

「ガルマインだな」

『逃げられてしまいましたね』

ヨデイが残念そうに言う。

『御免なさい、わたしがグズグズ言っていたから』

アーチエルは自分を責めた

「アーチエルのせいじゃない」

アシュマが慰める。

『それにしても逃げ足だけは超一流ですね』

変な所だけ感心するヨディだった。

「一応降伏勧告だけしておくか？」

『そうですね』

「じゃあ、ヨディ、頼む」

『じゃあ……えーノリトレアの将兵たちに告げる。貴方方の親分、ガルマインは逃げちゃいました。貴方方を、アシュマ氏の鬼虎が、狙っています。絶対外れません。痛いです。大人しく諦めて、投降しちゃってください。三十分だけ、猶予を与えます。ゆっくり考えちゃってください』

「ヨディに降伏勧告やらせるんじゃないかった」

アシュマが言う。

『同感……。』

エファールが言った。

しかし……。

空母エルリナルティではかなり混乱をしていた。

投降を叫ぶ者、徹底抗戦を叫ぶ者、どちらの組にも属さない者。

意見の統一がなされなかった。

やがて、艦内を二つに割って、戦闘が開始され、外では残された

魔導機兵同士で、戦闘が始まった。

そしてアシュマが……

「止めるッ！！ 見苦しい！！」

と、叫んだ。

叫び声は、アシュマの念導境界面で増幅され、大きく響いた。

「それでも、もののふ武士かッ！！ 潔くしろッ！！」

エルリナルティ側ではこの一言で戦闘を止めた。

三十分後、エルリナルティは武装解除をして、投降した。

十数分後、どこをどう聞いてきたのか、アングから連絡が入ってきた。

「つハーいキヨウわコクを、オとシタようダナ。さつソクダが、ツギはズーヌキキョウわコクをコウリヤクシテモラおうカ？」

アングが言ってきた。

さつき罷免しておいて、状況が変わるやころりと掌を返し命令を出してくる。

ヨディはほとほとこの人物が信用できなくなった。

無論最初から信頼などしていなかったが。

ヨディはこれを外部スピーカーに繋いで皆に聞かせた。

冗談じゃない！

俺達を殺す気か！

誰が行くものか！

兵士達の間に溜まっていた、不満、怒りが爆発した。

兵士達はアングに対して怒号を浴びせた。

「アング、この声の意味が分かるかい？ もう誰もあんたのために、戦いたくないとさ」

ヨディはそう言った。

「ぐぐぐ……おのレー！！」

悔しがるアング。

「ここに一つの座標があります。座標の主は、空にあり、常に動いているはずです。それは脳殻だけを乗せた、無人のサイコフライヤー辺りが適当でしょう。おそらくその正体は、アング、貴方の通信位置を特定させない、通信の中継器でしょう？ だが、もう一箇所の座標が分かれば、貴方の居場所も分かります。観念して降伏なさい」

「ぐぐぐ……」

「ヨディ。アベニ爺と、リイナから通信よ」

エフアールが言った。

「そつちにメインを繋いでくれ」

ヨディがそう言う。

『若、アングの居所が分かりましたゾイ』

「本当か？」

『座標を送りまする』

ヨディはアベニ爺から座標を受け取った。

「これは本当に頂上だ。頂上から始めればよかったのにな、爺」

『面目ない』

「いやいや、爺、悪びれる事はないですよ」

『先にリイナと二人で突入しますかのい？』

「いや、ちよつと待っててください。合流してからにしましょう。

アシユマ君！」

『なんだ？』

「これからアングの所に行きます。付いて来て頂けますか？」

『先に行つててくれ。用事が出来た』

「用事？ …… まさか」

『ああ、そうだ。アーヌだ』

アーヌは空中に浮かんでアシユマを見下ろしていた。

アシユマは左手を鬼虎の鯉口に添えてアーヌを見上げていた。

「アーヌ。俺は今忙しい。また、今度にしてくれんか？」

アシユマが言った。

「貴様の都合など知った事ではない」

「やらねばならんのか？」

「そうだ」

「我が飛ぶのは暗雲の空

戦の女神を犯してもぎ取る

その背の羽根は既に漆黑
我が背に添えて我が羽根に
そして散るかなこのわが身
禁忌を犯して我が翼となれ
ウイング」

アシュマはウイングの魔法を唱えた。

「行くか？」

アーヌが言い、

「それしかないであろう？」

アシュマが受けた。

二人は急上昇をし、遙か上空まで来た。

ドン！

ドン！

上空で激しい音と閃光が光った。

アシュマと、アーヌは二重螺旋のように交差しながら、剣を交え、
激しい速さで空を横切った。

そしてアシュマと、アーヌが剣を交えるたびに閃光と轟音を響か
せるのであった。

それは天空で妖しい光として広がりを見せ、見る者に畏れの念を
抱かせた。

「『この時、祝福されぬ命の者と対になる祝福されぬ命の者相見え
るだろう。この一対、空に予兆を残す。私はそれを見た。はなはだ
不吉である』空の予兆とはこの事か？」

ヨディは黒龍を駆りアシュマ達を追いかけた。
手勢の魔導機兵も、投降してきた魔導機兵も、一緒になって追
いかけた。

「我、血の盟約に従い、汝を我の側におかん。
我はそこに汝はここに、

無にして全、全にして無
無限の力、その一端を見せん
我を死の淵から救いたまえ
纏え漆黒の羽根
ブースト!!」

アシュマはこの斬りあいの中、切り札を切ってきた。
「なに! またブーストか!!」

アーヌは心の内で舌打ちをした。

「アアア又ウツ!!」

アシュマが叫んだ

アシュマは空中でアーヌを翻弄するように、上に下に、前に後に、
右に左に、そして斜めに攻撃を加えて行った。

だが、ルクルクの森で見せたような、会心の一撃と言つものはつ
いに見られなかった。

何が違うのだろうか?

アシュマがアーヌを攻撃するたびに空に予兆が走った。

アシュマは、ブーストの攻撃は、地上よりも空中の方が効果があ
ると、初めて気がついた。

だがブーストの効果も収まる。

アシュマは肩で息をしながら、後を振り返った。

ブーストでのダメージが大分軽減される様になった。

慣れてきたのだろうか。

『斬れ』はしなかったものの、アーヌは相当のダメージを負った。

アーヌは、

「そのブーストに頼る癖は直した方が良いな。いずれそれも効かな
くなる。今日の所はこれまでとする」

以前みたいに師匠のような言葉を残して、

「では、な」

立ち去った。

「無想の境地か……」

アシュマは呟いた。

その時カノン山の頂上が崩れ始めた。

そして知恵のドームが全容を現した。

「わ、ワレコソ、オウナリ」

知恵のドームの半球は電光を発生させた。

電光は半球の上でのたうつ蛇のように幾つも幾つも発生していた。アングは指を、指揮棒を振るうが如く、動かした。

激しい雷光が煌き、魔導機兵を何体かに直撃し、魔導機兵は爆発した。

「アーチエル様！ 急いで黒龍にシールドをかけてください。エファ、全魔導機兵に避難勧告を」

ヨディは言った。

「どこまで？」

エファールが言う。

「あの雷が届かない所までです！ どこまでかは分かりません！ 後アシュマ君への回線繋いで！」

「繋いだわよ」

エファールは、全魔導機兵に避難勧告を出し、ヨディはアシュマに呼びかけた。

「アシュマ君、聞こえますか？」

『聞こえるぞヨディ。どうした？』

アシュマは応えた。

「知恵のドームの足元にアベニとリイナがいる筈です。助けに行つて頂けませんか？ 今の所、あの稲妻……プラズマの奔流に対抗できるのは、アシュマ君を置いて他になさそうです」

「わかった！ 行ってみる」

アシュマは猛スピードで知恵のドームへと向かった。

それをアングは感知していた。

「ククク、ば力め」

アングが指を振るうと、稲妻がアシュマを襲う。

が、多少の衝撃は受けたものの、アシュマは至って平静で知恵のドームへと近付いた。

「バカな？ ナントもナイの力!？」

アシュマは知恵のドームの直ぐ足元にたどり着き、直ぐにアベニ爺とリイナを見つけた。

アベニとリイナは酷い火傷を負っていて、とても動ける状態ではなかった。

しかし、意識ははっきりとしていた。

「もう大丈夫だ。今、治療してやる」

アシュマはそう言い、治療を開始した。

「聖なる契約を交わし者達よ、

聴けよ、汝らの魂は救われん。

見よ、汝らの肉体は癒されん。

聖なる癒し、神の御手。

ヒーリングオール」

ヒーリングオールを二人にそれぞれかけて火傷を癒し、粗方治療した。

「後は黒龍でアーチエルに治療してもらってくれ。痕には残らんだろっ」

アシュマは言った。

「忝いアシュマ殿」

アベニが応えた。

アシュマは二人を抱え、黒龍に着いた。

ゴンドラで下りブリッジに降り立った。

「ヨデイ、二人を連れて帰った。火傷を負っていたが粗方治療を施してきた。もう少し治療が必要だが、アーチエル頼む。俺は又、知恵のドームに行く」

アシユマは言った。

「なぜ？ あんな危ない所へ？」

アーチエルが訊いた。

「アングからディーヌ王子を取り戻す。大丈夫。危険な事は何もない」

そう言っアシユマはゴンドラに乗った。

「ヨデイ、頼む」

「ハイな。アシユマ君、気をつけて行って来て下さいな」

ヨデイが行った。

「アシユマさま……」

アーチエルは不安顔だ。

「大丈夫だ、アーチエル。大丈夫だ二人の治療を頼んだぞ」

「はい。畏まりました。アシユマさまもご無事で」

そこにアンが来て、

「どうぞご無事でお戻り下さい」

と、言った。

涙声だった。

「わかった、アン。行つて来る」

アシユマはそう言った。

アンは涙が出そうになるのを必死で我慢していた。

アシユマはゴンドラで船外へ出た。

「我が飛ぶのは暗雲の空

戦の女神を犯してもぎ取る

その背の羽根は既に漆黒

我が背に添えて我が羽根に

そして散るかなこのわが身

禁忌を犯して我が翼となれ

ウィング」

アシユマは呪文を唱えると、一瞬羽のイメージが浮かび上がり、空へと舞い上がった。

アシユマのそれは蝙蝠の羽だった。

それは、見る者に禍々しいイメージを与えた。

一直線に飛ぶアシユマ。

アングがそれを感じせぬはずがない。

「コンどこそ、コロシてヤル」

アングが言う所知恵のドームのプラズマは天を突き、天からアシユマ目掛けて稲妻を落とした。アシユマはそれを避けたが何発かはアシユマを直撃した。

だがそれも、アシユマの念導境界面で光に変換され鬼虎へと吸収されて行った。

「オノレ、キカんの力!？」

そしてアシユマは、知恵のドームの入り口と思われるところに立ち、石の壁をアシユマは鬼虎をかざし吹き飛ばした。

それで内部へに通じる経路が出来た。

内部へ進んでいくと剣を持った兵士が押し寄せてきた。

アシユマは鬼虎を峰に返し、ばしり、ばしり、と敵兵たちを叩き伏せていた。

剣を叩き折る。

腕をへし折る。

頭に一撃を加える。

肩口を叩く。

腹に一撃を食らわす。

敵兵にそれぞれ一瞬の間に打撃を食らわせて行った。
アシユマの後には悶える兵の山が出来た。

アシユマは知恵のドームの中枢部へと来た。
「トマレ」

そう言う声が聞こえた。

部屋の中心を見るとアングが銃を片手にこちらに銃口を向けていた。

「分からないのかアングよ。銃は俺には無意味だ。銃を置け」

「ワカラないノはオマエのホウだ」

パン！

乾いた音がした。

アシユマは脚に灼熱感を覚えた。

「うつ！」

アシユマは太腿を撃たれていた。

「……！？」

「ナゼっテ、かおをシテルね。コノヘヤは、キョダいなネンのゾウフクき。いわば、コノヘヤゼンタイが、ワタシのネンドウキョウかイメン。さいシヨにキヅくベキだったナア。フフ……フハはハハはハハ……！」

「アング！ 貴様と言う奴は」

デイーヌ王子が飛びかかろうとした。

すると、取り巻きの女達がデイーヌを取り押さえた。

「離せ！ 離せっ……！」

「オロカナリ、でいーぬヨ。ククク」

意識がアシユマからデイーヌに向いた、その一瞬の隙を突いて、アシユマは棒手裏剣を投げた。

「ウツ……！」

手裏剣はアングの銃を持っているほうの肩に深々と刺さり、アングは銃を床に落とした。

もう片方の手で拾おうとしたその手にも棒手裏剣を突き立てた。

アングは立ち上がりこちらを向いたときに、ご丁寧に止めと言わんばかりに、無傷の掌にも棒手裏剣を突き立てた。

「確かに油断をしていたよ。アング」

アシユマは怪我の為、片足歩きにアングの方へ向かっていき、鬼

虎を納刀した。

「オ、オノレ！ アシユマ・あとー！」

「だが、これで終わりだ！ アング！」

アシユマはアングを一発ぶん殴った。

アングは吹っ飛び気を失った。

「手加減をしたつもりだったが、まだ強すぎたか？」

アシユマはアングを引き摺ったまま、王子の所へ行き、

「お迎えに上がりました。ディー又王子。さあ、帰りましょう」

手を差し出した。

「有難う。アシユマ殿」

ディー又王子が返した。

アシユマは先ず自分の足にヒーリングオールをかけた後、アングの顎にもヒーリングスフィアをかけた。

「何故？ 優しいですね、アシユマ殿」

ディー又は言ったが、アシユマは、

「本当に優しいかどうかは疑問ですがね。ふふふ」

と、笑った。

「女共はどけ」

アシユマは女共を蹴散らした。

女どもは蜘蛛の子散らすように逃げていった。

「我が飛ぶのは暗雲の空

戦の女神を犯してもぎ取る

その背の羽根は既に漆黒

我が背に添えて我が羽根に

そして散るかなこのわが身

禁忌を犯して我が翼となれ

ウイング」

アシユマはアングをぶら下げ、王子を抱えて山の麓まで降りてき

た。

それにあわせ移動してきた、黒龍号、ラヴァー二機。
トーガイアにゴハク。

その他の魔導機兵達……。

（この光景は前に予知した……）

そうデイーヌは思った。

『アング、お前は滅びるぞ。怒り狂う兵士達の中で。祝福されぬ命の者の手によって』

（この時の事だったのか）

アシュマは最初にデイーヌ王子にを地面に下ろして、自分はアングをぶら下げたまま皆が集まる場所へ、宙を移動して行った。

デイーヌ王子は皆に祝福され一際大きい兵士の肩に担がれた。

その時アングは眼が覚めた。

「なっ、ここはどこだ……！」

「カンロン山の麓だよ」

アシュマが言った。

「なっ！ は、離せ……！ お前など」

「離して良いのか？ 下を見る」

下には兵士達が怒りの眼をアングに向けて、待ち構えていた。

「なっ、まさか、お前、あそこにワシを叩き込もうという訳じゃないだろうな？」

「だとしたらどうする？」

「たっ、助けてくれ、頼む」

「戦場では、そう泣き叫ぶものが、幾人死んだと思っているんだ！
？ ふざけるな……！」

『アシュマさま！ 何を考えてらっしゃるんですか！ バカな事はおやめ下さい』

アーチェルの声が割って入った。

「アーチェル！ こやつだけは我慢ならん」

『駄目だ！ アシュマ君！ そいつを裁いていいのはアールヌーの

民とその被害に合った国の国民だけだ!」

ヨデイも割って入る。

「だから、こうして兵たちに裁かせようと……」

「駄目だアシュマ君! 司法に任せるんだ」

「くそっ!」

「くくく、どうやら公開処刑は出来なくなったようだな」
アングが見下したように笑った。

「くっ……」

「アシュマ君、一発だけ殴っていいですよ」

「済まない。ヨデイ」

「？」

アングが思う

その時、アシュマの右ストレートが、アングに決まった。
それを見てディーヌは

（ああ、予知だけが全てではないのだ）
と、思った。

終節 アン、恋の終わり

「あゝあ。俺もアングぶん殴りたかったなあ」

オルバニアンが言った。

ここはアールヌーの王宮。

いま、皆で酒盛りが行われていた。

「それを言うなら、私だってぶん殴りたかったわよ」

アルミナも言った。

「で、アングってどうなるの？」

「裁判にかけられます。でも多分、極刑は免れないでしょう」

ディーヌ王子が言った。

「兄上、改めてお帰りなさいませ」

レンヌ王子が言った。

「うむ。レンヌも大儀であった」

「ささ、難しい事は抜きにするね。たんと呑んで、たんと食べるね。杯は皆にいきわたったかね？ …………… それでは、この国の未来と

両王子に、乾杯！」

「乾杯！！」

皆の乾杯の音が響き渡る。

アシュマの左隣にはアーチエル、右隣にはアンが座っていた。

「全くアシュマさまッたら、危ない事はこれっぽっちも無いと言うから、お送りしたのに、帰ってきてみれば脚に大怪我。嘘つきにも程があります」

アーチエルが言い、

「そうですね。少しは待っている者の身にも、なっってくださいませ」

アンに叱られた。

「ヒーリングオールで直してきたから良いだろう？」

アシュマが言った。

「そういう問題ではありませんね」

「そうですね。下手をすれば、お命にも関わったかもしれないのですよ？」

「アシユマさまなど知りませぬ」

「わたくしも、もうアシユマ様のお世話など、致しませぬ」

「頼む。ステレオで叱るのは勘弁してくれ〜」

珍しくアシユマが弱音を吐いた。

クララテリアはじつと熱い視線をヨディに向けては溜息を吐いていた。

それを見てエファールが警戒した。

「まあまあ、エファ。そんな怖い顔しないで」

ヨディがエファをなだめようとした。

「なにが『まあまあ』よ。どうせ、一刻も早くあの女のところにも、行きたいんでしょう？」

（す、鋭いですねエファさん）

「貸しなさいよ、手酌でやるから」

「そんなエファさん、それ僕の方も入って……」

「じゃあ、はい。あげるわよ、それ！ アタシは、新しいのって来るから、それで良いでしょう！？」

「うつつ、エファさん……」

その時、ヨディとクララテリアは、目配せをしてひっそりと二人して出て行った。

アシユマはそれを目ざとく見つけ、

（また、ヨディめ悪い癖が出たな？）

と、思った。

（ん？ この気配は？）

アシユマは立ち上がった。

「……大体アシユマさまは……どうなされました？ 立ち上がって怒られたのですか？それだったら謝ります。どうぞお席について……」

……」

アーチエルは慌てた。

「いや、違う、違う。トイレ、トイレ」

アシュマは鬼虎を持って行ってしまった。

「トイレに刀とはおかしい……ですよねえ」

アンが言った

「やっぱりお怒りになられたんだわ」

アーチエルは半泣きになった。

アシュマは屋上に来た。

その気配の持ち主を追っていたらここに来たのである。

「待たせたな」

アシュマが言った。

「いや、それほどは待っていない。ご覧のとおりこちらは素手だが、お前はとうする？ 刀を遣うのか？」

その男が言った。

「いや、俺も素手でやらせてもらおう。名前は？」

「俺の名はロン……とでも呼ばせてもらおうか」

「ただのロンではあるまい。いや、それはいい。最近俺を狙っている輩がいるが、お前もその一人か？」

「……一応そういうことになるかな？」

ロンと名乗った男はそう言った。

「誰の差し金だ？」

「聞いて驚け。ノリトレア宰相、ガルマイン・デッドよ」

「そこまで話して良いのか？」

「構わん。どうせお前はここで死ぬ。じゃあ、始めるか」

「ああ」

二人は構えを取った。

ロンは片方の足を後に引き半身になって片方の手を引いた腰に。そして握りこぶしを作って、もう片方の手は、半身の前へ持って

きて手刀を作った。

（唐手か……？）

アシュマはそう思った。

対するアシュマの構えは脚は肩幅にとり両手はだらりと下げた構えをしていた。

隙だらけで、自然体と呼ばへなくもない、構えといえば構えといえなくもないものだった。

（バカにしているのか？）

ロンはそう思った。

そして、

「きえええええっ！」

奇声を挙げ走ってきた。

そして正券突き、下段回し蹴り、そして時たま、上段回し蹴りを織り交ぜてきた。

その上段回し蹴りが曲者で、最初は下段の軌道で入り、途中から素早く蹴り下ろしの上段回し蹴りになるのである。

さらに厄介な事に、その上段回し蹴りは、普通の上段回し蹴りの中に織り込まれるため、相手を昏倒させるだけの威力とスピードをもった普通の上段回し蹴りでさえ、フェイントになってしまいうという恐ろしさを、持っていた

しかもその攻撃は非常に正確で速く、そして重かった。

しかしアシュマは、攻撃のポイントを逸らさせる様にして、相手に好位置を取らせずに、ゆらり、ゆらり、と相手の攻撃をかわした。

ロンはこれに苛立ち、段々と荒い攻撃を仕掛けるようになっていた。

アシュマはこれを誘っていた。

ロンはイージーミスな攻撃で身体を一回転させてしまった。

アシュマはその隙を見逃さず、予め溜めておいた気を両手に振り分け、ロンの鳩尾と左脇の肋骨にそれぞれの掌底で発気の術を使った。

ロンは口から血を吐きつづくまった。

内臓と肋骨はイツたに違いない。

もしかして吐血は折れた肋骨が肺に突き刺さったものかもしれない。
い。

「まだやるか？それとも止めるか？今ならまだ助かるぞ」

「……情けなど……ごふっ……要らぬ！ この身体では長くはもた
ん」

「そうか。では来るか？」

「無論！」

そしてロンはアシュマに無言で突っ込んで行った。

アシュマは気を溜め、ロンの鳩尾に両の手の掌底で発気の術を食らわした。

今度こそロンの内臓はやられたに違いない。

アシュマは鬼虎を掴んできて、

「とどめが必要か？」

訊いた。

王宮の片隅で一組の男女が抱き合っていた。

ヨディとクララテリアだった。

「ダーリン。聞いて欲しい事があるの」

「なんだい？ クララテリア。言ってごらん」

「わたし、ダーリンとわたしじゃ釣り合わないと思うの」

「へ？」

「わたし、ダーリンに見劣りしていると思うの」

「は？」

「だから、わたし、女を磨いてきたいの。許して。ダーリン」

「はあ？」

「いつか又わたしがダーリンに見合う女になったら、お付き合いをさせて。それまでは待ってて欲しいの」

「あ、あの……」

「くるつと見回して分かったんです。わたしがみんなより全然見劣りしてる事が。同僚は皆人間として成熟した人たちだし、部下もわたしを信頼してくれる良い人ばかり。わたしは今まで何を見てきたんだろうって……」

「え、いや、その……クララテリアさん？」

「さよなら。わたしの愛しい人。また逢う日まで」

「おい——！」

そう言つてクララテリアは去つた。

その彼女、クララテリア・アルサ・エミルトンはその後、中將にまで出世。

ヨディとは別の男性と結婚。

仕事に愛に幸せな生活を送る事になる。

アシュマは酒宴の場に戻ってきた。

デーンと目が合い、ウイंकをされた。

王子には全てがお見通しらしい。

王子には微笑みで返した。

見ると暗く落ち込んでいる人間が二人。

アーチエルと、ヨディだ。

ヨディは分かる。

大方クララテリアにでも振られたのだろう。

それに対してご機嫌なのがエファールである。

さもありなん。

分からないのがアーチエルである。

何をそんなに落ち込んでいるのか。

アシュマは自分の席に帰つて来た。

「アーチエル、どうしたんだい？ そんなに落ち込んで？」
アシュマが訊いた

「アシュマさま、申し訳御座いませんでした。先程は言い過ぎました。どうぞお許し下さい」

アーチェルが言った。

「はあ？ 何のことを言っているんだ？」

「アシュマ様の帰りが遅いものだから、御自分は嫌われたんだと思
い込んでいるようなので御座いますよ」

アンが言った。

「そうなのか？ アーチェル」

「どうぞお許し下さい」

「お許し下さいもなにも、俺は、嫌ってもいないし、怒ってもいない。愛してるよ、アーチェル」

アシュマはアーチェルの頭を撫でてやった。

デイーヌ王子がサースー・ウィー師と共にサケとつまみを持って
やって来た。

アンが控えて後に行こうとした。

「控えるに及びませんよ侍女殿」

デイーヌ王子は柔らかく言った。

「アシュマ殿とはこうやってサシで吞んでみたかった」

デイーヌ王子がそう続けざまそう言いながら、サケをちびちびと
やっていた。

「そうですか。では吞みましょう」

アシュマが言った。

「どうでしたか？ 強敵でしたか？」

「なかなか」

「そうですか」

「屋上に遺骸があります」

「兵に言っ て片付けさせましょう」

「アシュマさま、何のお話？」

アーチェルが訊いた。

「なんでもないですよ。奥方殿」

デイー又王子が言う。

「奥方殿だなんて……わたくしちゃんとアシユマさまの……その……お嫁さんになれるんでしょうか？」

アーチエルが訊いた。

「なれますよ」

デイー又王子が答えた。

「どちらがどちらの家に入るんでしょう？」

「アーチエル。自分の未来には興味なかったんじゃないのか？」
アシユマが揶揄した。

「もうアシユマさま、からかわないで下さいまし。それとこれとは話が違います」

「どう違うのかが、分かん」

「まあまあ、アシユマ殿。貴方の未来が、わたしに、分からないようになっているのならば、近しい人の運命から、自分の運命を推し量るのも、一つの手かと思いますが？」

デイー又王子は言った。

「まあ、それがそう言うものであるならば」

アシユマはどことなく照れくさそうであつた。

「さもありなん、アーチエルとの結婚話なのであるのだから。」

「さて、どちらがどちらの家に入るか、ですね？」

デイー又王子はアーチエルの顔をじつと見つめた。

「アーチエル様、どうやら貴女がアシユマ殿の家に嫁ぐようだ」

アーチエルは

「まあ！」

そう言つて喜んだが、逆にアンは表情を曇らせた。

「侍女殿、そう悲観めさるな。貴女には貴女なりの、心のけじめのつけ方をするようだ。それも近い将来。本当に近い将来に。……そう、明日にでも。そして侍女殿、あなたにはあなたの幸せがある。アーチエル王女と一緒にアシユマ殿の家に入られるようだ。そこで一生穏やかに暮らすようだ。時たまハプニングが起こるようだが人

生の良いスパイスになるようだ」

「わたしもアシュマ様の家に……」

「ええ。話をアーチエル王女に戻しましょう。ハプニングは貴女にも降りかかるようだ。と、言うよりこれはアシュマ殿のハプニングのようだな。女性の影が何人……十何人が見える。アシュマ殿、今の内に過去の女性関係の整理をお勧めする」

「過去のといわれても覚えていないモノもある。どうやって整理しろと言うんだ？」

アシュマは困惑した。

「アシュマさまっ！」

「え？ は、はい？」

「過去の女性と、どのような関係を持たれたのかは知りませんが、一体何人ぐらいの方と、関係を持たれたのですか？」

アーチエルは眼を据わらせながら訊いた。

「え？ えー……二十三十人くらい？ かなあ？」

アーチエルはアシュマの二の腕を思い切りつねった。

「いてっ！！ 何するんだアー……チエル……さん？」

「多う御座います！」

アーチエルが大声を張り上げた。

こうして、宴もたけなわ。

夜も更けて行った。

アンはふと眼が覚めた。

皆と一緒に黒龍号へ戻ってきたのだ。

二度寝をしようとしたがどうも興奮して眠れない。

アンはアシュマのベッドブースへ行った。

何故かは分からない。

夕べはアシュマに親しくし過ぎたと思った。

もう二度と、仕事上での事以外話すまいと思っていたのに。

そして今、こうしてアシュマのベッドブースへ忍んで行こうとしている自分がいる。

「わたしは弱い人間だわ」

アンは一人呟いた。

アシュマのベッドブースへ来た。

ベッドブースは開かれていて、アシュマはいなかった。

トイレを見てもトイレにもいなかった。

勿論ブリッジにもいなかった。

後は外だけだ。

アンは着替えて外に出た。

アシュマはそこにいた。

朝の練習をしていた。

律動的に動く筋肉、均整の取れた身体、小気味よくリズムを取って動く肉体。

美しかった。

この世のものとは思えないほど美しかった。

アシュマがアンに気が付いた。

「どうした？ アン。こんな時間に……」

「あ、いえアシュマ様。気になさらないでお続け下さいまし」

「いや、もう終わった。中に入るうか？」

「いえ、もう少し外にいと御座います」

「そうか。じゃあ、こっちにおいで」

「？」

「もう直ぐ朝が来る。ここから見る朝の景色はそれはもう雄大な物だ」

アシュマはそう言った。

「そうですか」

次にアンが言った言葉は、少し意外な内容だった。

「アシュマ様。わたしを抱いて、空を飛んで頂けませんか？」

アシュマは少し考えた後、

「いいよ。おいで」

と、言った。

「はい」

アンは言つて、そしてアシュマに抱きあげられた。

「我が飛ぶのは暗雲の空

戦の女神を犯してもぎ取る

その背の羽根は既に漆黒

我が背に添えて我が羽根に

そして散るかなこのわが身

禁忌を犯して我が翼となれ

ウイング」

アシュマはアンを抱え上げ空へと舞い上がった。

朝焼けが見える。

美しいグラデーションだった。

感慨深いものがあつた。

その時朝日が差し込んできた。

目の前の景色が一変した

様々な色、様々な影、様々な陰影、そして様々な光。

砂漠があり、渓谷があり、大きめのオアシスがあり、雲があり、

空がある。

アンは再び涙が出てきた。

「アシュマ『さま』。愛しています」

アシュマはそれには何も答えなかったが、アンのキスは受け入れた。

「アシュマさま……」

アンはこの後、生涯を通じてアシュマとアーチエルに仕えることになる。

アシュマと三度の口付けと、たった一度の契りを胸に秘めて。

第七話
了

以下
続刊

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5690f/>

デュエリスト アシュマ 第七話 予言の都

2010年10月8日14時56分発行